

東方携帯獣

海老の尻尾

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

幻想郷に突如ポケモンが流れ着いた。賢者八雲紫はそのポケモンを使って幻想郷の住人達にポケモンバトル祭りを開催することを発表した。お馴染みのメンバーから意外なポケモンまで登場して白熱したバトルが始まる！

目次

第一話	最初のポケモン	1
第二話	問答無用の楽園の素敵な巫女	9
第三話	コミュニケーション	18
第四話	ルール説明	26
第五話	バトル、開始	34
第六話	四季映姫 v s 小野塚小町	44
第七話	櫻花の異変と嫉妬のパルスィ	52
第八話	最初の勝利チーム	61
第九話	幻想郷のジョーイさん	71

第十話	エースバーン v s マフオクシー	81
前編		
第十一話	エースバーン v s マフオクシー 中編	91
第十二話	エースバーン v s マフオクシー 後編	100
第十三話	仙人と仙人	109
第十四話	青娥と青娥	118
第十五話	鳩鶏鴉駒	128
番外編 1	ウツロイド追跡隊 v s レジロツク	136
第十六話	博霊神社の決闘	145
第十七話	エスパ―対決	153

第十八話 最弱のポケモンと最強のト

238

レーナー | 255話 残り二人 | 247

第十九話 むしタイプ統一パーティ

第二十六話 幕引き | 258

168

第二十話 vs ボーマンダ | 176

第二十八話 柔の戦い | 273

第二十一話 醸し出るカリスマ | 185

第二十九話 カウンター | 283

第二十二話 タイプ相性 | 194

第三十話 勝ち抜きバトル | 292

番外編2 ウツロイド追跡隊 vs レジス

第三十一話 急所と高火力 | 301

チル | 205

第三十二話 無言の通じ合い | 310

番外編3 ウツロイド追跡隊 vs レジア

番外編4 マフォクシーとカロス地方の

イス | 215

師匠 | 319

第二十三話 二日目の夜明け | 227

第三十三話 公平なバトル | 330

第二十四話 vs ニツ岩マミゾウ

第三十四話 あくタイプ | 338

第一話 最初のポケモン

「あゝ暇だわ。何か幻想郷中を巻き込んだ異変でも起きないかしら」

「もしそんなことがあっても出るのは紫様ではなくあの博霊の巫女とか普通の魔法使いです。出る幕はないかと」

畳に置かれた机に顔を乗せて退屈そうにしているのは妖怪の賢者八雲紫。彼女はこの平穏な生活に満足していなかった。もちろん平和なことに越したことはないのだがこう平和すぎるとは刺激を欲するようになってしまふ。特に幻想郷で起こる異変に関しては博霊靈夢や霧雨魔理沙などが対処するために関わることができない。だからといって自ら異変を起こすこともできないので暇な毎日を過ごしていた。

「そうよねゝ ねえ藍。その辺に面白い物落ちてないかしら」

「いきなりそんなこと言われましても……うん？ 何でしょうか。あれ」

紫の式八雲藍は邸宅の庭に黒い物体が落ちていることに気付き近づいた。大きさは50cm程だろうか。藍はそれに指を触れて正体が何か突き止めようとした。

「どうしたの藍？ 何かの木かしら」

「いえ、これは生物です……ですがこの世界の生物ではないかもしれません」

この幻想郷には人間、妖怪、幽霊、神などなど様々な種族の者が存在している。外の世界で忘れ去られたものが流れ着く世界。それがこの幻想郷である。しかし極稀に外の世界で忘れ去られていないにも関わらず入ってくることもある。この生物もその仲間だろうが膨大な知識量を有する藍の頭脳をもつても目の前の生物のデータはなかった。

「それは厄介ね〜 元の世界が分からないと帰すこともできないわね」

「う……………うん」

二人がどうしようかと考えていると目の前の生物から何か聞こえてきた。体の中心にあつたふくらみが開き、眼球が現れた。真ん中は目だったようだ。眠っていた体を起こして辺りをキョロキョロと見回した。

「……………どい、どい？」

「ここは幻想郷。忘れ去られたものの終着点よ」

「え、う、うわああ!!」

近くにいることに気付かなかつたのか驚いた声を上げた。目だけのフォルムのどこに発声器官があるのか藍は不思議に思った。

「落ち着きなさい。私は八雲紫、この幻想郷の創始者の一人。それでこつちが私の式、藍よ。それであなたのことを聞かせてくれるかしら」

生物は二人をじっと見つめていた。高ぶった気持ちを静めるために深呼吸をしていた。とは言っても口がないから深呼吸かどうかは分からないが。

「落ち着いたかしら」

「はい、失礼しました。僕はアンノーンと言います。ポケモン的一种です」

藍は首をかしげた。アンノーン、ポケモン。どちらも聞いたことのない単語であったからだ。

「アンノーン、ポケモンとは一体どんな種族なのだ？」

「種族、ですか。僕たちの世界では人間とポケモン、正式にはポケットモンスターといいますが、その二種類に分けられるので強いて言えば人間じゃない存在、ですかね」

モンスター、いわゆる怪物や妖怪の類なのだろうと藍は解釈した。正体が分かったところで次に聞きたいのはここに来た動機である。

「どうしてこの幻想郷に来たのか分かるか？ 今のところ敵意はなさそうだが」

幻想郷を支配しに来たのが目的ならば殺気が漏れるはずでそうなれば問答無用で消し炭になるがアンノーンからはそういったものは感じられない。だが念のため聞いておいた。

「いえ、それが歩いていたら突然目の前が真っ暗になって気が付いたらここに来たという感じで」

アンノーンが目線を向けると二人はすぐにあることに気が付いた。結界に違和感があつたのである。それと同時に安心もした。

「アンノーン、良かったわね。あなた元の世界に帰れるわよ」

「ほ、本当ですか？」

結界の歪みさえ分かればこの世界に入ってきた異物を元の世界に戻すことが可能である。一度も聞いたことのない異世界でも問題ない。

「じゃあ藍。帰す準備して」

「承知しました」

紫の命を受けすぐさま藍は結界の外に出す準備に取り掛かった。優秀なので五分もかからないだろう。

「それにしてもあなたって不思議ね。ポケモン、だったかしら。初めて聞いたわ」

アンノーンは人間とともに生活を暮らしていることや戦っていることなどを話した。さらに800種類以上ものポケモンがいることを知った。それを聞くと紫は「わるだくみ」をした。

「へえ、そんなにたくさんさんのポケモンを……ねえ。捕まえることも可能なのかしら？」

「は、はい。でも伝説と言われるポケモンはそんなに簡単じゃないと思いますよ」

「紫様。完了しまし……」

藍は紫のそのニヤケ顔を見て緊張が走った。そんな顔をしているときはろくでもない無茶振りをしてくるに違いないからである。紫と若干距離をとる藍。

「あら、流石優秀ね。そんな優秀な藍にはこれをあげるわ」

そう言って渡したのはある巻物。アンノーンから話を聞いてものの数秒で書いたようだ。訝しげに受け取って中身を開こうとした。

「待って。それは一分後に開けてほしいの」

「……分かりました」

普段と違う注文に不安が止まらない藍。一体自分は今から何をされるのだろうかと思っていた。

「待たせたわねアンノーン。これをくぐれば元のところに帰れるわ」

先程まで何もなかった空間に突如吸い込まれそうなダークホールが現れた。向こうの世界との結びつきが強くなった結果可視化できるようになった。

「心配するな。無事帰れると保証しよう」

「はい。短い間でしたがありがとうございます」

アンノーンが体の半分を曲げてお辞儀をした。これで帰れる。そう藍は思っていた。

「……別れるにはまだ早いわ!」

「えっ!?!」

その声を出したのはアンノーンではなく、藍だった。藍は紫に突き飛ばされてホールの中に入ってしまった。ホールは消え、そこに入るはずだったアンノーンは呆然と見ているしかなかった。

「え、ちよ……ど、どういうことですか？」

「ふふふ。ちよつといいこと思いついてね。それをあの巻物に書いて渡したのよ」

「いいことつて……？」

幻想郷の管理には賢さと強さと強大な性格の悪さが必要であると本人は考えている。その性格の悪さが凝縮された依頼を藍に託したのである。

「私の依頼はシンプルよ。アンノーン、あなたの世界にいるポケモンをすべて捕まえてきなさい。それだけ」

絶句していた。それと同時にこの世界の恐ろしさを感じた。ポケモンの世界の話について教えたのは紫に対してであり藍には伝えていなかった。つまり何の前情報もなしに未知の世界に放つぼり出しただけでなく、この世の誰も成し遂げていない難題にイタズラ半分でぶつける彼女はモンスターよりも遥かにモンスターであった。他の者もそうなのだろうかとアンノーンが思っても仕方がない。

「そ、そんなの無理ですよ。だって違う地方回るのにも何日もかかるんですよ。それに僕のところは田舎ですからそれよりももっと時間かかります」

「ああ、その辺は大丈夫よ。たとえ向こうで何百年かかろうともこっちに帰ってくるのは三分くらいだから」

浦島太郎の原理であり藍を突き落とす瞬間に設定をいじっていたのである。だがそれだけで無問題なわけではない。ポケモンを捕まえるにはモンスターボールという捕獲道具が必要でありそれすらもノーヒントで入手する必要がある。

「それに私の式なら大丈夫よ。見た目以上に優秀だから。だからもうそろそろ……」

紫が言いかけたとき、消えたはずのホールが再び現れ、そこから藍が排出された。

「ら、藍さん!!」

アンノーンが駆けよるもピクリとも動かない。死んではいないが疲労で動けないようだ。紫はザツザツと藍に近寄った。

「お帰りなさい藍。首尾はどうだったかしら?」

勞いの声もそこそこに様子も聞く。アンノーンはそれが信頼から来るものかどうかの判断ができなかった。

「は、はい……890種類どうにか捕まえてきました」

「は、890種類!? そんなにですか!」

アンノーンは古代から生きているポケモンでポケモン世界の事象に精通している。しかし文献や書物でしか見たことのないポケモンも多く、それらも含めて800種類以

上と言ったのである。だが本当にそれ以上の数を捕まえてくるとは夢にも思わなかった。

「あ、あのー藍さん。どのくらいかかりましたか？」

「時間か？ 1年だ。伝説と言われるポケモンは見つけるのに苦労したかな」

紫も恐ろしいが藍の方が恐ろしいと思った。たった一年でポケモン世界を制することができてしまったのだから。自分の数百倍強い伝説ポケモンたちをねじ伏せたその実力は紛れもなく本物であり、絶対に怒らせてはならないと誓った。

「それで紫様、巻物にあった通りすべてのポケモンの捕獲、及び主要な道具類を集めて参りました」

「あらー、流石ね。これでやりたいことができるわ」

紫は巻物にもアンノーンにもまだその目的を伝えていなかった。一体これだけのポケモンを捕まえて何をしようというのだろうか。

「さあ！ 祭りの始まりよ！」

アンノーンの疑問をよそに藍は察したようで負担が大きくなる未来にため息を吐いた。

第二話 問答無用の樂園の素敵な巫女

「祭り……ですか？」

アンノーンにはその言葉の真意が分からなかった。ニヤニヤした紫の顔を見てそんなにおぞましいことではないとは考えてはいた。

「ええ、この幻想郷には色々な者がいるからね。一人一匹ポケモンを持たせて近々ポケモンバトルを行わせようと思っているのよね〜」

おぞましいことだった。できるできない以前に町中大パニックになってしまうことが容易に想像できたからである。アンノーンはこの幻想郷の住人がどんなものか知らないがポケモンの世界のことは知っている。あの屈強な集団を野放しにして無事なわけがないからである。

「……大丈夫なんですか？ 皆が皆大人しいわけじゃないですけど」

「大丈夫大丈夫。選ぶのはポケモンの方だから」

「え？ ポケモンがパートナーを選ぶんですか？」

普通トレーナーがポケモンを捕まえてパートナーにする。その逆なんて元の世界でも聞いたことがなかった。モンスターボールで捕まえることで相手の力量を認めたポ

ケモンだけがその者の手持ちに加わる。その順序を逆にしては混乱を招くだけだ、アンノーンはそう考えていた。

「いきなり連れてきたからね。その上捕まえられるのもストレスが溜まるかと思ったしポケモンたちがパートナーを選ぶのもありじゃないかしら？」

紫には紫なりの配慮があったらしい。ポケモンたちのことを鑑みてのことのようだが藍は別のことを考えていた。

「じゃあ今からポケモンたちを調べて各地にばら撒くわね。藍、詳しく教えてちょうだい」

「了解しました」

それから藍は紫に全ポケモンのタイプ、レベル、特性、使える技、種族値等を詳細に伝えた。特に種族値は詳しい施設でしか分からないはずであるが一目見ただけで見抜いてしまうのが藍という九尾の狐である。

「……ふう、これで最後ですね。全890種類のポケモンでしたがいかがでしたか？」

「本当に沢山のポケモンがいるのね。じゃあモンスターボールを……」

「そう言われると思ってとりあえず1000個、用意しております」

後ろに隠していた大きな袋の中から大量のモンスターボールが出てきた。主人の考

えを先読みするのが式の役目である。

「藍さん、紫さん。あのく これからどうするんですか？　いくらポケモンたちが選ぶ立場にあるとはいえ暴れる可能性もありますけど」

「ふふ、そういえばあなたにはまだ言っていなかったわね。あなたに使える技があるように私たち幻想郷の住人にも能力があるのよ」

「そうなんですか!？」

「私は境界を操る程度の能力。その気になればこの世界からドロップアウトさせることも可能だから大丈夫よ」

さりと流したがアンノーンの見立ては間違っていなかった。超人的な藍よりもおぞましい予感の中していた。ひとまずポケモンたちを抑えることは問題ないらしい。

「よし、それじゃあ霊夢のところに行くわよ」

「そうですね。私たちだけで勝手に行うと異変扱いされて退治されてしまいますからね」

いきなり街中に未知の生物たちが現れると異変扱いされて博霊が動く。そしてそんなことができる、かつしそうなのは誰かと言われると真つ先に出てくるのは紫である——
—実際正解なのであるが——。そうならないように先に話をつけてくる必要があった。

「ほら、アンノーン。あなたもこちらに来なさい」

「え、あ、はい」

二人の背後には先ほど見たホールとは異なる穴が出現していた。無数の目のようなものが浮かんでおり、アンノーンにとっては親近感があった。ピヨンよその穴の中に入ると一瞬で景色が変わった。

「あれ？ ー(ー)は」

目の前には大きな鳥居が構えており近くには境内の掃除をしている巫女がいた。こちらを不機嫌そうに見つめておりズカズカと近づいてきた。

「はあ、今日は何の用よ」

箒の柄の先端を紫の寸前に突き出す霊夢。怯む様子もなくニコニコとした表情を崩さない。はた目から見ていただけのアンノーンの方がブルツとした。

「ふふふ。今日は面白い提案をしようかなってね」

「アンタがそう言うときははるくでもないことって決まっているのよ。却下よ却下。それよりさつきから気になっていたんだけど……」

霊夢がアンノーンを指差した。じっと見つめており思わず藍の後ろに隠れようとするアンノーンである。

「……何コレ。妖怪？」

「まあそんなところね。この子について話をしに来たの。上がったもいかしら」
「全く。お茶菓子は出さないわよ」

紫は霊夢にこれまでの経緯を説明した。ポケモンという存在がいること、それら全種類を捕獲してきたこと、そして幻想郷で祭りを開催しようとしていること全てを伝えた。

「なるほどね。事情は把握したわ。アンタ、えーつとアンノンだっけ？ 聞いているかもだけど一応説明しとくわね。私は博霊霊夢。この神社で巫女やっているわ。仕事は異変解決に妖怪退治よ」

「よ、よろしくお願いします」

深々とお辞儀をするアンノン。霊夢は目の前のポケモンと言われる存在にもいつも通りに対応していた。

「ねえ紫。気になったこと言っていない？」

「あら。何かしら」

「ポケモンの世界はよく分からないけどここにいる連中も相当我が強いわよ。そんな奴らが素直に応じるかしら？ それにどうやって皆を巻き込むつもり？」

幻想郷の連中はいつもこいつも気まぐれに異変を起こそうとする者ばかりであり

プライドが高い。得体の知れない相手といきなりタッグを組もうと思わない。それに祭りに参加させる動機もない。

「もちろん嫌なら断っていいし、報酬も出すわ」

報酬の単語に霊夢はすかさず反応した。

「報酬？ それってお金？ それとも食べ物？」

「それは秘密よ。言ったら面白くないじゃない」

「ふーん。あ、そう。まあ最近はあまり大きな異変もなかったし暇つぶしくらいなら付き合ってもいいわよ」

「素直な子ね。あなたは」

唇に指を重ねウインクをする紫。妖艶な仕草だが中身がトス黒いことを理解している霊夢にとつては胡散臭さしかなかった。だが根が自信家の霊夢は負ける気がしなかったので断る理由はなかった。

「それでいつ始めるの？ それに皆にルール説明とかどうやってやるの？」

「それについても問題ないわ。ルールが確立したら全員に私から伝えるから」

「あれ？ あのブン屋は使わないの？」

「ええ。折角だし天狗も河童も裏方じゃなくて参加させたいしね」

紫のことだから面倒事などはそのあたりに押し付けるかと思いきや自分自ら引き受

けるらしい。その周到さにかなり違和感を感じた霊夢だった。

「でもどうやって？ アンタと藍だけじゃ流石にできないでしょ？」

「それについても抜かりないわ。この子に手伝ってもらうから」

紫は藍の持っていた袋からおもむろにモンスターボールを取り出した。上空に放り投げるとその中から光とともに何かが現れた。茶色い体に帽子のようなものをかぶっておりフワフワと浮いていた。

「紫。もしかしてこれもポケモン？」

「そうよ。オーベムっていうのよ。かわいいでしょ、私の相棒ポケモンなの」

「どうも。私はオーベムと申します。私の特性テレパシーでこの幻想郷の皆様には言葉をお伝えしますので問題ありません」

丁寧な口調でオーベムは霊夢に挨拶した。傍で聞いていたアンノーンは目を丸くしていた。ともに行動していたはずなのに一体いつの間に話をつけていたのだろうか。もしかしたら来る前に事前に話していたのかもしれない。

「まあいいわ。それじゃあオーベム、だったっけ。紫をすっかり監視して頂戴ね」

「お任せください」

初めて会ったものよりも信頼されていないことに軽く悲しくなった紫だったが霊夢は無視して話を続ける。

「じゃあ私も何かポケモンに選ばれないといけないわけ？」

「ええそうね。でもあなたを選ぶポケモンが果たしているかしら」

世界が変わっても強者のオーラは不変であるらしい。モンスターボールの中から萎縮の感情が伝わってくる。世界を創造したとか時空を司るとかいったポケモンがビビッてしまっている。ポケモンが選ぶと言ってもあまりにも格が違うトレーナーを選ぶのはどうしても躊躇してしまうようだ。

「正直私は誰でもいいんだけどね…… じゃあアンタ」

霊夢が指をさしたのはとあるモンスターボール、ではなくその外に出ていたアンノンであった。

「ちよつと霊夢？ あなたは選ぶ方の立場なのよ。あなたが選んでも仕方がないんだけど？」

「埒が明かないから仕方ないわ。どんなポケモンでも私がみっちり鍛えてご褒美は頂くわ」

モンスターボールから安堵の音が聞こえた気がした。皆直感でしごかれることが分かっていたのだろう。だからこそ皆消極的だったのだ。いきなりルール違反だがこの問答無用の樂園の素敵な巫女には関係ない。アンノンは霊夢に呼ばれて前に出てきた。

「じゃあこれからよろしくね。アンノーン」

「……はい、お願いします」

ここで拒否したらどうなるかぐらいは“きけんよち”で察知することができていた。大人しく従うしか道はなかった。こうしてアンノーンは霊夢の手持ちになった。

第三話 コミュニケーション

アンノーンが霊夢のパートナーになったとき、博霊神社の周辺ではある二人が談笑していた。

「それでよ、私はアリスに怒られちゃってな！ あのときは死ぬかと思ったぜ」

「それは魔理沙さんが悪いですよ。土足で家に入っていくから」

「確かにな。次からは善処するぜ。おい、霊夢いるか？」

「また面倒なのが来たわね……あれ？ あうんも一緒だったのね」

「はい、買い出しの途中に偶然出会いました一緒に来ちゃいました」

霊夢の前に現れたのは霧雨魔理沙。普通の魔法使いである。霊夢とともに異変解決に赴くプロフェッショナルであり時々神社に遊びに来る。そしてもう一人は高麗野あうんである。博霊神社の狛犬であり霊夢によく懐いている。自ら率先して手伝いを行うことが多い、先ほどまで人里へ行きお茶菓子を買に行っていた。その愛くるしさから人里でもマスコットの人気であり、買い物に行くときほとんど毎回サーブスでおまけをしてくれる。そのことに味を占めた霊夢は最近専らあうんに買い物任せしている。

「ん？ 紫と藍も一緒なのか。いやそれよりもその巨大な袋と見たことない妖怪たちは

何なんだ？」

魔理沙は大量のモンスターボールとオーベムとアンノーンを指差して尋ねていた。黒と茶のフワフワした未確認生物に釘づけであった。だが不気味がっているあうんとは対照的に魔理沙はわくわくしていた。好奇心の強い魔理沙にとって見たことのない事象は興奮の対象となりうる。それは元来の性質なのか魔法使いという職業病によるものなのかは分からないが徐々にそれらに歩を進めていた。

「丁度いいわ。アンタたちも聞きなさい」

霊夢は魔理沙とあうんを呼び寄せた。そして二人は紫から同様の話を聞いてすぐに理解して参加を決意した。やはり血気盛んなものが多い。

「さて、じゃあ私は誰を選ぶのか、じゃなかった。誰に選ばれるんだろうな……」

魔理沙がモンスターボールの入った袋を見るとそこには数多くのポケモンたちがすでに出ておりランランとした目をしていた。

「魔理沙！ 俺とパートナーになってくれ！」

「いや、俺だ！」

「私よ！」

「俺が行こう」

「な、なんだなんだ!! ちょっと待っててくれ！」

さっきまでビビりまくっていたポケモンたちが嘘のように積極的になっていた。こおりのようにクールな巫女とは違い、こっちは温かみを持ち、なおかつ同等の力を持っていることを感じていたので群がるのも無理はない。なおこの間キレていた鬼巫女と目を合わせたのはアンノーン以外一匹もいなかった。

「あらあら魔理沙モテモテね」

「何呑気なこと言ってるんだ紫！ おい助けてくれあうん！」

「え？」

魔理沙があうんに助けを乞うた。しかしあうんは一匹のオレンジ色の犬っぽいポケモンをワサワサ撫でていた。

「すみません魔理沙さん。私ルガルガンとコンビ組むことになりました」

「よろしくなあうんよ」

「あ、はい！」

あうんのヘルプがなくなってしまうので諦めて一匹ずつ見ていくことにした。面倒だがその分強いポケモンが来てくれるだろう。

「俺はグラードン。ホウエン地方の陸を創ったポケモンだ。ゲンシカイキもできるし俺と手を組めば優勝間違いなしだ」

「そんなでかいサンドじゃ到底無理よ。私ゼルネアスのように強いフェアリーがあなた

には相応しいわ」

「儂ランドロスは別の世界では覇者として君臨しておる。お主には儂が必要じやろう」
様々なポケモンたちが我先にと自己PRをしていた。魔理沙を選ぶのは確かに英断ではあるがさつきまでビクついていた様子を見ていた霊夢にとつては滑稽にしか映らなかつた。

「んー。どいつも確かに強そうだが私のファイリングには合わないな…… あ！ お前に決めた」

魔理沙は並んでいたポケモンたちの波を押しつけ後ろにいたピンクのフォルムのポケモンの頭を撫でた。

「え、俺!？」

伝説ポケモンたちがひしめき合う中でまさか自分が選ばれるとは思わなかつたのだろう。モンスターボールによく似たきのこポケモン、モロバレルだった。いつも眠そうな目がシャキッと開いた。

「お前面白そうだし私と組もうぜ！ な？」

「あ、ああもちろん嬉しいが」

モロバレルにとつてはとても都合な話である。だが周りの目が恐ろしい。数ある伝説ポケモンたちを押しつけて選ばれたのだから嫉妬もひとしおである。特にあそこ

にいる空間を司るシンオウの伝説さんは嫉妬ですつとパルパルしていた。

「うむ。それでは皆決まったようだな。それでは明日くらいに祭りの詳細を話すからしっかりと聞いておくように。私と紫様はオーベムと一緒に色々決めることがあるのでパートナーポケモンとコミュニケーションをとっておくように。それでは」

「じゃあね〜 楽しみにしてるわ」

藍と紫、それからオーベムはスキマで帰ってしまった。神社に新たに三匹のポケモンが加わった。

「とりあえず歓迎するぜアンノーン、ルガルガン、それからモロバレル！ 軽くだけど宴会しようぜ！」

「ちよつと何勝手に……」

「いいですわ魔理沙さん！ 親睦を深めるのは大事ですから」

あうんも魔理沙側に付き二対一となってしまうのでこれ以上反論するのは止めた。

「はあ全く……じゃあアンタたちも手伝いなさいよ。当然アンノーンたちも」

「わ、分かりました！」

いきなり連れて来られて宴会に参加、またその準備までもさせられた。アンノーンたちはポケモンの世界よりも苛烈な世界で生きなければならぬことを覚悟した。

宴会が始まっておよそ一時間。酒と食事を交わして三人と三匹はほとんど打ち解けたようである。あうんとルガルガンは同じ犬同士気が合うようで髪を撫でたり撫でられたりしていた。幸せそうな二匹を魔理沙は酒の肴にしていた。

「ハハ、あいつらもうどつちがポケモンか分かんねえくらいだな」

「そうだな。あ、魔理沙もう一杯飲むか？」

「おう、悪いな。それにしてもお前見た目通りキノコとかに詳しいんだな。今度魔法の森に珍しいキノコあったからちよつと見てくれよ」

「まあいいが俺の世界とここの世界のキノコが一緒かは分からんぞ？」

魔理沙とモロバレルはキノコトークで盛り上がって距離も近づいている一方、もう一組は居間にいた。

「す、すみません。霊夢さん……」

「気にしなくていいわよ。むしろ無理矢理飲ませたこつちが悪いんだし」

アンノーンが下戸であることを知らずに酒虫酒を飲ませた霊夢は倒れたアンノーンを介抱していた。どこが口か分からないが一口飲んだだけで体中が赤くなるのではなく、色違いのように青くなり目を×マークにしていた。

「僕は気にしないで宴会に戻って大丈夫ですよ……？」

「別に遠慮なんかしてないわよ。それにアンタとも少し話したかったし」

「え、僕に？」

「さっき紫から話聞いていたけど、どうしてアンタだけがこっちに紛れ込んできたかが分からないのよ。幻想入りする存在は多少いるから偶々と済ましてもいいんだけどね。こう、悪い予感がするのよね」

博霊の勘の的中率はほぼ100%であり、様々な困難も勘で乗り越えた実績があった。それが気になった霊夢はアンノーンに漏らしていた。イレギュラーすぎてやや慎重になっているのかもしれない。

「まあどうせ紫絡みだろうし、何か起きたらとつちめればいいか。悪かったわね、余計なこと喋っちゃって」

「い、いえ」

アンノーンはこの短い時間だが博霊霊夢の人間性が見えた気がした。強力で冷たい一面も確かに持っているが根が良い人だということだ。こうしてあったばかりの未知のポケモンという生物にも優しく自主的に看病をしてくれている。さっきまでの皆の会話でも霊夢がこの中心にあることは誰が見ても明らかであった。不安さはもちろんまだあるが信用できない人間ではないというのが分かった。

「霊夢さん」

「ん、何よ」

「僕頑張ります。絶対優勝しましょうね」

「……ええ、当然よ」

霊夢とアンノーンはお互いにつこりと微笑み、こちらもしつかりとコミュニケーションをとることができた。

翌日、紫、藍、オーベムは昨日十二分に考えたポケモンバトルのルールを見直していた。机一杯に広げた紙を端から端まで目を通していた。

「これでおそらく不平等にはならないかと思えます」

「ええ、そうね。それじゃ始めましょうか」

オーベムと藍は紫にサイコエネルギーを送り幻想郷全土に届くほどの思念波を飛ばした。オーベムが来たことで今まで狭い範囲でしか効果がなかったのが広い範囲にまで届かせることができた。実際オーベムが居なくても複数回に分けて念波を飛ばせば面倒くさいのでオーベムの力を借りたのである。

紫は全住人にひっかかったことを確認してから話し始めた。

第四話 ルール説明

幻想郷には霧で覆われた湖があり、その先には血よりも紅い館、紅魔館がそびえ立っている。幻想郷の一大勢力の一角であるその館の主人、レミリア・スカーレットは今日も暇を持て余していた。

「ふう。今日も退屈ね。ねえ咲夜、ちよつと異変でも起こさない？」

「そんな軽々しく起こさないで下さい。また霊夢たちが出しゃばつてきますよ」

紅魔館の瀟洒なメイド、十六夜咲夜は今日も主人の相手をしていた。幻想郷の大物は隙あらばすぐ異変を起こそうとする。もちろん本当に起こしてしまえば返り討ちに遭うのは目に見えてはいるのだが。それくらい暇なのである。

「はあく何か面白いことが……ん？」

レミリアは背中中の羽で何かを感じ取った。念波のようなものであり、それは当然傍にいた咲夜も感じていた。送り主は確認しなくても分かっていた。胡散臭さが桁違いだったからだ。

『はあくい。皆聞こえてる？ 皆のアイドル八雲紫ちゃんですよ 今日皆に面白い

ことやってもらおうと思ってるのよね〜」

「……何言ってるのかしらこのババア」

レミリアがぼそりと呟く。しかし暇つぶしになるのならば聞いてやらんでもない。そう考えたレミリア及び咲夜は耳を傾けた。

『ポケモンっていう生き物がこの幻想郷にやって来たのよ。彼らは元の世界ではとても強くてそれでいて人間たちと手を取り合っただけで暮らしてきたわ』

「あら。人と手を取り合うなんて素晴らしいですね。私たちも見習いたいくらいです」
「聖の理想ですものね」

命蓮寺と呼ばれる寺の中で一人の坊さんが聞こえてきた声に感心していた。彼女の名は聖白蓮。人と妖怪がともに暮らす生活を夢見ている。その様子を見ていた毘沙門天の代理、寅丸星はにこやかにほほ笑んでいた。彼女もまたポケモンというものに興味を持っていた。

『一週間後、皆にはこのポケモンたちと一緒にバトルをしてもらうわ。参加はもちろん自由よ。興味なくてもとりあえず今からルール説明するわね』

「バトル……ですか。あまり戦うのは得意ではありませんね……」

「心綺楼とか深秘録で獅子奮迅の振る舞いをしていたのはどこの誰ですか？」

自身はそう言っているが聖の格闘センスは相当のものである。隣で見ているからこそお前が言うな状態である。だが一緒に戦うとなると別問題かも知れない。相手のことを考えながらだからいつもと勝手が違うかもしれないと星は考えていた。その後も紫はポケモンにまつわる基本的なことを享受していた。

『以上で説明は終わりよ。この説明が終わったら幻想郷中にポケモンたちを放つわ。ポケモンたちがこの人だと決めたと思ったパートナーは捕まえるかどうか考えることができるわ。あくまでも勝手に捕まえたりしないでね。あ、暴れたりするポケモンはスキマ送りにするから安心してね』

紫の一言で多くの住人が安心した。それは主に妖怪たちではなく人里に住む人間たちにとつてである。幻想郷では数々の異変が起き、いつ巻き込まれるかヒヤヒヤしている。しかし、霊夢や紫などの「大丈夫」の一言で皆安心する。それほど絶大な信頼を勝ち得ているのだ。

「ふむ。どうやら人里はそんなにパニックにはなっていないようだな」
「そうね。私たちが出る必要はなさそうね」

人里を闊歩して平穏が保たれていることを確認する歴史喰いの半獣、上白沢慧音。そして不老不死の蓬莱人、藤原妹紅。二人とも口には出さないがウズウズしている。よつ

ぼど闘いたいのだろう。それほど今の幻想郷は娯楽に枯渇している。

『一人一匹だけだからね。あと優勝者には豪華景品があるから楽しみにしててねー』

「ほう、景品か。賞与ならばぜひ寺子屋の改築を頼みたいものだな」

「あー、やんちゃな子が多いもんね。というか慧音がその子たちに頭突きかましたときの衝撃で壊れるんだけど」

「それは仕方ない。しつけどからな」

慧音は寺子屋に通う言うことの聞かない子どもたち相手に勉強を教えている。その際によく破壊してしまうのである。体罰と言えばその通りなのだが幻想郷にはまだその考えが浸透していない。

「まあ私は景品とか興味はないけどその、ポケモン？ とやらにも会ってみたいわね」

「だが今しがた放ったところだ。そんなにすぐは来まい」

幻想郷は狭いようで広い。いきなり人里のど真ん中には来ないだろうと二人は高を括っていたが二つの大きな影によつてその甘い考えはかき消された。その大きな黒い影は妹紅と慧音目がけて猛スピードでとっしんしてきた。

「な、何よいきなり!?!」

土煙が晴れるとその中からは二匹の鳥が現れた。一方は七色の羽を持つ優雅なにじいろポケモン、ホウオウ。またもう一方はシンプルな白と青の二色だけで構成されたせ

んすいポケモン、ルギアだった。二匹は羽を折りたたむとじつと二人を見つめていた。

「そのの……赤い服を着た者よ。我はホウオウ。我と契約を交わしともに優勝の頂を目指さぬか？ お主からは膨大な力を感じる。我も全霊をかけて尽力しよう」

「つたく、お前は相変わらず面倒な喋り方だなあ！ おい、そのもんぺ。俺様はルギア。お前俺のパートナーになれ！」

堅い口調のホウオウに対しオラオラ口調のルギア。真反対の二匹だがどちらもジョウト地方の伝説ポケモンである。その二匹から同時に申し込まれているこの状況に妹紅はアタフタしている。

「おー、どっちも強そうだな。おい妹紅、私はあつちでポケモンを探してくるせいぜい頑張るんだなー」

「え、ちよ、ちよつと待ってよ慧音ー！」

妹紅のすがるような目などお構いなしに慧音はほくそ笑みながら去って行った。妹紅をからかうのが楽しみの一つになっている慧音は助けることはしなかった。慧音の助けがなくなったら妹紅はどちらかを選ばなくてはならなくなった。しかし会ったばかりの二匹のことなど何も知らない。妹紅は色々聞いてみることにした。

「え、ええつと。二匹はどうしてそんなにバトルに参加したいの？」

「あ？ そんなの決まっている。俺とこいつのどちらが強いかはつきりさせるためだ」

「我ら二匹ははるか昔から競い合ってきた。純粋な技比べからトレーナーを交えた戦い。飛行速度やその他諸々である。正直我は競う必要はないと言っているのだがどうしてもこやつがうるさくてな」

「それはそうだろ。上下関係ははつきりさせておきたいのが俺の性分だからな」

「へ、へえー……」

昔から競い合う関係。それは自分とよく似ていると妹紅は感じていた。その相手はもちろん永遠亭にいる月のお姫様である。自分と同じ蓬萊人であり、ことあるごとに妹紅に喧嘩をふっかけてきていた。ホウオウたちとは違い妹紅の方からも仕掛けることはあるが妙な親近感を抱いていた。

「あら。面白そうな子たち。じゃあ私はその白い方をパートナーにしようかしら」

「げっ！ 輝夜。あなたいつからここにいたのよ」

「うふ、そんなことに気付かないなんてまだまだ未熟ね」

「な、何よー！」

妹紅の背後から気配もなく出現したのは蓬萊山輝夜。妹紅の永遠のライバルである彼女はいつも通り挑発していた。しかし妹紅が気が付かないのも無理はない。普段はてゐや鈴仙、永琳などと行動を共にしているが今は単独でこの人里にいる。姫という立場で単独行動するのは余程のことなのである。

「おいおい、なんだその嬢ちゃん。勝手に横に入ってきてやがって」

「あら悪いわねルギア。でもあなたにとつても悪い話ではないと思うわよ。私と手を組めばホウオウを倒せるわよ?」

「……お前は強いのか?」

「妹紅より下だとは思っていないわ」

「……なるほどその話に乗ろう。輝夜? だったか」

「蓬萊山輝夜よ。気軽に輝夜と呼んでちょうだい」

「フツ、輝夜よ早速作戦会議だ。じゃあなホウオウ! 一週間後を楽しみにしておけ!」
ルギアは背中に輝夜を乗せ永遠亭の方角に向けて飛び立った。人里に残されたのは妹紅とホウオウ。お互いチラチラと見ていた。いきなり宣戦布告されて去られてしまったのだがそもそもまだホウオウを相棒ポケモンにすると決まったわけではない。

「……じゃあホウオウ。手伝ってくれる?」

「よ、よいのか?」

「私も戦うのは嫌いじゃないし。それにあの子が関わってくると面倒なことになりそうなのよね」

妹紅は長年の経験からあのルギアと輝夜が似たタイプであると予感していた。競う相手がいるとどんどんパワーアップしそうな感じがそっくりだったのである。いいコ

ンビになると思っていた。

「だからホウオウ、私たちも作戦を練るわよ。敵は妹紅たちだけじゃない。色々な相手と戦えるようにするわよ！」

「……うむ。これから楽しくなりそうであるな。よろしくな妹紅」

妹紅もホウオウに乗り人里から飛び去った。その場に残ったのはすでに仲間のポケモンを見つけた慧音だけであった。

「なんだもう行ってしまったのか。つまらないな。なあ、ミルタンク？」

「ええ、そうね。でもあの二匹を手懐けるなんて中々の力の持ち主ねあの二人」

同郷のミルタンクはホウオウとルギアを仲間にした二人の力量を測っていた。

第五話 バトル、開始

紫からの祭りの催しが発表されてから一週間が経過した。血気盛んな人妖たちとポケモンたちは瞬く間にコンビを組み、各々技の特訓に励んでいた。火力を追い求める者、スピードを極める者、はたまた防御力に特化したものなどポケモンやトレーナーの性格によつてさまざまであつた。そして迎えた午前八時、再び紫とオーベムの念波が全住人に届いたのである。

『は〜い。皆あれから元気にしていたかしら？ 今から第一回幻想郷ポケモンバトル大会を始めるわよー!』

紫の声を聴き参加者たちの多くは心の中で叫んでいた。何しろ平和で暇すぎたのだから戦えるこの日を楽しみにしていたのである。また豪華賞品が目当ての者もあり、思惑は様々だが皆耳を傾けていた。

『それでは今日のルールを私八雲藍が説明する。まず、一番大事なことだがトレーナーが弾幕で応戦するのはなしだ。トレーナーはあくまで指示するだけだ。そうしないと鬼とかが圧勝してしまうからな』

「ちつ、だめなのか。折角鍛えたのによ」

旧都で舌打ちをする鬼の四天王の一人、星熊勇儀は隣にいた水橋パルスィに悔しそうに呟いた。

「そりやそうでしょ。あくまでゲームなんだからリアルファイトは禁止よ」

「でもよ。戦うんなら生身が一番だぞ？」

「相変わらずの脳筋ね。それに私たちのポケモンどっちも伝説でしょ？ 強さは申し分

ないんじゃないの？」

「いや勝負は何があるか分からないからな。油断はしないで越したことはない」

語られる怪力乱神でも決して驕ることなく物事に挑む。以前手合せした普通の魔法使いに敗れてからハチマキを締め直した勇儀であった。

『次にトレーナーのタイプ相性を今から配る。それと自分たちのポケモンたちが合致しているかどうか確かめてくれ』

ポケモンたちだけでなく幻想郷の住人達にも当然タイプというものがある。たとえば藍ならばエスパー・はがね。紫ならばあく・エスパーといった具合である。藍の手持ちはもちろんキュウコンでありほのおタイプなので別段変化はなし。しかし紫の手持ちはエスパータイプのオーベムなので力は1.5倍になる。もしもカラマネロだったとしたらその力は2倍になっていたということである。ポケモンとの出会いの運もこ

ここで関わってくる。もちろんたとえ2倍でも元々の自力があるほうが有利なことに変わりはないが。皆頭の中に浮かんでくる自身のタイプを知った。ポケモンと照らし合わせて一致した者、不一致だった者様々であった。

『次にこの戦いはチーム戦で行う。チーム分けはこちらであらかじめ決めておいた。今から一分後それぞれの陣地に転送させる。私からの説明は以上だ』

『それじゃあ頑張つてね〜』

紫たちからの連絡が終了すると多くの者は動揺していた。何しろサシで戦うものだと皆思っていたからである。チームで一緒に戦いたいと思っていた者もいるが自由に選ばせてはくれないようである。そんなことを考えていると参加者たち全員の足元が光りどこかに転送されてしまった。

「ん……？　ここは旧都か。私たちはここで戦うってことか？」

旧都に転送されたのは魔理沙とモロバレル。二人は旧都チームとして戦うことになる。もちろんここに送られたのは魔理沙たちだけではない。

「なんだい私は魔理沙と同じ仲間ってわけかい」

魔理沙が後ろを振り向くとそこには一本角がそびえ立つ鬼が居た。

「おー、勇儀と一緒にか。異変以来か？ よろしくな！」

「ああ、こちらこそな」

二人が固い握手を交わすと前後横方向から人が近づいてきた。

「へー、珍しい組み合わせじゃないか」

「……あまり見たことない人ばかりね」

「祭りと言えどモラルに反しないよう目を光らせておく必要がありそうですね」

夢幻のパーカッションニスト、堀川雷鼓。鬼傑組組長、吉弔八千慧。そして白黒つける裁判長、四季映姫・ヤマザナドゥが今回のチームの組み合わせのようだ。およそ五人一組のチームであるようだが皆同じことを考えていた。あまり関わり合いがないという共通点がないと。以前からの知り合いという関係では魔理沙と勇儀くらいで他は特にない。全員金髪かと思いきや閻魔様は緑色である。

「面白そうなメンツだな！ じゃあ皆よろしくな」

その異変解決件数は伊達ではない。その中で培ってきたコミュニケーションスキルでリーダー役に率先してなるうとした。もう一人の主人公の力は絶大であり皆魔理沙の方をしつかりと向いていた。

「で、そこにいるのがアンタのパートナーってわけかい」

雷鼓は魔理沙の隣にいるモロバレルを指差した。よく見ると魔理沙以外は皆ポケモ

ンをモンスターボールに戻していた。

「ああそうだ。モロバレルっていうんだ。仲良くしてやってくれよ。残念ながらタイプ不一致だったけどな」

魔理沙はノーマル・エスパーでありモロバレルはくさ・どくタイプであるためこの戦いにおいて恩恵は得られない。

「タイプ一致じゃなくて大丈夫なの？」

「ああ！ 火力に特化してきたからな！」

「俺耐久の方が自信あるって言ったんだけどな……」

八千慧が心配そうに聞いてきたが魔理沙にとっては些細なことらしい。C特化にしたらしいがモロバレルの意志は考慮されなかったようだ。

「諦めなさいモロバレル。魔理沙を説得させるのは私でも骨が折れる所業です」

「お前も大変だな」

「あ、ありがとうな」

モロバレルは他のメンツたちからの同情を買った。実際この一週間は特訓漬けの毎日だった。元々覚えている技をより高火力のものに変えたり回避力を上げたりと大変だった。もちろん魔理沙も同様の特訓をしていたので二人の信頼関係は絶大のものとなっていたので同情される必要はないとモロバレルは思っていた。

「そういえば皆のポケモンも見せてくれよ」

「そうだな、私のポケモンは……」

勇儀がタイマーボールを手にし、放ろうとしたその瞬間頭の中に声が流れてきた。

『皆集合した頃かしら？　じゃあ第一試合を始めるわよ。First Round 第一試合は……旧都チームと三途の川チームよ。場所は旧都でするから準備していてね』

「旧都チームって、私たちのことか？　それに三途の川チームって誰だ？」

三途の川はこの世とあの世の境。来そうなのは小町かと予想していた。四季映姫が先ほどから落ち着かない様子なのは小町が来ると考えているからだろう。だがそれ以外は見当がつかない。

約五分後、道のど真ん中にいる旧都チームは道の奥側からやってくる集団を目にした。だがその面々は予想に反していた。数は六人でこちらよりも一人多く、その中にはつい先ほどまでここにいた人物の姿があった。

「そもそも私旧都チームじゃないのね……このチームで一体勝てるかしら」

「アタイは大丈夫だと思っただけだな。面白そうだし」

「陽気すぎるわね……妬ましいわ」

赤い服と鎌を持った死神、小野塚小町。そして金髪に茶色の髪を持った緑眼の怪物、水橋パルスイたちが先陣を切って歩いてきた。

「おいおい私たちを置いていくなよ。お、魔理沙たちだ！」

「へー、私はあまり見ない面ばかりだな。あむっ」

「ほう、向こうには組長もいるみたいだぞ。櫻花」

「……そうなんだ」

二人についていく四人がいた。黒二ソの妖怪（違う）、封獣ぬえ。今日も今日とて団子を食べている鈴瑚。そして怯えている戎嚶花を抱き寄せているオカン、牛崎潤美の四人であった。計六人が魔理沙サイド五人と対峙したとき張りつめた空気が漂った。氣付いていないのはぬえと魔理沙だけであった。

「さて来ましたね。それじゃあ詳しいこと聞きましょうか。紫」

映姫が横を向いて紫に来るよう催促した。すると二組の間に大きなスキマが現れた。紫は突然なことにびっくりした様子だった。

「えっ!? どうしたの?」

「どうしたのじゃないですよ。どういう試合形式なんですか? そのあたりの説明なしで投げっぱなしは混乱の元になりますよ。ですからもう少し丁寧にお願いたいところですよ」

「あら〜ついうっかりしてたわ。今から言うわね」

わざとなのか本当なのか。紫の態度は辺りの雰囲気を感じ程度緩めた。

「とりあえず三戦して勝ち数が多い方が二回戦に進めるっていうことにするわ。戦う相手は……自分たちで決めて。面倒だし」

「おいおい、そんな適当でいいのか？」

「そんなにきつちり決めて皆守るかしら？」

「まあ、確かにそうだが……」

魔理沙がもつともな意見を言うが紫はさらにもつともな意見を返してきた。やはり誰も彼も我が強い。

「じゃあパルスィ、私と戦るか？」

勇儀がパルスィに対してバトルを挑んできた。やはり知り合いの方が手の内や性格を把握しやすいので同じ旧都仲間のパルスィを誘うのは当然であった。

「悪いけど今回はパスするわ。代わりに……魔理沙。いいかしら？」

「えっ!? 私か? 別にいいけど……」

意外にも指名したのは百戦錬磨の魔理沙の方だった。どんな戦いでも戦いのコツとこういうものがあり、自機組はできるだけ避けたい相手であるはずだ。チルノのような目立ちたがりのような奴はありえるがパルスィはそういうタイプでもなかった。

「なんだ。じゃあ私は今回は棄権しよう。パルスィがいないとつまらないからな」

勇儀の言葉は三途の川チームを挑発していた。次もあるということは負けるつもり

はないということであるからだ。

「では映姫様。アタイたちもやりませんか？ 折角ですし！」

「……ストレス発散目的ですか？」

「そ、そそそそんなことないですよ！」

嘘を吐くのが下手である。だが上下関係なしに戦えるのはポケモンバトルのいいところである。それによくいる間柄ならば癖も把握している。小町の判断は間違いと言わわけではない。

「じゃあ最後は……」

「……八千慧さんと戦いたい」

「えっ!？」

最後の戦いを申し出たのはまさかの櫻花であった。しかも組長に対してである。傍で聞いていた潤美はとても驚いていた。怯えているような様子はなさそうだったからだ。特に断る理由もなかった八千慧は承諾した。

「決まったようね。じゃあ旧都が壊れないように結界張るから思いっきりやつちやつて」

スキマが閉じると三組が移動して戦闘準備に入った。なお戦いに参戦しない残りの人たちは巻き込まれないところに避難していた。スキマに帰った紫からの念波が再び

届いた。

『じゃあこれから幻想郷とポケモンを掛け合わせたバトル、開始よ！』

第六話 四季映姫 v s 小野塚小町

ドカーン!!

紫の合図とともに火柱が立った。待ちきれなかったチームが一組あったのだろう。閻魔と死神のところである。映姫からの初撃を小町が防いでいたのであった。

「へえ。よく判断できたわね」

「映姫様の考えそうなことですからね。一発目に特大の攻撃が来るって」

小町の予想通り最大火力のインファイトがまもるによつて弾かれた。性格は理解されているので一筋縄ではいかないようだ。性格は理解さ

「それにしてもなんだか意外ですね。映姫様がそんな悪そうなポケモンを使うなんて。やっぱり白黒なのが気に入ったんですか?」

小町は映姫の手持ちポケモンに目配せをした。そのポケモンはゴロンダであり、あくタイプであることとその悪そうな見た目から多くのトレーナーから怖がられてきた。だからこそ閻魔という厳格な立場の者と一緒にいるのが不釣り合いに見えたのである。

「ふう。人並びにポケモンを見た目で判断するとは小町もまだまだですね。この子は真面目で頼んでもいないのに私の仕事を手伝ってくれるのですよ。それに努力家で毎日

技の訓練をしているのを私は知っているのですからね！」

「……照れる」

映姫が言ったことは事実であり、以前パートナーにしたトレーナーからはゴロンダが最高のパートナーだという評価をもらうほどしつかりしたポケモンである。だが無口なので誤解されることもよくあるのだとか。

「へー、随分信頼しているようですね。でもアタイだってこのバトルに関してはサボっていないですからね。な、シザリガー？」

「あたぼうよ。小町のアネゴに恥はかかせられねえからな！」

ならずものポケモンのシザリガーが小町の手持ちであり、今は小町の舎弟になりたいといつて相棒となっている。小町がいつも通りサボって昼寝しているとところにちよつかいをかけたシザリガーはいきなり起こされた不機嫌な小町によってボコボコにされたのが二人の出会いである。子分気質のシザリガーはそれ以来小町をアネゴと慕い卜レーニングしてきた。

あくタイプ同士の対面となったが相性としては映姫の方に分があった。かくとうタイプを持つゴロンダにはバツグンが取れるからである。

「じゃあ行きますよ！ シザリガー、アクアブレイク！」

「こっちはインフアイトです」

てきおうりよくシザリガーのアクアブレイクとゴロンダのインファイトの激しい火力がぶつかり合い、先ほどよりも遥かに大きい火花が上がった。二匹の殴り合いは息もつかせぬほどの速く、それでいて重い一撃の連続だった。だが押しているのはシザリガーの方だった。

「ぐっ……」

「オラオラどうした？ そんなもんか？」

攻撃力が高くバツグンをついているはずだが全然効いている様子がない。シザリガーのてきおうりよくが威力をブーストさせているのである。自分と同じタイプの技の威力が倍になるという特性のおかげでゴロンダの力を優に凌いでいる。

「3……2……1……オッラア!!」

カウントされて遠くに跳ね飛ばされた。136kgもある巨体がいともたやすく宙を舞い、HPが大きく削られてしまった。

「ゴロンダ！ 大丈夫ですか!？」

「ああ……大丈夫だ」

心配かけまいと強がってはいるがフラフラしている。耐久面も鍛えてきたはずであるがそれを貫くほどのアクアブレイクの威力であった。

「ふふ、映姫様でもポケモンバトルはイマイチだったようですね。それじゃあとドメを

さして終わらしましょうか。さあ、アクアジェットだ！」

「じゃあなゴロンダ。楽しかったぜ。終わりだ！」

相手よりも先に攻撃の出せる先制技。しかもタイプ一致水技のアクアジェットは残り少ないHPのゴロンダを倒すには十分であった。もはやここまで……そうゴロンダは正直考えていた。

「まだです！ ゴロンダ、こらえる！」

映姫の声が届いたゴロンダは両手を胸の前にかざしてこらえる体勢に入った。そこにシザリガーのアクアジェットが挟りこまれる。意識を失いそうになるが瀕死にならないのがこらえるの効力であった。

「そのまま頭の星を掴んで下さい！」

「!? シザリガー、逃げて」

小町の判断は正しかった。しかし少し遅かった。ゴロンダはシザリガーの額の星を片手でガシツと掴み、空中にプランと浮かばせた。リーチの長いゴロンダにシザリガーの技は一つも届かなかった。

「……ふつ、完敗だ。思いつきりやってくれ」

「お前は強かった」

無口なゴロンダは武士の情けとでも言うように渾身のインファイトをぶつけた。攻

撃特化にしていたシザリガーは守りに関しては脆弱であり、みるみるうちにHPが減っていき勝負は決した。シザリガーの目がグルグル模様になったのがその合図である。

「あーやっぱり映姫様に勝てなかったかー。勝てると思ったんだけどな」

「いえ、あなたもよく頑張りましたよ。特に私のゴロンダをここまで追い込めるなんて並大抵の努力ではなかったのでしょうか。シザリガーもよく小町を支えてくれましたね。感謝します」

「……大アネゴって呼んでいいですか!？」

「やめて下さい」

面倒な部下は小町一人で十分である。映姫はそう考えていた。すぐさまゴロンダの手当てに移った。

「よく頑張りましたね」

「……正直俺は途中で諦めてしまった。勝てたのはお前のおかげだ」

「実際に戦ったのはあなたです。それに私たちはチームですから二人の勝利ですよ」

「……ありがとう」

恥ずかしいのか目を合わせずに感謝の言葉を述べた。体に隠していた枝葉を口にくわえて一服し、その場に座り込んだ。

「さあ皆のところに戻りますよ。まだ勝負は終わってないですからね」

映姫が手を差し出すとゴロンダはその手を掴み立ち上がった。なお握力はゴロンダよりも映姫の方が強い。

「あ、そうそう小町?」

「はい? 何ですか」

「あなたね……」

最初から言いたかったことを映姫はぶちまけた。

「バトルで本気になれるなら普段の仕事もサボらずちゃんとやりなさい!!」

「ひい!? に、逃げろ!」

「逃がしませんよ!」

二人が鬼ごっこを始めてしまったのでゴロンダは一人皆のところに戻ることになった。

『全く、あの二人は……とりあえずそこまで! シザリガー戦闘不能。よって旧都チームの一勝とする!』

頭の中に八雲藍の声が聞こえてきた。勝敗結果も教えてくれるらしく旧都チームは勝利に喜んでいた。

「へー、あの小さい子よく頑張ったじゃん。あと一勝だな」

「あらら小町負けちゃったか。あと二人頑張れ!」

雷鼓と鈴瑚は勝敗結果に反応している一方、潤美は他の戦いに意識を向けていた。
「櫻花大丈夫かな……怪我してないといいけど」

八千慧と櫻花の戦いは旧都の南東部で行われていた。八千慧の手持ちはほのお・ドラゴンタイプのパクガメス。一方、櫻花はいわ・どくタイプのウツロイド。ウルトラビーストと呼ばれる異世界から来たポケモンである。タイプ上ではウツロイドの方が有利であるがパクガメスにはじしんを搭載しているので一概には有利とは言えなかった。

「さて、そろそろ聞いてもいいかしら？ どうしてあなたは私と戦いたかったの？」
「……………」

「どうしたの？ 聞こえなかったのかしら」

最初から俯いてばかりの櫻花に近づこうとしたその瞬間。隣から奇妙な声が聞こえた。

「グッ!？」

「ど、どうしたのパクガメス!？」

急激にパクガメスの顔色が悪くなり紫色に変色してしまった。

「私の勝ち……………」

ボソリと呟いた櫻花には二重の意味で生気がなく、後ろのウツロイドがゆらゆらと揺

らめいていた。

第七話 櫻花の異変と嫉妬のバルスイ

バクガメスは片膝を着いていた。戦闘が始まってから相手のウツロイドから一度も攻撃を喰らった覚えはなかった。しかし立っていられないほどの吐き気や眩暈、幻聴まで聞こえてきていた。一体いつの間に……八千慧はそう考えていた。何しろ原因が全く分からないのである。紫たちから渡されたタイプ相性などは自分と相棒ポケモンのタイプだけであり、対戦相手のポケモンのタイプまで教えてくれるわけではない。

「ちよつと！ あなたのポケモンは何タイプなの!？」

「……………」

相変わらず無言を貫いていた。もちろん自身のタイプをばらしてしまうのは愚策極まりないのであるが。見た目クラゲのようだからみずタイプ？ いやふよふよしているしゴーストタイプか？ まとまらないまま八千慧たちは戦っていた。

「くつ、ねえバクガメス。何されたか分かる?」

「…………正直分からん」

自分の体は自分が一番理解しているというのとは間違いであった。正確には原因を一つに絞れないと言ったところであった。まひによる痺れ、どくによる体力低下、やけど

による燃えるような痛み。しかもそれだけではなくねむけや幻覚や幻聴など混乱に特有の症状に加え、徐々に体が凍り付いていくような感覚があった。ありとあらゆる状態異常が一度に襲っていた。喋るのも一苦勞に見えた。

「許さない……」

「えっ!？」

か細い声で櫻花の声が聞こえてきた。許さない、一体何についてだろうか。八千慧は彼女とあまり面識はなく恨まれる筋合いはないはずである。しかし勝負するように喧嘩を売ってきたことから何かしら因縁があるかもしれないと八千慧は考えた。

「ねえ！ 私は何やったの!?! 教えて」

「……」

再びだんまりである。まるで機械に話しかけているみたいに反応がない。潤美に聞いた印象とは大きく違っていた。人見知りではあるが良い子で、戦うのがあまり好きではないと言っていた。賽の河原のアイドルであり人々を明るくするのが好きらしい。しかし今はそれらに該当しない行動を取っていた。

「う、ぐう……」

状態異常が体を蝕む。攻撃を繰り返すどころの話ではない。ここで降参すればすぐに回復してもらえない。スキマの向こうで聞いているだろう紫たちに申告すれば終わる。

「……私たち、こう」

「八千慧！ まだ諦めるなよ」

「!!」

俯いていた八千慧ははっとした。戦ってくれているのは自分ではなく、バクガメスだ。その本人が微塵も諦めていないのに自分が降参してどうするのだ、と。頬を叩き自身に喝を入れた。

「大丈夫よ！ 私たちは負けないから！」

「ふっ。じゃあ行くぞ！」

「バクガメス！ かえんほうしゃ！」

一歩も動けないなら動かなければいいとその場で遠距離技を放った。しかし直線上の技、くるりと体を回転させて華麗に回避されてしまった。先ほどまで動きながら攻撃をしていたにも関わらず全く当てられなかったので当たるはずもなかった。

「ぐお」

腹に力を入れて放つかえんほうしゃは、動くほどではないが体に障る。HPはいつの間にか赤ゲージまで削られていた。

「バクガメス！」

「……平気だ。俺に任せろ」

「…………え？　ちよつと!？」

そう言うのとバクガメスは両膝を着いてしまった。八千慧は近寄り、顔を青くしたと思っただけすぐに安堵した。

「zzzzzzzz」

「もしかして…………ねむる?」

この土壇場でバクガメスは新しい技を覚えた。ねむるは全ての状態異常とHPを全回復させる技であり謎の状態異常はきれいさっぱり無くなった。だがこの技の最大の欠点はしばらく無防備状態になるということである。八千慧はウツロイドと櫻花の方を見た。しかし意外なことに何も仕掛けて来なかった。

「あれ…………?」

シャドーダイブのような溜め技を充電しているわけでもなく、ただただこちらが動くのを待っている様子に見える。奇妙な沈黙を二人と二匹がはげしく包んでいた。

「…………よし!　再開だ。第二ラウンドの開始だウツロイド!」

「え、ええ!　行くわよ」

寝ていた間の違和感など知らないバクガメスは完全に健康になってピンピンしていた。バクガメスが八千慧を引っ張る形で続きが行われた。

所変わって旧都の北西。魔理沙とバルスイは他の二組とは違い、まだ戦わずに戦いの場所を品定めしていた。何やらバルスイたつての希望で橋の近くで戦いたいとのことであった。魔理沙は快く承諾していた。何しろ水辺を好むということはみずタイプである可能性が高い。くさタイプであるモロバレルにとつては相性のいい相手であるからだ。もちろんこれもプラフである可能性もあったが。

「よし。ここでもいいわ。待たせたわね」

「別に構わないぜ！　じゃあやろうか」

選んだ場所は旧都で一番大きな橋の上であった。他二組と十分距離は離れておりここなら暴れても問題ない。魔理沙はモロバレルをすでに出しており、バルスイがダークボールから出せばそこでバトルスタートである。

「じゃあ行くわよ。私のポケモンは……こいつよ！」

バルスイはボールを川の方に投げた。ボールから出てきたのはモロバレルの7倍の大きさの紫色の巨体だった。

「うおらー！ー！！」

ボールから出てきたときの発光とほぼ同時に攻撃が出てきた。巨大な鎌のような斬撃が橋全体を襲った。

「危ない！！」

結界で覆われているはずの橋が粉々に砕け散り川も二つに裂けた。間一髪直撃を免れたモロバレルと魔理沙は岸に跳び移り回避することができた。その斬撃は……専用技あくうせつだんだった。

「何しやがんだいきなり！ 私まで死ぬところだったじゃないか！」

このバトルでもしもポケモンが人間サイドに致命傷を負わせた場合、またはその逆が起きた場合強制失格となる。件のポケモンはトレーナーには怪我を負わせないようポケモン側に攻撃をしていたので我を忘れてはいるわけではないようだ。

「ちっ、かわされたか。このパルキア様の攻撃を避けるなんて妬ましい」

くうかんポケモンパルキア。シンオウ地方の伝説ポケモンであり、空間を司る最上級ポケモンである。最強候補の一角ではあるが元来嫉妬深い性質があるようだ。そんなポケモンが嫉妬の姫と結びつくのは必然だったのかもしれない。ちなみに口癖はどちらも「パルパル」である。

「早めに終わらせるつもりだったのにね。いくわよパルキア、ハイドロポンプよ！」
「こつちも行くぞモロバレル。エナジーボール！」

放射される大量の水と緑色のエネルギー弾がぶつかり合う。たとえタイプ相性は有利でも一般ポケモンと伝説ポケモンの技の威力。モロバレルごときなぞ敵うはずもなく地平の彼方まで流されていく、そうパルキアは思っていた。

「何!？」

「へっ、そう簡単にやられねえよ。ウチのモロバレルはな!」

拮抗しているどころか弾が水流を押しつけてどんどんパルキアの方に近づいて行っている。緑色の光球は伝説ポケモンの顔面に直撃し、背中から倒れた。

「私のモロバレルは特攻特化だぜ。もちろん伝説ポケモンにも負けなくらいにな」

「アンタ……. どんだけ畜生な鍛え方したのよ」

一般ポケモンと伝説ポケモンの間には高すぎる壁がある。それを超えるのは並大抵な努力では不可能である。普通ならば。しかし魔理沙は人界を超えるほどの努力家であり、モロバレルとともに死ぬほどの特訓したらしい。それほどのモチベーションはどこから来るのか。バルスイは疑問符を浮かべていた。

「クソが! この俺が尻餅着かれるとは屈辱だ。妬ましい!」

「パルキア。あれやるわよ」

「ああ、あれか。おい、モロバレル。今度は油断しねえからな」

「へっ、望むところだ! なあモロバレル?」

「お、おい。あんまり挑発するなよ……」

魔理沙は真つ向から喧嘩を売るスタイルだがモロバレルはそうではない。どちらかというと大人しい方なので喧嘩などはしたくないタイプである。しかも相手が最強ク

ラスなのでさつきから顔が青くなりっぱなしである。

「いい度胸じゃねえか！ 今度こそ仕留めてやるからな」

そう言うのとパルキアは口を開けて光線を一点に収束し始めていた。その光量、爆音、どこを見てもあの技しか思いつかなかった。

「やばい！ あの技が来るぞ。逃げろ」

魔理沙はそう言ったものの道は一直線上、橋も崩壊済みで建物内に逃げ込めば被害が甚大なことになる。つまりどこにも逃げ場がない状況が出来上がってしまったのである。先ほどのドロポンくらいなら何とか相殺できそうだが次に来る攻撃はそんな次元でないことは明白だった。

「無駄よ。どこに逃げてでも必ず射抜くわ。諦めなさい」

「ぐっ、ちくしょー！！」

「最期に教えてやる魔理沙よ。どうしてこうなったのかを」

「な、何!?!」

口を開けたまま器用に話すパルキア。準備はもう完了したようでも発射できそうである。

「それはな……俺を相棒ポケモンに選ばなかったことだー！！！！」

「行きなさいパルキア、はかいこうせん!!」

旧都全てを滅ぼせられるレベルのはかいこうせんがモロバレルの背後を捕らえた。魔理沙はモロバレルの姿が雲散霧消するのを見ていることしかできなかつた。

「モロバレルー!!」

魔理沙の叫び声もはかいこうせんの轟音には敵わなかつたのであつた。

第八話 最初の勝利チーム

暗い。何も見えないし何も聞こえない真つ暗な空間。そこに私は今いる。どうしてこんなところにいるのだろうか。何も覚えていない。

感じるのは何かとてつもない誰かの怒りと悲しみの感情だけである。

「誰か……助けて」

旧都の南東部ではかえんほうしやが飛び交っていた。バクガメスはねむるで回復した後一步も動かずにウツロイドに向かって攻撃し続けていた。回避能力に長けておりその攻撃を掠ることなくかわし続けるウツロイド。先ほどは接近戦に持ち込んで謎の状態異常に見舞われた。だから遠距離攻撃で対応していた。

「ぐぬぬ……やっぱり当たらないか。俺近接主体だからどうしてもこういうのは苦手なんだよな」

「近距離戦に持ち込みたいけど近づけない。どうしたら……」

やはり根本的な原因を見つけないことには以前の二の徹を踏むことになってしまう。何か手がかりはないかと八千慧が考えたとき、ふとある違和感に気付いた。

(あれ? そういえばあのポケモンはどうして浮いたままなのかしら?)

空中に浮いたままのポケモンは多くいる。ひこうタイプだったり特性ふゆうのポケモンは浮いたままであることができる。しかし八千慧の頭の中にはその選択肢はなかった。なぜならウツロイドが低空飛行していたとき、バクガメスがじしんを打とうとしたとき地面から大袈裟に離れたように見えたからだ。そのときも地面スレスレだったので着陸したところは一度も見ることがなかった。なので地面技の効かないひこうタイプでもふゆうでもないと考えていた。

(もしかして……)

八千慧は一つの仮説を立てた。それが真実だとすると今までの不自然な行動に辻褃が合う。確かめてみる価値はあった。

「バクガメス! ちょっといいかしら」

バクガメスに今考えた案を耳元で囁く。身長は2mあるので頭を下げている。

「なるほど、そういうことか」

「まだ分からないけどね。でも私はそうだと思っているわ」

「じゃあお前を信じてみよう」

「バクガメス……ありがとう」

自分を信じて付いてきてくれる八千慧をバクガメスは前から信頼している。否定す

る理由はなかった。

「じゃあ行くわよ！ かえんほうしゃ！」

先ほどと同じようにかえんほうしゃを放つものの当然のようにウツロイドはこれがかわす。しかし違うところが二か所あった。一つは外れても連続で打ち続けていることであり、もう一つは相手の頭上目が打っていることである。それを回避するには下へ下へと移動する必要がある、気が付くと地面ギリギリまで誘導されていた。

「そうはいかない」

思惑を感じ取ったのだろう。浮くことを禁じて地表に降りてきたときに渾身のじしんを炸裂させる気なのだということに。そう考えているうちにウツロイドは地面に降りていた。バクガメスが体に入れている。ここでじしんを決めるのだろう。喰らえば大惨事になると考えたウツロイドはかえんほうしゃに直撃することも厭わずに再び上空に浮かんだ。

「アチチツ！」

ようやく一発かますことができた。だが効果はいまひとつなので大したダメージにはなっていない。万策尽きたかとウツロイドが思っている間、八千慧の予想は確信へと変わっていた。

「やっぱりね。私の予想通りだったわよ」

「流石俺の相棒だな。じゃあ手筈通りやるぞ」

今度は二人が勝利を確信すると、バクガメスはありったけの力を込めてかえんほうしやを放った。だがその方向は上ではなく下に向けてであった。旧都の道がメラメラ燃えると地面から何かが湧き出してきた。紫色の液体が可視化できて蒸発していった。またそれだけではなく黄色の波のようなもの、赤い炎、そしてトゲトゲした大きい石が続々と滲み出てきた。

「……!?!」

「あなたたち、地面に罨をいつの間にか仕掛けていたのね」

八千慧の考えは的中していた。ウツロイドは気づかれないように設置技であるどくびしに加えてでんじは、おにび、ステルスロックをばら撒いていた。目には見えないそれらを超火力のかえんほうしやで消毒した。攻撃していかないのにもかかわらずひどい苦しみを味わったのはこのような補助技に蝕まれていたからである。また攻撃技がないのでスキだらけのねむる状態で何も手出しができなかったのである。

「それがどうした。私が仕掛けたのがいつか分からないならまた設置するだけだ」

ウツロイドの言う通り、目には見えないスピードで仕掛けていたのならば原因が分かっても対応はできない。だが八千慧の狙いはそれではなかった。

「ふふつ、気付いているかしら。あなたが降りたところの地面」

「? 何のこと……」

地面はかえんほうしやでプスプスと黒くなっているが、一か所とても黒くなっているところがあった。どくびし等があったところは熱消毒のためあまり焦げが浸透しなかったにもかかわらず、そこだけははつきりと焦げていた。その理由は簡単で、そこだけ毒が消えていたからである。

「あなたが降りたところだけ毒が消えてるわよね。あなたが消した、いえ消してしまっただんじやないかしらら?」

「……つくー!」

凶星であったようである。どくタイプはどくびしのあるフィールドに足を踏み入れるとその効果を消してしまう。つまり目の前にいるウツロイドがどくタイプであることに自力で辿り着いたのである。タイプを特定することは戦いにおいて大きなメリットとして働く。八千慧たちは勝利に大きく近づいた。

「さらにかえんほうしやがあんまり効かないってことはほのお・いわ・みず・ドラゴンのどれかじゃないかしら? 前者二つならじしんを嫌がるのも無理ないわね」

「なっ!? そ、そんなこと……」

顔のないウツロイドだが顔に出やすいタイプのようである。実際に八千慧の読みは当たっており、いわ・どくタイプなのでじめん技は四倍弱点である。ポーカーフェイス

に努めることが勝利の定石だがそれを疎かにしてはますます勝利から遠ざかるばかりだった。

「はっ！ それが分かったとして攻撃を当てられなきや意味ないじゃない。長期戦に持ち込んだら私の勝ちよ」

「問題ないわ。すぐ終わらせるから。行くわよ、からをやぶる！」

「オラア！」

バクガメスの体のどこかからパリーンと割れる音がした。攻撃と素早さをぐーんと上げる代わりに防御が下がる諸刃の技。一気に勝負を付けるつもりだ。

「突っ込みなさい！」

バクガメスの巨体が猛スピードで突進してきた。素早さも上がるのでさっきのスピードに慣れていたウツロイドはあっという間に背後を取られてしまった。

「ま、まずい！ このままゼロ距離で喰らったら……くっ、離れなさい！」

「ぐがあー！」

羽交い絞めにされながらもウツロイドはでんじはを繰り出した。先ほどの状態異常の二倍の苦しみがバクガメスを襲った。普通のポケモンならば一瞬で気絶するほどの痺れにも何とか耐えていた。少しばかり耐性が付いたお蔭かもしれないがそれでも十分な力が入らない。緩みかけたその瞬間大声が劈いた。

「負けないで！ 頑張れー！」

諦めないことを教えてくれたのはバクガメスであった。ならば今度は自分が手を貸す番である。組長としての尊厳、今こそ取り戻すときである。

「へっ……」

緩んでいた拳に握力が戻ってきた。このまま決められそうだが電磁波が緩まる様子はない。八千慧はもう一つ心に突つかかっていたことを叫び始めた。

「櫻花！ いい加減戦いなさい！」

それはトレーナーである櫻花に向けてであった。空気存在であった櫻花に対して八千慧は憤りを感じていた。

「ずっとウツロイドに戦闘任せてばかりでつまらないわ！ あなたも戦いなさい！」

奇妙なことに今まで一度も指示を出さずに戦っていた。バトルは何もポケモンだけのものではないと考えていた八千慧は気に食わなかったようである。

「私ね、あなたに戦ってみたいって言われたとき嬉しかったのよ。歩み寄るチャンスだと思っただから」

八千慧のその言葉に櫻花の頭が若干持ち上がったように見えた。

「前の異変で動物霊たちが賽の河原を滅茶苦茶にしたこともあったしその詫びも兼ねて色々話したかったのよ。あなたがそこでのリーダーだつてことや明るい子だつてこと

も聞いたわ」

「……………」

「あなたの全力、私は見てみたいわ！ 負けないでよ!!」

「……………」

敵にエールを送っていた八千慧であったがその真心こもった思いは確実に届いた。だがその変化が如実に表れたのは瓔花ではなかった。

「な、何!? ち、力が抜けていく?」

「っ！ 今だ!」

ウツロイドのでんじはが急に弱体化してきた。このチャンスを逃すまいと全力を込めてウツロイドの体を掴み、高く跳んだ。

「これで終わりだウツロイド！ じしん!」

ウツロイドを持ち上げたまま地面にたたきつけると地面が大きくひび割れた。残っていたエネルギーの全てをぶつけたのでバクガメスは一步も動けなかったが勝敗は決した。

旧都の南東部で勝負が終わる数分前、ここでも勝負が終わろうとしていた。

「ふん、残念だったな魔理沙。俺様をパートナーにしておけばこんなにあっさり負けることもなかったのにな」

「どうかしら魔理沙。嫉妬の力は恐ろしいのよ」

モロバレルが塵と消え圧勝したと考えていたパルキアたちは魔理沙に嫌味つたらしく話していた。これこそが自分の誘いを断った罰だと伝説ポケモンらしからぬ小物な考えであった。またパルスイも自身の嫉妬の力を十二分に発揮できて満足気であった。

「……へっ、じゃあそろそろ終わらせるか！ モロバレル！」

「おうー！」

「何?！」

パルキアが背後から聞こえた声に振り向くも時すでに遅し。消したはずのモロバレルがそこにいた。

「な、なぜそこに……」

「行つけー！ ゼロ距離マスタースパーク!!」

ついついいつものようにマスタースパークと叫んでしまったが技自体は先ほどのエナジーボール。だが威力は先ほどよりも遥かに大きいものを至近距離でパルキアに浴びせたのであった。爆風が辺りを覆い、パルキアの周りは煙だらけで無事かどうか分からない。

「パルキア!! 大丈夫!?!」

煙の中ではパルキアが直立していたがこれ以上戦うつもりはないだろう。目がぐるぐるしていたからだ。その佇まいはやっぱり伝説ポケモンであり、負けてなお堂々としていた。

『あら、同時に終わっちゃったわね。じゃあ第一試合は旧都チームの勝ちよ。手当ては後ですから今から言うところに集まってね』

紫の声が聞こえたところで第一試合は終了であり、魔理沙率いる旧都チームが勝利した。

第九話 幻想郷のジョーイさん

結界を十分に張っていたはずなのに旧都全体に甚大な被害が及んでいた。もちろん戦っていたポケモンたちは相応のダメージを受けていたので一か所に集めて治療する予定らしい。紫は前もって医者役を呼んでいた。

「じゃあ頼むわね永琳」

「ええ、大丈夫よ。異世界の生物の治療位」

この世界のジョーイさんは永遠亭の薬師、八意永琳である。バトルするときには必ず出る負傷者問題は彼女の一手で解決するほどの腕前である。見たことも聞いたこともない生物ですら完璧に治してしまうのは彼女の技量が人間離れしているおかげである。彼女もバトルに参加しなかったらしいが説得して裏方に回ってもらった。彼女がいなければ二回戦ができないからである。その代わりに彼女にもポケモンをプレゼントした。

「行くわよ、ベトベトン」

「うーい」

治療できるポケモンはたくさんいた。ラッキーにハピナスにタブンネなどを選ぶか

と思いきや永琳が選んだのはまさかのベトベトン。治療するのはポケモンではなく永琳であり、ポケモンはそのサポート役なのでぶっっちゃけ誰でもいいのだがぶよぶよした紫色のポケモンを真っ先にチョイスするのは月人のセンスはぶっ飛んでいるなど紫は思っていた。

永琳はベトベトンを引き連れて、もうすぐ終わるであろう旧都に向かった。

「うう……負けるなんて妬ましい。ねえ、あのときどうやって避けたのか教えなさいよ」
「あのとき？ ああ、あれはただ……」

旧都の北西部ではパルスイが悔しそうにしていた。まさか伝説ポケモンを使ったのに一般ポケモンに負けるとは思わなかったのだろう。そしてはかいこうせんをどうやって避けたのかを問い詰めていた。

「……やっぱり秘密だ！ ほら、戻ろうぜ」
「なっ……私には教えてくれないのね。妬ましい」

魔理沙はつい喋ろうとしたが口を噤んだ。今までのこのバトルの模様がスキマとかを通じて他の人たちに見られている可能性が大いにあったからである。ここで安易に話すと今後不利になると思ったからである。

ちなみにその予想は的中しており、他のチームは二チームのバトルの様子を観覧する

ことができている。それを見ているかどうか別問題だが（話し合ったりバトったりしている）。

二人は皆が待つ旧都中心に向かった。

旧都の南東部では八千慧がバクガメスをボールに戻した。その瞬間糸が切れたように向こう側にいた櫻花が前のめりに倒れた。

「櫻花!? 大丈夫!?!」

櫻花の元にすぐさま駆け寄った。頭を起こし首筋に手を当てて確認するとしつかりと脈打っていたので一安心だった。可愛い顔して眠っているようであり自力では起きそうにないのでお姫様抱っこをして運ぶことにした。面倒だがこのまま放置というわけにもいかない。

「この子すごい軽いわね。ちゃんと食べてるか心配ね」

水子の霊という種族のせいかな重さを全く感じない。普段はふよふよ浮いているのだろうか。そんなことを考えていると、あることを忘れていたことに気付いた。

「あ、ウツロイドの回収……」

バクガメスにプレスされて乾物になっていたウツロイドは、まだモンスターボールに戻されていないだったのでじしんの震源地を覗いてみる。

「あれ？ いない？」

べつきよべつきよになつて一步も動けないはずなのに跡形もなかった。流石に死ぬことはないのどこかに逃げたのだろうが……奇妙である。トレーナーを置いてどこかに行くなんてことはないので不気味であるが今は一旦置いておくしかない。

「まあ今はこの子を連れて行くのが先ね」

櫻花が快復したら探そうと思ひ、中心に向かう。

「あの子、潤美つていったかしら。ほつとけない理由もなんとなく分かるわね」

櫻花の傍にくっついていた潤美のことを思い出していた。ずっと一緒にいるらしいが危なっかしい子の面倒をみたくなる彼女に同意していた。

そんな二組は割と早く到着した。戦闘時間はほぼ同じ時間で、戦闘地も中心部からほぼ等距離だったので同時に到着した。そんな彼女たちを真っ先に向かい入れたのは牛崎潤美だった。

「あ、来た！ 櫻花大丈夫……あれ？ 八千慧さん？」

お姫様抱っこされている櫻花を見てびっくりする潤美であった。しかもそれが対戦相手の吉弔八千慧だったからなおのことだった。

「潤美。この子ちよつと頼むわよ」

ガラスを扱うように瓔花を手渡した。渡し方で八千慧がこの子を全く無碍に扱って
いないことが感じ取れた。戦っている最中に通じ合ったのかもしれないと潤美はほっ
こりした。

「え？ 八千慧さんはどうするんですか？」

「ちよつと相談したい人がいるからね。いいかしら、紫、というか藍」

八千慧が呼びかけるとスキマが開き、その中から三人の賢者が現れた。

「あら珍しいわね。あなたが呼ぶなんて。まあ丁度いいタイミングだったからいいわど
うしたの？」

「あ、そうね。私の話は後でいいから手当てしてあげて永琳」

「もちろん、そのために来たのだから。さあ渡してちょうだい」

八千慧と魔理沙とパルスイは手持ちのモンスターボールを永琳に渡した。永琳は受
け取ると後ろに置いていた何だかよく分からない装置にそれらを置いた。幻想郷住民
にはピンと来ないがポケモンにとってはお馴染みもお馴染みのものだった。こんな異
世界にポケモンセンターの回復装置があるのだから。

永琳はパートナーのベトベトンから聞いた情報だけでその装置を完全再現してし
まったのである。しかも本家は最大六匹までしか回復できないのだが、この装置は最大
百匹まで回復できる。ベトベトンの情報が超詳細だったというわけではなく、本当に普

通の会話から作り出したのだから天才としか言えない。

「はい、これで大丈夫よ」

各々のトレーナーにモンスターボールを返した。こんな一瞬に本当に回復したのか怪しむ皆は一応モンスターボールを開いてパートナーを見た。

「お、本当に俺様快復してやがるな！ 流石だなその嬢ちゃん」

「あら嬉しいこと言ってくれるじゃない♪」

王様気質のバルキアが見た目は若い億年薬師、永琳を嬢ちゃん呼ばわりするのはポケモンにとってはおかしくはない。だが幻想郷住人は事情を知っているので永琳の後ろにいた紫は爆笑していた。

「じよ、嬢ちゃんって……アツハツハ！」

「ベトベトン、はかいこうせん」

バルキアよりも高火力と見られるはかいこうせんが人に向かって放たれた。某ドラゴン使いの人よりも無慈悲かつ至近距離で放たれたが紫はサラリとかわした。その様子を見ていたバルキアは啞然としていた。

「そういえばシザリガー、ゴロンダ。あなたたちのパートナーたちは？」

「アネゴと大アネゴたちは追いかけっこしてるっすよ」

「もうすぐだと思いが……」

紫の放送は届いているはずのもうそろそろ来てもおかしくはない。そう考えていると向こう側から緑色の人につながれた赤色の人が見れた。縄でぐるぐる巻きにされた小町にうんざりした映姫が引っ張って来ていた。その様子を舎弟のシザリガーは苦笑して見守っていた。

「はい、これで皆大丈夫ね」

「大丈夫かな、櫻花……」

「外傷はないからもうすぐ目覚めるはずよ。心配しないでいいわ」

全員が永琳の治療を受けたものの櫻花はまだ起きていなかった。すぐに起きさせる薬くらい作れるが副作用が怖い上、体がそんなに強くないので潤美は断った。幸い時間経過で起きるものらしいのでそれほど心配する必要もないようである。完全に保護者となっていた潤美である。

「そういえば紫、次はどここのチームが戦うんだ？」

「そうねえ……どうしようかしら？」

「考えてないのかよ」

「正直最初のこのバトルも適当に選んだだけだしね。あ、じゃあ永琳決めてよ」

「あら、いいの？　じゃあ純狐と優曇華のいるところのチームが見てみたいわ。その二

人は固定で」

「あなたの弟子発狂しそうね。面白そうだしいいわよ」

いじているのか愛でているのか分からないが次の対戦チームが決定した。しかも指定ありで。優曇華は純狐に目をつけられており、ストーリー紛いのことをされているので対峙させるのは優曇華の精神的ストレスが大きいだろう。だからするのだが。

「確か純狐のところは妖怪の山チームで優曇華のところは永遠亭チームね。自分の家壊されたくないし妖怪の山でやって頂戴」

「分かったわ。じゃあ伝えるわね」

紫はスキマに入り次のバトルについての連絡をした。発表したその瞬間、永遠亭チームがワープをして妖怪の山まで飛ばされた。

「なるほど、こうやって他のチームの様子を見られるんだな」

魔理沙は紫から渡されたタブレットのようなものを手に取り、妖怪の山チームと永遠亭チームのバトルの様子をしっかりと勉強していた。根が努力家の魔理沙は敵の動向をよく観察していた。

「なあ、皆はもし鈴仙と戦うならどうする？」

他のメンツに聞いてみて意見交換をしようと振り向いていた。だが皆していることはバラバラだった。映姫はまだ小町に説教しており、勇儀は相棒ポケモンと組手をして

おり、八千慧は藍と何か話しており、雷鼓にいたっては手持ちポケモンと酒を飲み交わしていた。どいつもこいつもまともに見ていなかった。もしかして他のチームもそんなのかもしれない。

「……鈴仙はパートナーとのコミュニケーションが取れているからそこを狙えばできるかも?」

「モロバレル……」

さすが魔理沙のパートナー。真面目な人には真面目なポケモンが集まってくるのである。ちなみに今パルキアはぬえのパートナーポケモンであるイベルタルと戦っていた。

「藍、ちよつといいかしら?」

「どうしたんだ八千慧」

各々が好きなことをしている最中、八千慧は藍を呼びとめてとあることを話していた。それはもちろん先ほど戦った櫻花についてである。

「櫻花の手持ちポケモンのウツロイドがどこかに消えたことなんだけど……」

「ああ、分かっている。スキマを駆使して探してはみたが見つからなくてな」

藍も当然櫻花とウツロイドの様子を監視していた。不自然な動向に注意を払ってい

たが、その後姿を発見できずにいた。まるでバレないように隠れているようだった。

「裏で何かが動いているみたいなんだけど……何か知らないかしら？」

「……私は何も知らない」

八千慧が紫ではなく藍を招集したのはこれである。はつきり言つて八千慧は紫を疑つており、本人に聞いてみてもはぐらかされてしまうのは目に見えていたのだから藍に聞いてみた。

「そうか……じゃあ私もウツロイド探しに加担させてくれ」

「いいのか？ こつちも助かるが」

「モヤモヤするのが嫌なだけよ」

櫻花はまだ目覚めない。彼女が目覚めるまでに解決したいという思いを聞いていた潤美は八千慧と行動をともにすることになった。

第十話 エースバーンVSマフオクシー 前編

永遠亭チームは鈴仙・優曇華院・イナバ、パチュリー・ノーレッジ、古明地こいし、霍青娥、庭渡久佐歌という濃すぎるメンバーであり、代表（にさせられた）の鈴仙はまとめるのに胃をキリキリさせていた。一方、妖怪の山チームはリーダーの射命丸文、姫海棠はたて、純狐、依神紫苑、茨木華扇、驪駒早鬼とこれまたずいぶん文が苦労するように思える。しかしこのチームにはあの説教仙人華扇がいるのでまとめ役には最適である。しかしナワバリが妖怪の山と言う理由だけで文が代表となった。ちなみに華扇はそんなこと気にしていないようである。

永遠亭チームがレポートさせられ、すぐに対戦相手は誰がするかの話し合いになった。

「さて、こっちは誰か戦いたい人いますか？」

「私は別にいいわ。正直取材の方行きたいし」

文のライバルはたては自前の携帯をいじりながら答えた。本人はあまりバトルに興味はなさそうだが相棒ポケモンが戦いたいようなので半ば無理矢理強制させられた。だが対戦相手を選ぶのはトレーナーなのであしからず。

「私も……自信ないし、遠慮しておく」

貧乏神の紫苑は戦うこと自体にやや抵抗があるようでこのように積極的に参加することはない。だが弱いわけではなく、かなりの実力者らしい。

そういうわけでこっちのチームはすでに決められていた純狐、華扇、早鬼の三人にスムーズに決まった。なお、文は自分が戦うよりも周りの人たちが戦った方が勝てそうだと予想していたので譲っていた。

「え、ええつと……あと二人誰がする?」

「私早鬼さんと戦いたいです!」

「私も誰でもいいけど戦いたーい!」

「私のムウマージだったら誰でも倒せるわよ?」

「ふふ。あの仙人さんにちよっかいかけたいわね〜」

自我が強すぎてまとまりがなさすぎた。誰も彼も戦いたくてウズウズしておりリーダーの鈴仙はしどろもどろになった。このままでは收拾がつかなくなると思ったのでくじびきにすることにした。その結果青娥には華扇が、久佐歌には早鬼が当てられた。

「やったー! 早鬼さんとバトルるなんて嬉しい!」

「さて、どんな風におちよくろうかしら……?」

「仕方ないわね、ムウマージこっちで見てもきましようか」

戦いに不参加のパチュリーとムウマージは観客席の方に移動した。なおこいしはいつの間にか消えていた。無意識を操る程度の能力なので消えていたことにすら途中気付かなかった。

「あ、文さん。こっちは決まりました」

「じゃあ場所どりを決めましょうか」

リーダー同士のコンタクトは問題なく進む。味方を制御するのが一番の難関である鈴仙であった。

どちらにも不平等にならないよう戦闘場所を決めあった。鈴仙のところは玄武の沢付近。青娥のところは天狗のすみか辺り。そして久侘歌のところは華扇の助力で華扇の家付近にもらった。本来は何重もの結界が仕込まれているが解除してくれた。早鬼が大暴れして山が消えると予想したので特別に場所を貸してくれた。ちなみに華扇の空間はどういうわけかスキマで行けない。途中経過は分からないブラックボックスなので華扇の戦いが終わらないと結果が分からない。

「ふふ、華扇さん。仙人同士お手柔らかにお願いしますね」

「……嫌な予感がするんだけど」

「早鬼さん！ よろしくお願いします！」

「ふつ、どーんと来い！ ちなみに華扇よ、家ぶつ壊れるかもしれないがいいか？」

「いいわけないでしょ」

まとめ役はツツコミの立ち位置になることが多いのであつちはあつちで苦勞しているのだなと鈴仙は華扇に同情していた。だが鈴仙自身同情している余裕がある相手ではない。何しろ相手は鈴仙の天敵なのだから。

「ふふふふふふ。うどんちゃん、仲良くやりましょうね……」

「は、はは……」

鈴仙には乾いた笑いか出てこなかった。先の異変を解決した鈴仙であつたが、そのときの異変の首謀者純狐に妙に懐かれることになり、現在は若干ストーカー状態になっている。そういう意味での天敵であり、この戦いだけ固定されていることをひどく恨んでいた。

各人が対戦相手を確認したところで前述した場所へ赴いた。清らかな川のせせらぎが聞こえるこの玄武の沢周辺ではストーカー被害者と加害者のバトルが始まろうとしていた。なおルールは一回戦のときと同様二勝した方のチームの勝ちとなる。紫の合図とともにバトルが早速始まった。

「あらあらもう始めるのね。もつとうどんちゃんとお話ししておきたいのに」

「いいですからもう始めましょう！ さあおいでエースバーン！」

モンスターボールから現れたのはストライカーポケモン、エースバーン。うさぎつばい見た目をしており鈴仙とは息ピッタリで相性もいい。元々鈴仙もエースバーンも真面目であり努力家なのでコンビネーションに関しては文句のつけどころがないほどみっちり鍛えてきた。

「さすがうどんちゃんによく似たポケモンね。センスがいいわ。私はこの子よ」

純狐の方のモンスターボールからはまるで純狐のようにモフモフしたポケモンが現れた。奇しくもその出会いは運命的なものであった。

「……………え？ 先輩!？」

「うん？ あ！ エースバーン君……………」

「先輩って……………あのマフオクシーが?」

エースバーンと相手ポケモンのマフオクシーは実は同じ故郷出身であり、とある出来事があったて以来先輩後輩の関係なのである。当時マフオクシーはエースバーンとよく対戦をしていたがエースバーンに白星がついたことはほとんどなかった。

「久しぶりね。一年ぶりくらいかな？ あのとときはまだラビフットだったわね」

「お陰様で強くなれました」

エースバーンはラビフットの進化系であり、進化するとパワーもスピードも格段に跳ね上がる。たくましく育ったのを見て顔を綻ばしていた。

「じゃあ試合始めましょうか。マフオクシー、マジカルフレイム」

「ニトロチャージでかわして！」

らせんを描きながら放たれるマジカルフレイムだが難なく回避するエースバーン。しかもこの技のおかげでどんどんスピードが上昇するのでただでさえ速い動きがどんどん加速していく。

「見違えたわね。あのとときよりもずっと速いわね」

「俺も先輩に負けないよう頑張つてきましたから！」

「あら、それは嬉しいわね。でも……」

エースバーンはマフオクシーの死角をとり、スピードを乗せた一撃を決めるつもりで突進した。

「まだ甘いわ」

マフオクシーは体を左に逸らしてヒラリとかわした。だがそれだけではなく右足を伸ばして足払いをした。下段なんて意識していなかったエースバーンは頭から豪快にこけてしまった。

「エースバーン！ 大丈夫!?!」

「あ、ああ大丈夫……」

頭を起こしたと思ったそのとき、眼前にはマフオクシーが何か技をかける寸前だつ

た。

「さいみんじゅつ」

持っている木の枝をゆらゆらと不規則に動かすとエースバーンの目がトロンとした。さいみんじゅつは本来命中しにくいはずの技だが至近距離で浴びてしまったためエースバーンは眠ってしまった。

「いいわよ〜マフオクシー。今のうちにみらいよちお願い」

「ええ。そのつもりよ」

純狐たちはこの隙に攻撃を仕掛けるのではなくみらいよちを仕掛けた。マフオクシーのサイコパワーが宙に浮かびどこかへ消えた。忘れた頃にやってくる強大な技であり、当たったらひとたまりもないだろう。しかし作るのに時間を要するようでは完成したときにはエースバーンは目覚めてしまった。

「ん…………？ あれ？」

「エースバーン、みらいよち作られちゃったから気を付けて！」

「み、みらいよち…………か」

みらいよちはマフオクシーの十八番とも言える技である。エースバーンが見てきた中で過去今までこの技を喰らって立っていた者はいないほどの強力な技である。その壮絶な破壊力を傍で見てきたので単語を聞くだけで身震いしていた。

「だ、大丈夫?」

「……鈴仙。みらいよちが来る前に決めるぞ!」

「! ええ。分かったわ。じゃあ行くわよ、シャドーボール!」

接近戦になるといつさいみんじゅつを撃たれるか分からないので遠距離から攻撃を仕掛けることにした。

「へえ、初めて見る技ね。本当に成長したのね」

「こつちもシャドーボールよ」

シャドーボール同士が激しくぶつかり合い黒い衝撃波が発生していた。押したり押しされたりしているがパワーで上回ったのはエースバーンの方だった。シャドーボールがマフオクシーに迫り、これは弾き返すことなくそのまま体を大きく動かしギリギリ回避した。エースパータイプも含むマフオクシーにはゴースト技はこうかはばつぐんになつてしまうのである。

「私のシャドーボールを打ち破るなんてずいぶん鍛えたのね」

「いつか先輩と戦うときが来たときに十分にやりあえるようにと思つて」

「……う、嬉しいわね」

マフオクシーは照れていたがエースバーンは脂汗を浮かべていた。渾身の力を放つたシャドーボールが通用しなかったのである。みらいよちが来ては終わりなのでこの

一撃にかけていたはずなのに上手い具合にいなされてしまった。また鈴仙もエースバーンの意図が読めていたのではのお技ではなくあえてのゴースト技を選択したのであった。二人には実質戦う手段が残されていない。脂汗は滴るばかりだった。

「あら、もう打つ手がないのかしら？ うどんちゃん？」

「まつ、まだまだこれからです！」

なるべく表情を崩さないように気を付けていた鈴仙だったが不安感を少しばかり顔に出してしまった。それを見抜くことのできた純狐は化け物の類か何かだろうか。ストーカーはやはりおそろしい。

「じゃあそろそろ終わりにしましょうか」

「シャドーボール！」

純狐からの命令でマフオクシーはシャドーボールを連発した。ニトロチャージを積んでいたそれらをかわすのは容易であった。しかしそれが逆に不気味であった。あの先輩がこんな避けられる攻撃をしてくれるのはどこかに誘導されているのではないかと。とは言うものの避ける以外の選択肢がなかったので避け続けていた。

「あー、エースバーン、足元」

「え？」

鈴仙の呼びかけが一足遅かったのか何かに躓いてしまった。くさむすびかと思いき

や足元に絡みついていたのはメラメラ燃えている炎であった。技スペースが埋まっているのでマジカルフレイムをくさむすびに應用したのだろう。再び頭からズッコケたエースバーンはすぐさま足元の炎の蔦を引きはがそうとしたががっしりと結びついて中々離れない。

「……そろそろね」

そろそろ。もうすぐやつてくるものの主語は言わなくても鈴仙たちは分かっていた。特にエースバーンは実際にその威力を目の当たりにしていたのでこの動けない状態では恐怖でしかなかった。

「エースバーン、まだまだだったわね」

マフオクシーが木の枝を相手に向けると先ほど消えたみらいよちが再び現れてエースバーンに襲いかかった。

「うわあああああ!!!」

第十一話 エースバーン VS マフオクシー 中編

約一年前、エースバーンもといラビフットは暗い山道をとぼとぼ歩いてきた。ポロポロの体に空腹とひどい状態であった。このラビフットはつい最近野生のポケモンになったばかりである。元トレーナーからは戦闘のときのみボールから出され、それ以外はコミュニケーションを取ろうとすらされなかった。そんな生活を続けていたが、ついに限界が来てラビフットは見限ったのである。

しかし保障されていた衣食住の権利が無くなったため毎日毎日山の木の実などを採集して飢えを凌いでいた。そんなフラフラしていたとき、つい目の前にポケモンがいるのに気付かなかった。

「いて」

「ああん？ なんだお前」

ぶつかってしまったのはならずものポケモンシザリガー。後に小町のパートナーポケモンとなるがこの時点ではただのチンピラである。そしてその両側にはいわへびポケモンのポ、じゃなくてイワーク。そしてゆうもうポケモンウオーグルという地元では中々のチンピラ集団であった。

「ぶつかつたという詫びの一言もないのか？」

「……俺の前にいたお前らが悪いんだろ」

どう考えてもぶつかつたラビフットの方が悪く、すみませんの一言でもあれば波風も立つことなく穏便に終わつただろう。だがやさぐれていた当時の状況ではそんなことは頭になかつたのだろう。いやむしろ誰でもいいから溜まつていた鬱憤を晴らしたかつたのかもしれない。

「しつげのなつていないガキだな！ 死んで後悔するなよ！」

シザリガーのつじぎり、イワークのすてみタックル、ウォーグルのブレイククロウが大人げなくラビフットを襲う。しかしネグレクト気味であつたとはいえラビフットの戦闘経験値は高いものでそれらをかわすのは容易であつた。かわした後はまず一番の巨体であるイワークに渾身の二トロチャージで足を破壊した。バランスを崩したイワークは横にぐわんと倒れ、その先にはシザリガーとウォーグルの二体がおり、下敷きになつてしまった。後にウォーグルはそのときの光景を、ワールズエンドフォールを喰らつたみたいだと語っていた。

「おら、まだやるつもりか？」

中指を立てて挑発するもペシャンコになつているので返答できない。ラビフットがトドメを刺そうとした瞬間、背後から肩を掴まれた。

「もうやめなさいそのあたりで」

「誰だお前は。こいつらの仲間か？」

美しい顔を浮かべるのはキツネポケモンマフオクシーだった。彼女は野生ポケモンではあったが実力はこの辺りでは随一という評判らしい。なので彼女に喧嘩を売る者は普通いないのだがラビフットはそんなこと知らなかった。

「いや違うけど。でも暴れ者を放つてはおけないからね」

「……俺は今イライラしてんだ。怪我したくなきゃ……」

口上を言っている間に目の前にいたはずのマフオクシーが消えており、気付けばラビフットの真横にいた。そのまま至近距離で放たれるマジカルフレイムを避けられるわけもなくウサギの丸焼きになってしまった。

「どうなるって?」

「う……参った」

こうかいまひとつとは思えないくらいの威力だった。たったの一撃で自分との力量の差を見せつけられたラビフットはマフオクシーを先輩として尊敬し、そのまま彼女と共に行動することになった。

その後は技の特訓にフィジカル強化と様々なことを共に行い人間のトレーナーといたときよりもより強くなっていた。長年一緒にいたせいでかなり懐いていた。しかし

別れはいつも突然に訪れるものである。

「先輩おはようございます！ 今日は何の特訓しますか？」

「……ちよつといいかしら、ラビフット」

「どうしました？ そんな神妙な面持ちで」

いつも優しくクールなマフオクシーだったが今日ばかりは普段と様子が違かった。どこか遠くに行つてしまうような……

「実はね、私カロス地方に先輩がいるの」

「カロス地方つてここから結構近いですよ」

二人が今いるここはガラル地方でありカロス地方はまさに隣の地方に当たる。向こうはここよりも寒いらしくこおりタイプが多くほのおタイプは少ないらしい。

「そのポケモンもほのおタイプですか？」

「いや、もつとすごいポケモンよ。私なんか目じゃないくらいだね」

ラビフットの知る中でマフオクシーよりも戦闘スキルの高いポケモンは見たことがなかった。何しろ彼自身今まで一度しか負けたことがないからだ。ヒバニーのころからトレーナーと一緒に旅をしていたが黒星が一度も付いたことがなかったのである。初めて付けられたそんなマフオクシーですら敵わないポケモンに心当たりがなかった。

「昔弟子入りしてね。それでさつきテレパシーで戻つてこいつって言われたのよ。だから

私カロス地方に行かないといけないの」

「その、一体どのくらいですか？」

「分らないわね。あの方は気まぐれでそれでいて厳しいから。私がテールナーのとき
にね……」

ラビフットはマフオクシーから昔行われた修行内容について聞かされた。普通テールナーでは覚ええないはずのマジカルフレ임을習得させられたり、また素早さもテツカニンレベルまで鍛え上げられたりと無茶苦茶だが確かな実力の持ち主であるマフオクシーの師匠について教わった。

「とまあこんな風な師匠なのよ。だから最低でも一年間は帰ってこないと思うわ」

「そ、そんなに厳しいんですか……そのポケモンの名は？」

「ごめんね。それは言うなつて言われているの。なぜか具体的に名前を挙げられるのが嫌みたいなんだよね」

さつきの話でもそのポケモン、とか師匠とか言つて具体的な名前は言わなかった。どうしてかはもちろん分らないがカロス地方固有のポケモンかなという予想しかできなかつた。

「どうする？ 私に付いてきたら分かるけど……来る？」

突然の勧誘にラビフットはびつくりしたが結論は決まっていた。先輩の先輩に力を

つけてもらえれば今よりも強くなれる。しかも場合によつては先輩にも勝てるかもしれない。だから即決でマフオクシーに言った。

「俺、行きません」

マフオクシーですら限界の修行である。自分みたいな者が行っても何の成果も得られずに帰還する、あるいは永遠に帰還できない可能性がある。むしろその可能性の方が高い。それにそもそもマフオクシーと同じように修行しても差が縮まるわけがない。これからは自力で鍛えるしかないのである。

「意外な返事ね。じゃあ私はもう行くわね」

「……先輩。次会う時は勝負しましょう。それで……」

「ええ、分かっているわ。私に負けないようにね」

本当に強い者は多くを語らない。それだけを言うのと背を向けて南に向かって歩き出した。いつ会えるか分からない相手であり、自分の強さを追い続けるきっかけとなったポケモン。そんな彼女が自分の元からいなくなるという事実には悲しい気持ちにはならなかった。多少はあったかもしれないがそれよりも覚悟を決めなければという方が強かった。チンピラから戦士になった瞬間だった。

それから一年後、ラビフットは未だ進化できずにいた。ヒバニーからラビフットにな

るのはそんなに時間はかからなかったが、いつまで経ってもエースバーンになっていなかった。だが特に支障はなかったのでストレスはなかった。今日も最近覚えた技のトレーニングをしていると目の前の空間が割れた。

「君がラビフットかな？」

目の前に現れたのは人間らしき女。と思ったがどこか人間とは違う雰囲気である。そして傍らにはキュウコン。どうやらその人間(?)の相棒。ポケモンらしい。かつては自分がキュウコンの立場にいたことが脳裏に浮かぶ。久しぶりに人間を見てラビフットはふと気づいた。自分自身に人間を認める寛容さがまだ十分に育っていないことに。

「ああ。そうだが」

「突然で悪いんだが……バトルをする気はないか？」

それから八雲藍と名乗る妖怪狐から話を聞いた。どうやら幻想郷という場所でポケモンバトルがあり、それに参加してくれるポケモンを募っているらしい。その時点で胡散臭さはバツグンだが最大のポイントは人間、および妖怪とコンビを組んで戦うということだ。ラビフットの世界に妖怪はいないので実質人間と同類である。

「そんなのに乗るメリットはないな。何かご褒美でもあるのか？」

「えーっと……これはまだ公表してはいないんだが、どうやら紫様……私の主人だが、わるだくみをしているようだな。何でも願いを叶えるのかなんとか。私もよく分からない

んだがな」

これまた胡散臭い話だ。願いを何でも叶えるなんて上手い話があるとは思えない。ホウエン地方にそれっぽい伝説があるみたいだが同じようなことを起こせるとは思わなかった。だが……

「もちろん無理強いはいしない。無理に連れてきて暴れられても困るからな。どうする？」

「時間が必要なら……」

「分かった。行く」

「えっ!? 良いのか?」

即決に藍もキュウコンも驚いた。人間に対して敵意を持っているのが見え見えだったからほぼ諦めかけていたからである。疑わしいところもあつたが褒美でマフオクシーに出会いたかったからだ。自分がどれほど強くなったかを見てほしかったのである。

「けど、その前に聞きたいことがある。キュウコン」

「私? どうしたの?」

これだけはどうしても聞きたいことが藍ではなくキュウコンにあつた。

「あなたはその妖怪のポケモンらしいけど……その妖怪はどんな妖怪?」

「そうね……あなたの思っているような回答かどうか分からないけど」

ラビフットは眉をしかめた。ここで少しでも人間や妖怪に対して不信感を持たせるような発言をしたら考えを変えるつもりだった。

「……楽しいよ？ 少なくともあなたが思っているよりも」

「そうか。分かった」

その一言だけでラビフットは幻想郷なるところへ行くことになった。目の前にいるキュウコンは自分よりも格上ということは一目瞭然であり、そのポケモンが楽しいといってくれたのだから大丈夫と思えたのである。その姿は一年間会っていなかった先輩のように思えた。

こうして幻想郷に移ったラビフットはとある竹林で鈴仙・優曇華院・イナバと出会うことになる。

第十二話 エースバーン v s マフオクシー 後編

極限状態になると人もポケモンも走馬灯を見る。エースバーンも迫り来る強大なみらいよちに対して走馬灯を見ていた。ラビフットの頃の思い出、そして負けられない先輩。時間にして本当に須臾だったが永遠のように長く感じた。このまままた蹂躪されるだけなのか……

「エースバーン！ 大丈夫！ そのまま耐えて」

背後からトレーナーの鈴仙の声がした。一瞬何がどう大丈夫なのか理解できなかった。何しろ相手はあのマフオクシー先輩なのである。喧嘩を売ってきた伝説ポケモンたちを返り討ちにしたという武勇伝を残してきた彼女の戦闘力は凄まじい物である。そんな彼女の切り札であるみらいよちをともに浴びてHPが1残る未来は予知できなかつた。

「何言ってるんだ！ 無理に決まってるだろ！」

「大丈夫！ 私を信じて！」

「っ！ ……ったく！」

出会ってたった数日なのに信じろと言うのが無理な話である。しかもそれが信頼の

できない種族だとしたらなおさらである。だがエースバーンは鈴仙に会ったその瞬間、どこか他の人間とは違う感覚を覚えた。これがなんなのかは未だに理解はできていない。人間や妖怪などを信じられるようになったわけではない。しかし今は信じてみたい。勝利のため、そして自分の直感のため。

「あらら、随分と派手にやっちゃったじゃない」

「あの子は特別だからね。本気でやらないと倒せなかったのよ」

爆炎を眺めながら純狐とマフオクシーは呟いていた。エースバーンの言う通りマフオクシー自身もみらいよちの火力を自負していた。しかもしっかりと拘束していた状態なので回避することも不能。完全に勝った気分だった。だがマフオクシーはかつての自分がラビフットに言ったことを失念していた。

「！ マフオクシー後ろ！」

「へっ？」

敵に背中を向けたとき、その瞬間が最も神経を集中させるときよ。その言葉通りマフオクシーの背後から何かが飛んできた。炎を纏ったそれは轟音と爆炎を撒き散らしながらマフオクシーを貫いた。

「きゃああー！！」

「マ、マフォクシー！ 大丈夫!？」

飛んできたものは石ころだった。しかしそれはただ単に子どものイタズラ程度のレベルではなく、半減であるはずのマフォクシーのHPのほとんどを奪うレベルのものであった。石を使う技は色々あるが炎を纏う石を使うものは一つしかなかった。

「ハア、ハア。な、何で俺瀕死になってないんだ……？」

「やつぱりね。信じてよかった」

エースバーンの放った技はかえんボール。石に炎のエネルギーを溜めて蹴り出すというシンプルな技だがその分扱いやすい技なので威力は申し分ない。本当はラビフットのときに覚えたかったが覚えられず、鈴仙と特訓している間に身に付けることができず。マフォクシーにはラビフットの頃の記憶が強かったのでかえんボールを覚えることを失念していた。それが命中したことに驚いていたのはエースバーン本人であった。聞こえた『かえんボールよ!』という声に従って無我夢中で打ったのである。

「どういうことだ鈴仙?」

「あなた、自分で思っているよりも弱くないのよ。現にあのみらいよちを耐えたのがその証拠ね」

鈴仙の目論見通り、エースバーンの耐久はそれほどヤワではなかった。マフォクシーの火力は目を見張るものがあるがエースバーンも負けじと防御に努力を注ぎ込んでい

た。瀕死ギリギリでフラフラにはなつたがここまで耐えられると鈴仙は予想していた。確たる根拠があったわけではなかったが何故か大丈夫だと思つた。博霊の勘ほどのものではないがそれに近いものが耳に流れた。

「俺が……か？」

「そうよ。あなた、あの先輩に勝ちたいんでしょ？　今まで一度も勝つたことないなら負けたくないって気持ちだけは絶やしちやダメよ。とは言うものの私もまだ師匠に勝つたことないんだけどね」

「……そうか」

エースバーンが鈴仙を選んだ理由が今なんとなく分かつた。自分と共通点が多かつたからである。自分の前に立ちはだかる大きな壁があること、そして目標に対する直向きさがあることである。もちろん本人に自覚はないが心の奥底ではそのようなことを考えていた。

「あなたもそういえば特性もうかだつたわね」

エースバーンもマフオクシーもトレーナーで言うところの初心者用ポケモンであり、特性はもうかであり、HPが少なくなるとほのおタイプの技が強くなるというものである。先ほどのかえんボールがものすごい威力だつたものこの特性のおかげである。だがそれは相手にとつても同じ。これからは先に一撃入れた方の勝ちとなるだろう。

「ふふ、嬉しいわ。こんなに成長しているなんて」

「うどんちゃんも格好良かったわよ。ナイスコンビネーションね」

「あ、ありがとうございます……」

相手側から褒められるとは思わなかったことよりも邪心無い言葉だったことに鈴仙は驚いた。いつもならば怪しい含み笑いに戦っているところである。少しはバトルに集中しているということなのかな？

「じゃあ行くわよー！」

「はい！」

マフォクシーの合図とともにしんそくのスピードで間合いを詰める。何回もニトロ口チャージを積んでおり余裕で逃げられるはずであるがなぜか一向に逃げきれている様子が無い。今までは手を抜いていたということだろうか？ いやそうではない。何が起きるか分からないポケモンバトルではできる限り力を温存しておくのが定石である。そのブレーキを外させたということは向こうも限界ということである。

「純狐！」

「どうしたの？」

「いいタイミングでさいみんじゅつお願いね」

「ええ、分かったわ」

いくらマフオクシーが速くなったとはいえ元々速いエースバーンに技を当てるのは容易ではない確実に動きを封じてからトドメを刺すつもりだろう。それに喰らったら一巻の終わりである。それを純狐に託したのは鈴仙の考えをある程度予測できるからだろう。現に先ほどマジカルフレイムでくさむすびを考案したのは純狐であり、そのブレインは確かなものである。今純狐の目は鈴仙の方を向いており、これはエースバーンとマフオクシーの戦いであると同時に鈴仙と純狐の戦いでもある。

「こっちの考えは筒抜けってわけね……あ！ エースバーン！」
「何だ!？」

「私のタイピングで地面に向かってかえんボールを打って！」
「分かった！」

エースバーン自身気付いていないが二人の間にはすでに信頼関係が築かれていた。あれほど人間に憎しみを抱いているはずの彼が一介の妖怪の言うことに素直に耳を貸していることがその証拠である。

「ふふ。逃げられるかしら。シャドーボールよ」
「全力で避けて！」

連発で放たれるマフオクシーのシャドーボールだが鈴仙は対抗することなくただかわすと命じるのみ。神経を集中させて回避しなければならぬのでエースバーンの負

担が大きい。耳で技を感知することができるとは、背後から狙われるのは恐怖だろう。それでも黙って行動するのは目に見えない絆があるからである。

「まだ……まだ……」

何かを伺っている鈴仙。ただただエースバーンが逃げ回っているようにしか見えな
いが実は鈴仙の思惑通りに事は運んでいる。

「……今よエースバーン！」

「……はっ、いけないマフオクシー！」

エースバーンが言われた通り地面に向かってかえんボールを放つとマフオクシーは
顔を手でブロックした。エースバーンが蹴りだしたそこは玄武の沢を流れる小川の
上空であった。二匹が空中に跳びだすタイミングと小川が一直線上に並ぶタイミ
ングを計っていた。すてみの計画だったが案の定作戦は成功し、マフオクシーに隙ができた。
二匹を隔てる大きな水壁からシャドーボールが飛んできてマフオクシーにクリ
ーンヒットした。ただでさえ水に弱い上ゴースト技を喰らってはマフオクシーと
言えども立ってはいられなかった。

「マフオクシー戦闘不能。エースバーンの勝ちだ」

スキマから聞こえる藍の声で試合は終了した。限界を超えた戦いだったのでその
声でエースバーンも倒れこんだ。だが勝利はエースバーンと鈴仙のものである。

「よく頑張った……いえ、一緒に戦ってくれてありがとうね。ここは」

この勝利はお互いがお互いを信じあつた結果の勝利であるのでどちらか片一方のおかけにはしなかった。そうするのがエースバーンが嫌がりそうと思つたからである。もう氣を失つて鈴仙の声は聞こえはしなかったが想いは伝わつただろう。

「ふう。よく頑張つたわね二人とも」

「え、大丈夫なの？ マフオクシー」

「まだちよつとフラフラするけどね。喋るくらいなら平気よ」

倒したはずのマフオクシーがもうすでに起き上がりこちらに対して話しかけている。これではどちらが勝者か分からない。

「……ありがとうね。この子のパートナーになつてくれて」

「い、いえ。私なんて大したことは……」

「別の種族でここまで心許したのはあなたが初めてよ。それだけで大したことをしているの。まあ今は分からなくても大丈夫よ」

「あの、私が言うのもなんですけど……今後エースバーンをよろしくお願いします」

「……そうね。可愛い後輩だものね」

そう言うマフオクシーはどこかに姿を消した。ほんのちよつと目を話した際に狂氣の瞳ですら追えないところまで去つていた。鈴仙はマフオクシーの底が見えないと

思った。

「うふふうどんちゃん。すごかったわね。どう？ この後私と一緒に」

「エースバーンを回復させないといけないのでお断りします。それでは」

「あらら、いけずね」

回復も逃亡も本音である。早く師匠のところまで行かせてあげたいのでこれ以上の揉め事はNGである。

「……あ。あの二人にあのこと言うの忘れてた」

すぐに言うとは混乱させるかもしれないので純狐はのんびりと二人の向かう永遠亭まで歩いて行くことにした。

第十三話 仙人と仙人

勝負をするにあたり自分の戦いやすいフィールドに持ち込むことは多くの場合アドバンテージとなる。その地理に詳しければ詳しいほど戦術も広がるからだ。ここ妖怪の山の天狗のナワバリ付近は片腕有角の仙人、茨木華扇にとっては庭のようなもの。条件的にも、相棒ポケモン的にもこの戦いはかなり有利なはずであるが華扇は露ほどの油断もしていなかった。己の中の油断大敵がすっかり備わっているだけではなく相手が相手だからだ。

「じゃあそろそろ始めましょうか。仙人同士仲良くね」

「ええ。胸を借りるつもりで挑みましょう」

「あら華扇様には借りるまでもなく十分な胸があるじゃないですか」

「そ、そう意味じゃありません！」

この飄々としている青髪の綺麗な人は霍青娥という邪仙である。仙人という種族ということもあつてか華扇とはよく顔を合わすことも多くそれなりに喋る機会はある。青娥は華扇について気に入ってはいるが華扇は青娥のことを苦手な人に分類している。このように軽いセクハラ発言をしてきたり揉まれたりとおちよくられているのが止め

てほしいと思っている。

「冗談ですよ。早速あなたのポケモン見せて下さいね?」

「分かりましたよ。すぐ終わらせましょう。私のパートナーはこの子です!」

珍しいフレンドボールの中からポケモンが出てきただけなのにその上空には雷雲が突如立ち込めた。雷鳴と共に現れたのは出てきたボールと同じ緑色の伝説ポケモンであった。

「すごい強そうですね。もしかして伝説のポケモンですか?」

「そうですね。レックウザというポケモンで最近私の家に訪問してきましたね。意気投合してそのまま相棒となってもらいました」

まるで自分が褒められたかのように大きく胸を張る華扇。伝説として文句のない実力の持ち主であるレックウザだが実は藍が連れてきたわけではないポケモンの一匹である。たまたま宇宙をふらふらと散歩していたところ幻想郷に迷い込み、華扇の別荘までたどり着いたというわけである。普通のポケモンでは侵入不可能であることから相当地な実力者ということが一見して分かったと華扇は言う。

「まあ俺も特にすることなかったしな。暇つぶしにでもなればってな」

「そうなんですな。でも華扇様に参加するとは正直思っていませんでしたよ?」

「こういう俗っぽいものに関しては何びつどころか批判する立場にいる華扇なので、

監視することはあっても参加することはないと思われた。しかし華扇にはある思惑があったのだ。

「確かに霊夢みたいに私に何か欲しい物があるわけではありません。ですがもし私たちのチームが優勝して何でも願いを叶えられることができたのならば、霊夢に一度本格的な瞑想を受けてもらいたいのです」

本来は何かしらの金品や物などが対象となる今回の報酬だが、紫の力添えがあれば霊夢に瞑想をさせることくらい訳ないだろう。それに霊夢と華扇は別チームなので華扇が勝てば霊夢は敗者のはずなので甘んじて受け入れるしかなくなる。瞑想でもして心を落ち着けてもつと巫女らしくしてほしいというのが華扇の願いである。

「霊夢さんのことすごく大事に思っているのですね」

「当然です！ 妹みたいなものですからね。それよりあなたもそろそろポケモンを出してください」

「長話に夢中になりすぎましたね。それでは私のポケモンはこちらですわ」

頭に刺してあった簪の後ろに隠していたモンスターボールを手に取り放ると中からはスライム状のポケモンが現れた。

「メタモンって言いますわ。どうぞお見知りおきを」

「……あの、こんなことを言うのも失礼なのですがこのメタモンというポケモンは強い

のですか？」

華扇は自分のレックウザと見比べて言った。見た目だけで判断するのは良くないのだがどこからどう見ても強そうには見えない。紫色のプルプルした体に加えて小さなサイズであり、伝説のレックウザとタイマンを張るには少々力不足のように感じた。バトルと言うからには一方的なリンチにはしたくなかった。

「まさか！ このままの状態ではプチツと潰されて終わりですわ。メタモン、へんしん！」

青娥の掛け声とともにメタモンは体をクネクネと変形させた。紫色の体が徐々に緑色になり、点だった目が鋭い目つきになり見たことのあるフォルムになった。

「びっくりしましたか？ この子はどんな姿にでも変身することができるとですよ」

メタモンがレックウザと瓜二つの姿に変身した。バディを組んだ華扇は短い間だがレックウザと厳しい修行を共に行ってきた。だからこそ偽物が現れたとしても見分けられると思っていたがどっちがどっちか分からない。

「……すごいポケモンもいるのですね」

「驚いてもらえて光栄ですわー でももちろんそれだけではなく……」

青娥が何か言い出そうとした瞬間、目付きが変わった。その些細な機微の変化に気付いた華扇は身構えた。すると向こうのレックウザが口を開き、その中から火球が見え

た。華扇の意図をすぐさま汲み取ったこちらのレックウザも同様の攻撃を放った。「きやあぁー!!」

声の主は華扇であった。相手とこちらのかえんほうしゃが炸裂したのである。わずかに華扇側の反応が遅れたとは言え、伝説ポケモンと同等の火力を出せるとは思えない程であった。急所には当たらなかったので一撃でダウンということにはならなかったが中々のダメージを負ってしまった。

「いつもは気丈な振る舞いをする華扇様でもそんな可愛らしい声を出すのですね。私、興奮してきましたわ」

この邪仙、見た目通りのドSである。人が苦しむのを見るのが最高の娯楽という歪んだ思考の持ち主であり、快楽主義である。キョンシーなるものを作り出したのもそういう考えが根底にあるからかもしれない。

「そのポケモンはコピーした相手の能力までも真似るのでね」

「そうですわ。相手と力を互角にしておけば細かいスキを突くだけで勝利に近づくのですから」

卑怯と一言で片づけるほど華扇は小物ではなかった。戦略は人の数だけありその中で自身が一番マツチしたものを見つけたことが大事だからである。どちらかというところ力押しするきらいがある華扇にとって青娥のようなトリッキーな相手はできるだけ対

峙したくない相手であった。だが今更そんなことを言ってもしょうがない。華扇は心のハチマキを締め直した。

「確かに私はあなたのような妙案は思いつきませんでした。このレックウザとともに力とスピードを重点的に鍛えてきましたからね。ですがその成果は伊達じゃないんですよ！」

「舐めんじゃねえぞ！」

レックウザが再びかえんほうしゃを放った。それと同時にメタモン側もかえんほうしゃを放ち、今度は同時にぶつかり合った。拮抗した力では勝負がつかないと思われた。

「まだいけますよね！ レックウザ」

「当たり前だろ！ 俺は……ホウエンの最後の砦だからなあ！」

かえんほうしゃの威力が突如ブーストした。炎の色が赤色から青色に変化し、オーバーヒート並みの威力になり偽物を吹っ飛ばした。レックウザの強い思いが威力を底上げしたのかもしれない。華扇の願いを叶えさせてあげたいという優しい思いがレックウザにはあった。

元々ホウエン地方で様々な人間とポケモンを見てきたレックウザであったが自分が誰かの手持ちになるとはこれっぽっちも思っていなかった。何しろ人間のポケモンの

扱いが下手すぎるからである。まるで道具か何かのように扱っている人間が大半だったからである。もちろん人間と組むことで得られる力については重々承知していたがそれよりもストレスというデメリットが大きすぎると考えていた。

「やつぱり……こいつと組んでよかったな」

メタモンを弾き飛ばしてそんなことを呟いた。華扇の別荘に偶然入ったときに見たのは雷獣や大鷲や自分と同じ龍など様々な動物たちであり、そこでレックウザは茨木華扇という一人の仙人の中身を感じ取った。全ての動物たちから好かれてるのはもちろん、一匹一匹に対する配慮があり、彼らの言葉が聞こえているようだった。道具扱いしないトレーナーならば組まない理由がなかったのですぐさま組むことを進言した。了承してくれたおかげで今までよりもおよそ1.5倍のパワーを与えてくれた華扇には感謝しかなかった。

「さすが華扇様のポケモンですね。ですがその耐久力もしっかりコピーさせてもらいましたからね」

完全に決まったと思いきや向こうのレックウザはまだ立っていた。ドラゴンタイプにほのお技はこうかいまひとつであり、倒し切るには不十分であった。だがこのまま押していけば勝ちに近づくと確信していた。

「ふん、俺たちの絆を甘く見たのが敗因だな。さあ痛い目に遭う前に降参するんだな」

「うーん痛い目は合いたくないですね〜 ということで」

「次の作戦だね、青娥」

いかつい顔のレックウザ（偽物）から可愛い声が聞こえた。さつきから黙っていたメタモンの素の声が聞こえた後、再び別の姿に変身した。今度は緑色の姿ではなく別の色に変身していた。

「えっ……?」

それは予想外の変身であった。もつと強いポケモンとかに変身すると思いきや、まさかの青色の髪を持つ女性の姿であった。

「これでいいかな?」

「ええ。ちゃんと私になってるわよ。偉いわね」

「えへへ。嬉しいな」

青娥が青娥を褒めていた。変身したのはポケモンではなく、トレーナーの方だった。普通メタモンはポケモンにしか変身できないはずだが青娥が育てたということもあり特殊な能力を身に付けていた。見た目は完全に瓜二つであり立ち位置的に華扇から見ると右側がメタモンということがかろうじて分かるくらいだ。

「さあ、第二ラウンドの始まりですよ!」

これからが本番だということが嫌でもひしひしと伝わった。今まで味わったことの

ないバトルにレックウザは逆にわくわくしていた。

第十四話 青娥と青娥

「どうですか華扇様。見分けがつかないでしょう?」

「え、ええ……でも一体何のつもりで」

華扇は自分が喋っている途中で気付いたのだろう。青娥が、ひいてはトレーナーが増えたことの真意について。すなわち今ここで逃げられてしまったら取り返しがつかなくなる可能性が高い。

「レックウザ! いますぐ右側の青娥にしんそくです!」

「遅いですわ。こちらもしんそくで逃げます」

ワンテンポ遅れてしまったためこちらのしんそくは相手のしんそくに届くことができず、広い天狗のナワバリの中に逃げ込まれてしまった。

「まずいわね……」

「どうかしたのか?」

事の重大さにイマイチピンと来ていないレックウザに華扇は静かに説明し始めた。

「多分青娥たちは今別行動をしているでしょう。その理由が分かるかしら?」

「いや? というか単独行動は危険じゃないのか」

レックウザの言う通り人間とポケモンはともに行動することでその潜在能力を引き上げることができる。人と組むことをやたら拒んでいたレックウザだからこそその点にはよく理解していた。一人のところを狙われたら太刀打ちはおそらくできないだろう。

「そうね。でもこのバトルのルール覚えてるかしら？」

「ルール？ そんなの少々把握してねえよ」

「小さなことでも頭に入れるのが肝要よ……ねえ、ちよつといいかしら紫」

指パッチンをする華扇の背後から紫が出現した。ここで呼ばれると思っていたのかポーズをばっちり決めてスキマの中で佇んでいた。

「何かしら？ 私に聞きたいことがあるのでしょうか？」

「聞きたいというか確認なんだけど……確かポケモンが人間に、もしくはその逆が大きな攻撃受けたら反則負けでしたよね？」

「そうね。主に幻想郷の者たちが暴れないようにするためのルールね」

「それって今回みたいにとつちがポケモンか分からない状態で攻撃した場合はどうなるのかしら？ 過失の場合は例外かしら？」

「……残念ながら適用範囲内よ。向こうの方が一枚上手だったということね」

「ここまで聞いてレックウザはようやく理解することができた。つまり、レックウザがメタモンだと思つて攻撃してもそれが本当に青娥の可能性があるということである。

50%の可能性で華扇側の反則負けになる。もちろん本物青娥が偽物青娥を庇うような真似をしたとしてもそれは反則にはならない。

「なるほどな。でもそれって俺たちが攻撃しなければ負けることはないんじゃないか」「まあね。でもそんな余裕まであるのかしら?」

紫がそう言うのと後ろからエネルギーを感じた。ヒラリとかわして背後を確認するとそこに二人の姿はなかった。どうやらずいぶん遠距離から攻撃を仕掛けているようだ。「何もしなければこっちが負けるってか。くっそ、どうすればいいんだ」

下手に動いて攻撃を与えるのはリスクが高すぎる。一発アウトになってしまふのはもちろんだが戦いに夢中になってそのスキを突かれてはこちら側の体力がもたない。現にさつきも中々のかえんほうしやをくらったのでそれほど耐久的に余裕もない。

「……………ここで考えても仕方ないわ。被弾しないように注意しながら距離を詰めるわよ」「了解した」

華扇はレックウザに飛び乗り先ほど攻撃が飛んできた方向に向かって進んだ。こちらが近づいてきていることに気付いているのかいないのか、砲撃の手が休まることはなかった。華扇側にとっては好都合だったのでグレイズしながら攻撃主に近づいて行った。

「いたぞ! 喰らえメタモン……」

「待つて！　これは本物よ」

レックウザが攻撃を放つ寸前に華扇が制止した。確かにこの方角から攻撃が飛んできた。間違えるはずがないのに止められたレックウザは華扇をじつと見ていた。

「でも華扇、どこからどう見ても……」

「うふふ。よく分かりましたわね。流石は華扇様」

霍青娥は自分が本物であるかをアピールするかのように弾幕を体に纏ってきらびやかに浮かび上がった。ポケモンは弾幕を撃つことはできないので本当に目の前にいるのが青娥であることが証明された。青娥はそれ以上は何も言わず飛び去った。トレーナーに攻撃することはできないので華扇たちはただ見ていることしかできなかった。

「……本当に華扇の言った通りだったんだな。どうして見分けることができたんだ？」

「見分けてなんかないわよ。瓜二つで次からは分からないし。でも青娥だったらこつちがミスすることを誘いそうと思つたからあなたを止めただけよ」

掬め手を多用する青娥ならばそういうことを警戒する必要がある。今回の読みは当たったが次出くわしたときに対応する手立てがないのもまた事実。振り出しに戻ってしまった。

「どうするかな。俺の使える技に補助技なんてないしな……ん？　ちよつと待てよ」

「どうしたの？」

「……華扇。俺はお前ほど賢くはない。だからお前の力が必要だ」

レックウザが思いついた方法はぶつとんだ方法であり一人ではほぼ不可能である。だが華扇でないとできない方法でもあった。レックウザは華扇にその作戦を話し、それを静かに聞いた。

「なるほどね。それは確かに私にしかできないことね」

「だが……お前への体への負担が大きいで。それでもいいのかわ？」

「仙人の肉体を甘く見ないで。あなたと同レベルの耐久力はあるつもりよ」

「流石だな。じゃあ俺に乗ってくれ」

この作戦が青娥たちに通用するかどうかは分からない。しかし作戦を考えてくれたレックウザのためにも成し遂げたいという気持ちが強くなっていった。華扇はレックウザに飛び移り、作戦通りにしんそくを使った。

「しっかり捕まってるよ！」

レックウザは自身の体を収縮させて速度を溜めてしんそくのスピードを極限まで高めた。そしてその力が解き放たれたとき、天狗の山は緑のとぐろで覆われた。目にも止まらぬスピードで山中をその巨体でかけずり回った。もちろんこのスピードでメタモンを倒そうというわけではない。これはあくまでも攻撃を当たらないようにするためである。現に飛んでくる攻撃もかすりもしていない。

「大丈夫か、華扇」

「平気よ。それよりちゃんと特攻するタイミングを教えてね」

華扇にかかる力は非常に大きいはずだがものともせずレックウザの上で構えていた。マツハくらいでグラつくほど修行を怠ってはいない証拠である。そして華扇が特攻とは言ったものの本当にぶつかるわけではない。

「よし、じゃあ滝に近い方の青娥から行くぞ。5、4、3……」

レックウザのカウントが始まった。今は山のあちこちを縦横無尽に駆け回っているが、実は向こうからこちらの姿は見えないように動き回っている。頭は良くないとは言ったもののレックウザは頭は良く回る方であった。華扇から青い髪は一切見えない。信頼できるのはパートナーのレックウザのみ。だからこそ一切の心配はなかった。

「1、0。今だ！」

レックウザの合図で華扇が右手を伸ばすとその手の中には綺麗な簪は握りしめられていた。青娥は壁をすり抜けられる程度の能力をその簪を用いて行使する。幻想郷特有の能力を使うのはルール違反であるが取るのはその範囲外である。もちろんすり抜け能力は使えないがレックウザの狙いは簪そのものであった。そして華扇も握りしめたその瞬間で確信が持つことができた。

「何だったのかしら？ 今の」

簪を取られたこの青娥は本物であった。あまりにも速かったので動くスキすら与えてくれなかった。だが奇妙だったのは攻撃を当てようとする気が一切感じられなかったことである。不用意に攻撃できないのではあるうがその割には先ほどから山中グルグル暴れていたのが気になった。簪を取られたその意図も分からなかった。分かるのはこんなことを普段の華扇は思いつきすらしないだろうからレックウザが何かしら考えたのではないかということであった。

「あまり悠長とはしていられないかもしれないわね」

普段はからかいがいのある華扇であるが勝負事などになると話は別である。なにしろ単純な戦闘能力では青娥は華扇の足元にも及ばない。向こう側に流れを持って行かれるとあつという間に決着がついてしまう。ここはメタモンと合流して一から作戦を練り直そうと考えた。

「聞こえる？ メタモン。次華扇様がそっちに行ったら背後に気をつけるのよ」

メタモンにテレパシーを送る青娥。一緒にいない可能性も考慮してテレパシーを使えるように特訓したのであったが返信がない。

「……あれ？ どうしたの？」

嫌な予感がよぎる。青娥によく懐いていたからこそ会得できたテレパシーに応答し

ないことがその証拠であった。青娥は華扇たちに位置がバレてしまうことも厭わずにメタモンの元に駆け寄った。

「メタモン！ どうし……」

小声でメタモンを呼ぶもそこにいたのは青娥メタモンではなくただのメタモンであった。つまり変身が解けて目をぐるぐる回していたのであった。

「ふう。やっぱりこつちが偽物であつたのね。中々の博打だつたわ」

「でもそのおかげで勝てたからよかつたじゃねえか」

「まあね。ありがとう」

メタモンの前に居たのは華扇とレックウザ。しつかり偽物の青娥を見極めて倒したのであった。タイムマン勝負になれば二対一では勝ち目がない。勝敗に異を唱えるつもりはなかつたが青娥には腑に落ちないことがあつた。

「すごいですわ華扇様。それにしてもどうして私が本物だと分かつたのですか？」

一回目及び二回目に出会つた青娥はどちらも本物であつた。一回目はともかく二回目に何かしらの策があつたから勝利をもぎとつたと思われた。

「青娥、あなたの簪つて壁に穴を空けられるわよね」

「ええ。私の一番のお気に入りですわ」

「それに含まれるエネルギーはメタモンにもコピーできないんじゃないかなつてレック

ウザが」

つまりはこういうことである。メタモンがコピーできるのは外見、仕草、そしてその能力である。普通は所有物にまで模倣の意識を向けることはない。それに目を付けたのがレックウザであった。

「私とあなたは仙人同士。それなりにあなたのことも分かっているつもりよ」

華扇にはすべてお見通しであった。自分のものは重すぎる位の思いを込めて愛でる人物であることや気に入った人物にはしつこいくらいのアプローチを仕掛ける人物であることも。

「思いにはエネルギーが宿るわ。簪を握った瞬間その大事にする気持ちが伝わって来たわ。それが今回の敗因ね」

「……ふふふ。流石は華扇様ですね。いえ、華扇様たちといったところですね。見事なコンビネーションでしたわ」

青娥は言いようのない悔しさを抱えていた。負けたことではないと断言はできるがなんなのかは明言できなかった。それが苦笑いと言う形で顔に出ていた。普段の青娥からは出ることのない表情であった。

「……うう、ゴメンね青娥」

「メ、メタモン。気が付いたのね」

目覚めたメタモンを抱き上げるとメタモンはニコツと笑っていた。青娥とは違い悔しきは露も見られなかった。ただ喜びの表情に満ち溢れていた。

「負けちゃったけど青娥と一緒に戦えて楽しかったよ。エヘヘ」

「メタモン……」

「俺たちをここまで苦しめたんだからな。見事だったな二人とも」

「青娥。いいパートナーを持ったわね」

レックウザと華扇、そして当の本人のメタモンの声を聴いてモヤモヤは解消していた。青娥はただ自分たちのコンビがいいコンビであることを見て欲しかっただけなのであった。自分にも心を許せるパートナーはいると。

「世間じゃ邪仙なんて言われてるけど……本当はただ純粹なだけだったこと、分かっているつもりよ。私は」

華扇はやっぱり知っていた。優しい声で茨華扇の勝利で第2ラウンドは終了した。どちらの陣営も一勝一敗となり、次の勝敗で全てが決まる。

第十五話 鳩鷄鴉駒

永遠亭チームと妖怪の山チームの戦いも佳境に入った。舞台は華扇の別荘。この勝負に勝った方のチームが二回戦に行くことができる。対戦相手は庭渡久佗歌と驪駒早鬼。相棒ポケモンはピジヨット、アーマーガアという鳥ポケモン同士であった。先の異変で仲良くなった二人であったので遠慮なく力をぶつけ合っていた。当然別荘は半壊状態であり、この空間でなければ大変なことになっていただろう。

「早鬼さんのアーマーガア強いですね！」

「お前のピジヨットもな」

半壊状態になつてはいるが試合の流れはどちらにも傾いておらず膠着状態であった。なぜならばアーマーガアがどんな攻撃を仕掛けようともピジヨットのかげぶんしんでかわされるからである。一方、ピジヨットからの攻撃も空の王者、アーマーガアの鉄壁の鎧には傷一つ付けられないからである。実際にてっぺきも積んでいた。

「楽しいが……全然進展しないのも困りものだな」

「一発でも当たれば倒せるのによ」

アーマーガアは早鬼とは反対にもどかしく思っていた。相手は自分よりも格下の一

般ピジョット。そんな相手に手こずっている自分に嫌になっていた。プライドが高いのが短所になってしまっていた。

「俺に当てられるものなら当ててみな。タクシー野郎」

ピジョットは挑発したつもりだったがアーマーガアには効かなかった。トレーナーの足になるうと思っただのは自分自身の意志でありそのことを恥じるつもりは毛頭なかった。自分に確固たる自信を持っているのが大きなプライドを持つことの長所でもあった。しかしピジョットの言うことも尤もであった。攻撃力・防御力と引き換えにピジョットは圧倒的素早さを有していた。かげぶんしんを使われていなくとも当てるのは至難の技であつただろう。

「ピジョット、このままじゃ罅が明かないからあの奥の手使おうよ」

「……そうだな。ジリ貧になつたら俺たちの負けになるからな」

いくらかわし続けていると言つても一発でも当たればKOであつた。それを軽んずるほど油断はしていなかった。こつちの攻撃に合わせて攻撃が飛んでくる、すなわち力ウンターが飛んでくる可能性もあつたからだ。

「ほう……来るか」

早鬼は久侘歌たちが何か仕掛けてくると分かると、乗っていたアーマーガアから飛び降りた。何十メートル上空から飛び降りても平気な顔をしているのは比類なき脚力を

持つ程度の能力のおかげだろうか。アーマーガアがよく分かっている顔をしているところから作戦は伝わっていないのだろう。だが二人の信頼の上ではそんなことは些細なことだった。ただ真つ直ぐと対戦相手を見つめていた。

「行くよピジヨット！」

「迎え撃つぞ！ ブレイブバード！」

突進してくるピジヨットに真つ向から最大火力のブレイブバードをぶつけた。この一撃で全てを終わらせるつもりだろう。青いオーラを纏ったアーマーガアには競り負ける自信はなかった。

「……今よ！ はねやすめ」

「何?！」

久佐歌たちはそもそも競り勝つつもりはなかった。自分たちよりも格上の相手ならばいかに攻撃を当たらないかが肝要になってくる。そのために編み出したこのはねやすめで急降下することで確実にかわすことができた。しかしこれだけでは終わらない。

「続けてぼうふう！」

「ぐつ、こんなもの……ぬ、抜けられない!？」

アーマーガアの真下に潜り込んだピジヨットはそこからぼうふうを繰り出した。不意を突かれたアーマーガアは見事にかかってしまった。その渦から逃げようとスピー

ドを出そうとするも一向に進んでいる気配がなかった。それもそのはず、アーマーガアの速力よりもピジョットのそのほうが圧倒的に速いので逃げ出すことは不可能だった。

「徐々に徐々にダメージが蓄積していく恐ろしさを味わうことだな」

「ゴメンね。早鬼さん。私たち強くないからさ。こんな泥臭い戦い方しかできないんですよ」

ジワジワとHPを削っていく陰湿な戦い方。早鬼と対峙するならばこういう方法しかないと考えた方法だったが見事上手くいった。囚われのアーマーガアを倒し切るには少し時間はかかるだろうが確実に倒せると思っていた。唯一不安点があるとしたら……

「ふむ、確かにお前らしい勝ちに貪欲な戦いだな。賞賛に値する」

この一切動じていないトレーナーであった。ただ単に諦めているのかそれともきしかいせいの一手があるのかどうか久佐歌には見分けがつかなかった。ただ一つ言えることはまだ油断してはいけないということだ。

「だが……相手が私だったことが誤算だったな！」

早鬼は飛び上がり渦の頭上から中の様子を見た。黒い物体が高速回転をしている様子しか見えなかった。ぼうふうには相手を混乱させる追加効果がある。おそらくア

マーガアも混乱しているのでこちらからの声は届かないだろう。だったらむしろやりやすい。早鬼は渦に飛び込んでいき右脚でアーマーガアを捕らえた。

「いつけええええええー！！」

黒いサッカーボールが渦の発生源に向かって貫入していった。ぼうふうがまるでなにかのようにグングン突き進む。厚い風の壁を超えるとそこには粘り強い巨大鳩がいた。

「危ない！」

先に気付いたのは久侘歌。ピジヨットの羽をもって体を回転させて直撃は免れた。いや、むしろわざと当てなかつたような……そう思った時には遅かつた。

「あ、あれ？ こころは……」

「混乱解けたな。アーマーガア！ ボディープレスでトドメだ！」

「クツ！ ピジヨット逃げ……」

だがはねやすめでしばらく飛べない状況になってしまっていたので、素早いピジヨットとはいえその要望は無茶であった。防御力が高いほど威力の上がるボディープレス。てっぺきを積んでいる状態且つはねやすめでひこうタイプが抜けてノーマル単タイプになつてしまったピジヨットなど耐えられるはずもなかつた。こうして鳥ポケモン同士の戦いはアーマーガアに軍配が上がり、驪駒早鬼のいる妖怪の山チームの勝利となつ

た。

「あー、勝てなかったかー。やっぱり早鬼さんは強かったですね」

「ふっ、組長が易々と倒されるわけにはいかないからな」

早鬼はそう言葉を言い残すとその場を後にした。アーマーガアをボールに戻した後飛び去ってしまった。だが久侘歌、およびピジヨットのするどいめからは早鬼の優しい笑顔が見られた。強敵と戦い、そして勝利したときにしか見えないその顔はこの戦いの中で勝利よりも価値のあることかも知れない。

「さ、私たちも皆の元に戻りましょうか」

ピジヨットを元に戻して最初に集結していた場所に集合する。華扇の別荘は戦いが終了したら普通に出られるように華扇が設定してくれたので滞りなく戻れることができた。その場にはほとんどの人がおり、どうやら自分たちが一番長く戦っていたのだと久侘歌は理解した。

「あーら、私たちはここで終わりなのね。つままないわね」

「まあ。しょうがないわよ。他の人の試合を観戦しましょ」

二回戦は自分こそが出ようと思っていたパチュリー・ノーレッジは悲しそうな顔を浮かべていた。傍にいるムウマージも溜息を吐きつつ宥めていた。しばらく談笑してい

ると背後から遅れてやって来た純狐が現れた。

「あれ？ 皆さん、私のマフオクシー知らないですか？」

一足先に戻ったはずの純狐のマフオクシーの姿がなかった。しばらく山中を探し回っていたが見つからなかったたので誰よりも遅れて到着した。しかし皆知る者はいなかった。対戦したエースバーンたちもその後は見ていないという。

「どこにいったんだろう。先輩」

純狐たちは勝利したチームであるがパートナーがいないというのは少々問題だ。早急に見つけてくる必要がある。

「だからうどんちゃんにエースバーンちゃん。一緒に探してくれない？」

「ええ？ 私たちですか？」

「いいじゃない。どうせ暇でしょ」

鈴仙チームはこれ以上何も対戦することがないので暇と言えば暇である。鈴仙はそれに何も反論できなかった。実際気がかりではある。隣にいるエースバーンも心配そうな顔をしていた。

「……仕方ないですね。分かりました付き合いますよ」

純狐という不安分子はあるものの行かない理由もなかったたのでその誘いに同意した。鈴仙たちは早速皆から離れて探索に向かった。特に当てはなかったたのでまずはほのお

タイプが好みそうな地獄にでも行こうとしていた。

「待ちなさい！」

「あれ？ あなたは……」

三人を追いかけていたのは動かない大図書館、パチユリーであった。ムウマーヅに担当しながらふよふよと漂っていた。

「なんだか楽しそうな感じじゃない。私も混ぜなさい」

どれだけ暇人なのだろうか。パチユリーも仲間になった。

番外編1 ウツロイド追跡隊 v s レジロック

牛崎潤美と吉弔八千慧は今現在地底に続く大穴を降下しているところであった。その目的はどこかに逃走したウツロイドを見つけ出すためであった。しかしスキマを使ってみても見つからないということなのであまり人の目が行き届きにくいところに絞って搜索していた。その一つが地獄へとつながるこの大穴であった。

「それにしてもこの穴は深いわね」

「地底に行くだけならただ真っ直ぐ降りたらいいだけけど……」

今回は地底に行くことが目的ではなかった。この大穴は一本道ではなく様々に枝分かれしており、その先にウツロイドが潜んでいるのではないかと踏んだのであった。ちなみに地底に行くには気にせず真っ直ぐ進めば到着する。

「あ、左右に分かれてるわね。頼むわね潤美」

「私と言うよりもこの子だけだ。出てきて」

潤美のサファリボールから出てきたのは立派な角を有したあばれうしポケモン、ケンタロスであった。ケンタロスはボールから出てくると真っ先に右の横穴に飛び移った。それを見て二人はケンタロスに追従して右の横穴に入り、そのままケンタロスの背中に

乗った。二人乗りでも平気な顔をしていたケンタロスは真っ直ぐ走り抜けた。

「本当にこっちの道で合ってるの？」

「ああ、任せろ。俺の嗅覚からこっちにいわタイプ独特の匂いがする」

今一つケンタロスに任せていいのかどうか不安に思う八千慧。しかしケンタロスには鋭い嗅覚があり、それで各ポケモンのタイプの匂いをかぎ分けることができる。残念ながら具体的なポケモンの種類は分からないのだが一つの指針となる。幸運なことにウツロイドのタイプは対戦の最中にいわ・どくタイプとみやぶったので目印には十分なりうる。

「それにしてもここにはポケモンがいないわね……」

大穴を下つているときはちらほらとポケモンはいたのだが、どういうわけかこの横穴にはポケモンが今のところ一匹もない。そのおかげで順調に進むことはできているのだが少し不安に思う潤美であった。

一匹もポケモンと出会わずに横穴の突き当りまで到着してしまった。ケンタロスから降りると二人とボールから出てきたバクガメスは周辺を調べた。しかしあるのはただのただっ広い空間であり、それ以上は何もなかった。

「何も無いわね」

「おい、ケンタロス。本当にここで合っているのか？」

「ああ、むしろきつきよりも匂いがキツくなって……」

バクガメスが訝しんでいると地面が大きく揺れた。

「な、何だこれ!？」

地震とは少し違う音が辺り全体に響き渡った。それと同時に四人の正面で地下から何かが盛り上がってきた。

「バクガメス！ 気を付けて」

「ケンタロスも！」

地鳴りに心配するパートナーたち。真つ先にポケモンたちを考えるのは優しさか、それとも自分たちの方が強いという自負からきているのか。おそらく両方だろう。地面から浮上してきたそれは、簡潔に言えば岩の塊だった。体の中央にはいくつかの点のようなものがあり、人型のように手足のようなものが生えていた。

「なんだコイツ!？」

バクガメスも大型の部類であるがそのバクガメスが見上げるほど大きなサイズだった。およそ3.4メートルほどだろうか。所々にあるオレンジの模様が反射して四人の不安な顔を映していた。

「バクガメス！ これってポケモンなの？」

「俺が知るわけないだろ。というかケンタロス！ こいつがもしかしてその匂いの正体か？」

「……ああ。間違いない。こいつから強烈な匂いがするからな」

かぎ分けられるということはこのいわやまみたいなのは見た目通りいわタイプのポケモンということだ。つまりここにウツロイドはいないということだ。

「そうなのね、それじゃあ帰りましょうか」

八千慧が踵を返して帰ろうとした。ウツロイドがいなければここに用はない。面倒事が起きる前に退散しようとしたかった。

「……マテ。キサマラ」

無機質な声帯を持つ者はこの場にはいない。いやいるとしたら……八千慧たちは嫌な予感を感じながら振り向いた。そこにはHの形をした点が妖しく点滅していた。先ほどよりも大きく見えたのは気のせいではない。

「オレノナワバリニカッテニハイッテキテ。カクゴハイインダロウナ」

声の抑揚がないので分かりにくい話している内容からして随分ご立腹のようだが別に縄張りを荒らしに来たつもりはない。対話できるようなのでできれば穏便に済ませたいが……

「すみません。お邪魔する気はなかったんです。すぐ立ち去るので」

「ユルサン。コレデモクラエ」

潤美が深々とお辞儀をして謝意を見せた。しかし目の前のポケモンは話を聞いているのかいないのかその大腕を振り下ろしてきた。ばかぢからの狙いは潤美のようだ。

「危ない！ 潤美！」

八千慧が声をかけたときにはすでに遅く、腕に加速度が乗ってしまった。腕の地点には砂煙が舞い潤美の姿は見えなかった。完全に潰されてしまった……そう皆考えていた。

「ナ、ナニ……？」

「ハア、話聞いてもらいたかったんですけどね」

砂煙から潤美が現れた。その体には傷一つなく、片手で全力の攻撃を受け止めていた。ばかぢからの威力は120であり、並みの相手ならば骨も残らないだろう。潤美は難なくその手を上に押し上げるともう一方の手で相手の懐に飛び込み、その岩壁にひびを入れた。その音は砂煙が舞い落ちる轟音の何倍も大きく、3・4メートルの山が背中から崩れ落ちた。

「あ、あんたそんなに強かったの？」

啞然とした顔で八千慧が潤美を見た。普段は温厚な奴がキレると豹変するという例を目の当たりにしたからである。というか組長の自分よりも強いんじゃないかと思っ

た。

「種族的に……これくらいはね。それに話の通じない相手にはこれが早いから」

牛鬼は友好的な種族ではあるがその怪力は他の妖怪、およびポケモンたちとは一線を画す。対等に渡り合えるのは幻想郷の鬼やレックウザやアルセウスくらいだろう。しかし本人自体が争いを好まないのもその本領を見られる機会はそうそうない。

「大丈夫か？ 俺が戦う予定だったんだが」

「うん、あなたの力はできるだけとっておきたいからね」

ケンタロスが本来相手するはずだったがトレーナーが一発KOしてしまった。ケンタロスの体力は今後ウツロイド探しにとっておきたかった。さつきから全然立ち上がる気配が全くないあのポケモンは目をグルグル回していたが少し聞きたいことがあったので目を覚ますまで待つことにした。

「ウ、ウウーン。ココハ……」

「あ、起きましたか」

「ヒッ！ オ、オマエハ！」

さつきとは打って変わって潤美にビビっている姿がそこにはあつた。だが力量差を測ったのかももう一度暴れる気配はなかった。今度は落ち着いて話し合うことができた。

「そう、それじゃあ他のポケモンはあなたのプレッシャーで近寄らなかつたのね」

このポケモンの名前はレジロックといい、元はホウエン地方で伝説扱いされてきたポケモンらしい。この地下の横穴はレジロックのすみか。他のポケモンが寄らなかつたのもそのプレッシャーを感じ取っていたかららしい。

「ア、アア。ダカラオレハホカノポケモンハミテイナイ」

「そうでしたか。失礼しました」

レジロックにウツロイドのことを話したがそんなクラゲみたいなポケモンは見えないという。本当に無駄骨であった。今度こそ帰ろうとした。

「マテソコノオンナ。オマエニワタスモノガアル」

「私、ですか?」

レジロックが潤美を引き留めた。潤美はそれに従いレジロックの目の前までやってきた。

「コノオレヲヤブツタソノチカラヲタタエテコレヲヤル」

潤美はレジロックから腕時計のようなものを貰った。真ん中に何かをはめる窪みのようなものがあつた。

「オレガツクツタモノダガ……オマエナラツカエルダロウ」

潤美たちはレジロックからこの説明を聞いた。これはZリングというものらしく戦いの内ここぞというときに強力なZわざというものを放つことができるらしい。だがそのためには各タイプに応じたZクリスタルというものが必要らしい。

「いいんですか、貰っちゃて」

「カマワナイ。キョウテキトノタタカイニヤクダツダロウシナ」

「ありがとうございます！」

最初の邂逅が嘘のように打ち解けていた。拳での会話もコミュニケーションのひとつなのだろうか。

「ウツロイドトヤラハシラナイガ……オレノキョウダイナラシツテルカモナ」

「兄弟？ その人はどこに？」

「ソウダナ……タシカチレイデン？ トカイウトコロニイクトイツテイタナ」

地霊殿はこの大穴の真下にあるお屋敷である。今度はそのに行けば何か手がかりがあるかもしれない。

「分かりました。ありがとうございます、レジロックさん」

「……アア。キヲツケロヨ」

櫻花を助けるためこの場で立ち止まるわけにはいかない。何としてもウツロイドを捕まえて治してもらわなければならない。Zわざという未知の力を手に二組は大穴を

グ
ン
グ
ン
下
っ
て
行
っ
た
。

第十六話 博霊神社の決闘

「あらあら私の愛弟子のチーム負けちゃったのね」

「チーム戦だから仕方ないわよ。それに鈴仙自身は勝ったんだから褒めてあげたらいいんじゃない？」

「リーダー力の差が浮き彫りになったんだからまだまだよ。後でお仕置きしないとね」

永琳は鈴仙に治験……もといしつけをするのが大好きな人であった。どんな薬品を用いようか今から楽しみにしていた。ちなみにいつしつけを行ってもいいように傍らにいるベトベトンは体内にその危険な薬品を忍ばせられている。もし暴発しても体内で処理してくれるある意味世界一安心な薬品庫である。

「それで次はどのチームにする？」

「そうね。じゃあもう一人の愛弟子にしようかしら」

永琳のリクエストを受け付けると紫はその二チームを博霊神社まで移動させた。

博霊神社に降り立ったのは地上の兎、因幡であるであった。彼女は現在困惑しておりその原因はチームメイトたちにあった。

「わー！ 私霊夢さんと仲間なんですわ〜！ 嬉しいです」

「私は巫女同士の熱い戦いとかしたかったですけどね！」

「あら？ 私は変なピーマン野郎と決着つけたかったけどね」

「あー、やかましい」

小人族の少名針妙丸、風祝の東風谷早苗、地獄の女神のヘカーティア・ラピスラズリ、そして博霊霊夢というオーバースペック集団に混ざるただの兎、因幡てゐ。どう考えても場違いすぎと考えていた。そしてその考えはてゐの隣に座っていた九十九弁々も同様であった。一応彼女も4ボスで決して弱いわけではないのだが。

こんな無敵の陣営にも思える霊夢サイドだが決して油断はできない。相手もそれ相応に猛者揃いだからだ。参道を境として向こう側に魔法の森チームが控えていた。

「敵ですよ〜」

「お、意外と知ってる顔多いね。弁々とか小人姫とか霊夢とか」

「でもこっちの戦力は低いな。まともにやったら勝てなさそうだね。ならば……」

リリーホワイト、今泉影狼、ナズーリンなどが魔法の森チームのようである。博霊神社チームの層の厚さに驚いているようだがナズーリンは何か頭の中に思い浮かべているようだ。賢将は突破する妙案でも思いついたのだろうか。

「ちよつといいかい？ 妖怪の賢者様」

「何よ、私大忙しなんだけど」

ナズーリンが紫を呼ぶとしぶしぶとスキマから出てきた。面倒事は藍に投げっぱなしにしている癖に随分と忙しそうである。

「今回のバトルなんだが、あまりにも戦力差がありすぎると思うので一つ提案があるのだがいいかい？」

「他の人がOKしたならいいわよ。霊夢はどうかしら？」

「はあ？ 何で私なのよ」

「どうせあなたが大将でしょ？ それにあなたが納得しないと面倒そうだし」

「一々一言多いのよ。まあ別にいいんじゃない？ そっちに有利すぎじゃなければ。皆はいいかしら」

霊夢は皆の様子を見たが異論のある者は特にいないようであった。むしろ違ったルールでやることにわくわくしているようだった。早苗は手持ちの大幣をぶんぶん振り回してやる気十分である。

「先の二戦とは違い、ダブルバトルというものを所望したいのだからいいかい？」

「ダブルバトル？ それって何かしら？」

「それについてはこの子から説明させてもらおう」

ナズーリンがスーパーボールから取り出したのはトゲデマル。でんき・はがねタイプ

のまるまりポケモンでありナズーリンのパートナーである。トゲデマルはいつも宝塔を持つているナズーリンの手に飛び乗った。手にジャストフィットしており落ち着くようである。

「ダブルバトルっていうのはその名前の通り二対二で戦うバトルのことだよ。二対とも倒さないと勝ちにはならないよ。戦い方は自由で、タイマンで戦うのもいいしどちらか一方を集中砲火してもタッグを組むのもあり。戦術が大事になるバトルだね」

「へへ 面白そうじゃない。それで誰が戦うの?」

「わたし! わたし! 東風谷早苗が出たいです! ねえ、霊夢さんも一緒に出ましようよ!」

「えー、面倒臭いわよ。特にアンタが」

「えく、冷たいですね。巫女同士の共闘ですよ! 燃えるじゃないですか」

早苗と一緒に戦おうと霊夢の腕を引っ張る。しかし早苗と組むと厄介なことにはかならないと分かっていたので拒否していた。周りのメンツも早苗の性格的に共闘はしたくなさそうだ。どれだけ人望ないんだと思っていると片一方の腕もいつの間にか誰かに引かれていた。

「お願いします! マスター友達いないんですから仲良くしてくださいよ」

「ん? 誰よアンタ」

霊夢の視線の先には早苗と同じ位の緑髪が立っており早苗同様に霊夢を共闘、というか友達にしようとしていた。

「何言っているんですかサーナイト。私にも友達くらいいます！ ……多分。それに霊夢さんは友達ではなくライバルですよ！」

早苗のパートナーはサーナイトだった。ポケモン界の中でもかわいい部類に含まれており気になった人をマスターと認めるポケモンである。早苗のこのはっちゃけ具合に興味を持ったので自らパートナーになったのである。だがサーナイトの早苗に対するムーブは保護者そのものであり、マスターと呼んではいるが早苗のことは妹のように思っているかもしれない。

「すみません、霊夢さん。どうかマスターと一緒に戦ってくれませんか？」

「あの子のパートナー？ ずいぶんしっかりしてそうじゃない」

「恐縮です」

「……まあいいわ。ここで承諾しないとますます面倒になりそうだしね」

「本当ですか!!? ありがとうございます〜！」

思っていたよりも礼儀正しいポケモンであったので霊夢は承諾した。実際に戦うのは早苗ではなくこのサーナイトであり的確な指示だけ出せばいいので実際それほど問題は無い。

「で、そつちは誰が相手になるの?」

「ふふ……こつちはもう決まってるよ。さ、二人ともよろしく」

ナズーリンとトゲデマルが指を差したその先には一人と一匹がいた。しかもどちらも霊夢に深く縁のある人物であった。

「霊夢と早苗? これまた厄介な相手ね」

「霊夢さん〜! 普段は私が守護る立場ですが今回ばかりは胸を借りるつもりでいきま
すよ」

霊夢の旧友である七色の魔法使いアリス・マーガトロイド、この魔法の森チームのリーダーである。そしてもう一匹、博霊神社の狛犬の高麗野あうんである。奇しくも霊夢の性格を把握しているメンツであり、一筋縄ではいかなそうだと霊夢は考えた。

「じゃあ早速バトル始めましょうか。出ておいでゴチルゼル」

アリスのゴージャスボールから出てきたのはてんたいポケモンゴチルゼル。漆黒の体に鋭い目、それに加えて強力なサイコパワーが特長のポケモンである。アリスがいつも通り魔法の研究をしているとどこからともなく現れて懐いたポケモンである。アリスと出会ったことでそのパワーに磨きがかかったようで相手が幻想郷の中心人物であろうと堂々としていた。

「ルガルガン〜 お願いします!」

「おう、任せろ」

あうんのパートナー、ルガルガンも一週間経って見違えるほど凛々しくなっていた。あうんとともに特訓を積んだのだろう。簡単には倒せそうにはないのだろう。

「サーナイト、ここでもアンタと相対するとはね」

「あら、私はマスターとともに強くなつたんですよ？ 今日こそ勝ち越してみせますよ」

「サーナイト、アリスさんのパートナーと知り合いですか？」

「はい。彼女は私の友達兼ライバルって感じですね。エスパーの力をいつも競っているんですよ。残念ながら今のところ負け越しているんですけどね」

普段彼女たちは様々なジャンルでエスパー対決をしている。念力でどれだけの重い物を浮遊させ続けられるかだったり単純に技をぶつけ合ったりと多岐に渡っている。決して仲が悪くはないのだが勝負ごとになると話が別になる。温和なサーナイトだがその瞳は静かに燃えていた。

「あ、ついでにアンタも出なさい」

霊夢は自分のボールからアンノーンを出した。アンノーンはその巨大な目をさらに大きく見開いた。相手が遥かに格上だからであり、それはゴチルゼルも同様だった。相手が遥かに格下だったからである。

「え、霊夢？ あなたのパートナーってあのアンノーンなの？」

ゴチルゼルが霊夢に問いかける。それもあのとう部分強調して。霊夢はただただ普通に頷いたがそんなに弱いのかと改めて認識した。

「じゃあ全員ポケモンを出したことだし……ダブルバトルスタート！」

紫の合図でほぼエスパータイプのダブルバトルが始まった。

第十七話 エスパー対決

「まずは私から行きますよ！ アクセルロックです」

素早さの高いルガルガンが先制攻撃を仕掛けた。目にも止まらぬスピードで狙うはサーナイトである。それほど速くないサーナイトは防御姿勢に入る前にモロに喰らってしまった。

「キヤア！」

「大丈夫ですか!？」

「平気です。それより指示を！」

「はい！ ムーンフォースをゴチルゼルにお願いします！」

素早く境内を駆けまわるルガルガンに攻撃しても命中させられる自信はなかった。それならばやり返すのではなく当てられる可能性のあるゴチルゼルを狙った方がよい。そう考えた早苗はアリス側を攻撃した。ピンク色の球体が天から舞い降り、勢いよく発射された。しかしゴチルゼルは眉一つ動かすことなくその攻撃を逸らした。ムーンフォースが空中で急転回したことからサイコキネシスで弾いたのである。

「サブウエポンのフェアリー技もまだまだだね。このままじゃ私にかすり傷一つ付けられ

ないわよ」

「くっ、そうですね……」

ゴチルゼルの言葉は挑発ではなく事実であった。今までの二匹の勝負は大抵拮抗しているのだが戦闘においてはただの一度もゴチルゼルは負けたことがなかった。サーナイトが弱いわけではなくゴチルゼルのバトルセンスが光るだけである。

「……霊夢さん、ちよつといいですか？」

「ん？ 何よ」

「アリスさんとの戦いに集中させてくれませんか？ あうんさんは頼みます」

「うん？ それじゃシングルバトルと変わらないわよ」

「戦い方は自由ですよ。私はこの子に戦わせたいんです」

何か勝機があるわけではない。だがこの窮地をいかに克服するのかに挑むサーナイトを支えてあげたかったのである。サーナイトはゴチルゼルをじっと見つめ戦意を露わにしていた。

「アンタ……少し変わったわね」

「そうですか？ 私はいつも通りですよ！」

「……分かったわ。でももし負けたら私がアリスのポケモン倒すからね」

そう言うのと霊夢はあうんを手招きしてアリスたちと距離をとった。タイムンバトル

の邪魔をしないためだろう。

「……霊夢と一緒にやなくていいの？ 早苗」

「はい。私は勝敗云々よりもサーナイトの気持ちを優先させたいと思いますから」

「そう……意外ね」

霊夢と似た反応のアリス。心境の変化というものは自分では気づかないものらしい。今まで誰かの情熱に寄り添ったことがあまりなかったからかと思つた。

「それで？ 私のゴチルゼルに本気で勝てると思つていいのかしら？」

「もちろんです！ 早苗さんの力もありますからそう簡単には……」

「10まんボルト」

アリスによつて放たれたゴチルゼルの10まんボルト。早苗とサーナイトの間を掠り手水を見事に破壊した。当てる気がなかったとはいえ二人は戦慄した。一発でも当たったら即終わりレベルの破壊力だ。火力では完全に劣つていることをまじまじと見せつけられた。ちなみに霊夢は離れたところで怒つていた。

「早苗、教えといてあげる。パートナーとポケモンのタイプが一致してないと威力は下がるのよ」

ノーマル・みずタイプ of 早苗とエスパー・フェアリーのサーナイトは一致するのが一つもない。対戦には最悪の組み合わせである。一方、アリスとゴチルゼルはどちらもエ

スパ―単タイプ。加えて似たような思考をしているので相性もバツチリ。いくら早苗たちが特訓したといっても壁は異様に高いものとなっている。

「ええ、知っていますよ。タイプが一致するペアがたくさん来ることも。だから私たちは一生懸命鍛えました。マスターとともに」

「奇跡を起こす程度の能力、その力をもってすれば勝つことも容易いものですよ!」

サーナイトは再び構えて全霊を込めたサイコネシスであるものを引き寄せた。それが動いてこちらに向かってくる地鳴りが遠くで聞こえた。

「ちよつと、何アレ?」

アリスが指差した方向からは全長一メートル重さ2トンの物体が飛んできた。全身金属で覆われたそれは早苗にとっては馴染深いものであった。なにしろ外から来た人間にとってマシーンはロマンそのものだからだ。

「ふふふ、あなたたちにこのヒソウテンソクを防げますか!」

どこに放置されていたか分からない巨大なヒソウテンソクが飛んできた。こんなものを攻撃に使おうなんて普通は思わないがそこは早苗。常識に囚われないのが彼女の取り柄である。これにはさすがのアリスも驚いていた。

「ゴチルゼル、できる?」

「飛んできた方向からして……ええ。できるわ」

ゴチルゼルは両手を体の前に突き出して体中にサイコパワーを凝集させた。集めてきて体の外にも紫色のオーラが溢れていた。

「はあっ！ うっ、ぐぐっ……」

頭から突っ込んでくるヒソウテンソクを受け止めた。いや正確にはぶつかる寸前でサイコキネシスでキャッチした。しかし重さ2トン、そう簡単に弾き返せない。引つ張ってくるよりも弾く方がよりパワーを使うのである。今までの最高重量はせいぜい1.5トン。さすがのゴチルゼルも脂汗をかいており少々押されていた。

「このままじゃ……あ、ゴチルゼル！ 集中してひかりのかべよ！」

特殊攻撃を半減させるひかりのかべを覚えていたので、すぐさま張れる分のひかりのかべを張った。表面積の小さい頭部から突っ込んできたのが幸いして何とか勢いを多少殺すことができた。どう考えても物理攻撃に見えるがサイコキネシスが由来なので特殊攻撃らしい。

「よし！ あとは元の場所に戻すだけよ」

「ふう……はあああっ！」

最大出力のサイコキネシスがヒソウテンソクを捕らえ、巻き戻したかのようにヒソウテンソクは元の森の中に帰っていった。着地点でほとんど砂煙が上がらなかったことから上手に着陸させられたのだろう。

「破壊させたらもつと楽だったんだけどね。霊夢が許さないだろうし」

「どつちにしろ私のサイコネシスでは勝てなかったというわけですか」

サーナイトががっくりと肩を落とした。いい勝負をしていたと思っていたのはこちらだけであったらしい。勝手に期待して勝手に落胆してしまったが表情は隠せなかった。

「どう？ まだやるかしら」

「もうそんな力残ってないですよ」

さっきの攻撃で全力を使い果たした。抗う術などもう残っていない。ゆっくりと近付いてくるサーナイトは立ち上がろうともしない、というよりも立ち上がらせてくれない。足元にくろいまなぎしが設置されてサーナイトを逃がそうとしないからだ。詰めの甘くないゴチルゼルはとどめまでしっかりしている。

「今回も私の勝ちだったねサーナイト。この後の霊夢たちもパパッと倒すとするわ」

「ええ。エスパー対決は私たちの負けですね。エスパー対決は」

「何？」

「サーナイト！ 伏せて下さい！」

早苗の一声でサーナイトは勢いよく地面に伏せた。相手のくろいまなぎしのおかげで重力が増しており背後から衝突してくるそれを紙一重でかわすことができた。サー

ナイトは。

「きゃあー!」

飛んできたのは霊夢の攻撃による流れ弾……ではなくオレンジ色をした物体。すなわちルガルガンであった。ゴチルゼルとともに遙か後方にまで吹き飛ばされた。砂煙が辺りを覆い何も見えなくなった。

「な、何が起きたの!？」

アリスが砂煙の中をかき分けて二匹を探し出した。だが見つけ出した二匹は爆風の中から立ち上がることもなく戦闘不能になっていた。ゴチルゼルも随分体力を消費していたため耐えきることができなかった。

「ゴチルゼル、ルガルガンともに戦闘不能。よって博霊神社チームの勝利である!」

藍の掛け声により勝者は霊夢と早苗たちになった。エスパ―対決には勝ったがダブルバトルには敗北してしまった。サーナイトが言っていたのはこういうことであった。

「さすが幻想郷の守護者、霊夢さんですね」

早苗は凜と立つ霊夢を羨望の眼差しで見つめていた。

第十八話 最弱のポケモンと最強のトレーナー

サーナイトとゴチルゼルがエスパー対決をしている最中、こちら側は目をくるくるさせている者と目を三角にしている者がいた。

「相手の速さに追いつけない……どうしましょう、霊夢さん」

「折角の手水ぶっ壊して……後で覚えてなさいよねアリス」

お互いが別々のことを考えていた。アンノーンは目の前のルガルガンの目にも止まらぬスピードに。霊夢は遠くの早苗たちの戦いで破壊しつくされた手水についてであった。自分との闘いに集中されていないあうんたちにとってはショックであった。

「霊夢さん！ よそ見していいんですか!? このままじゃアンノーンの体力持ちませんよ」

アクセルロックで高速移動しながらアンノーンに攻撃を掠り続けているルガルガン。元々の低耐久もあつてあと数発もすればダウンしてしまいそうな勢いであった。

「ああ、残念だったなアンノーン。折角幻想郷の中心人物に拾われたついでなのに俺なんかになんか負けちゃまって。まあ俺とあうんのコンビネーションだから無理もないがな」

「ルガルガン油断してはいけませんよ！ 霊夢さんのことですから何か策があります」

自分を下げているのか上げていいのか分からない発言である。だが実際持ち前のスピード力を特化させようと言ったのはあうんである。それは主たる霊夢対策としてであり霊夢の性格上、機敏に動くなんてことはしないしさせないと思ったからである。コツコツダメージを与えるのではなく一点突破で撃破するのが彼女のスタイルであることはあうんがよく知っていた。いつも見てきたからこそこのまま終わるはずがないと考えていた。

「あー、そうね。アンノーン、そろそろアレやる?」

やはり何かある、とあうんは考えて一旦距離を取るようにルガルガンに指示した。

「いいえ。まだです。霊夢さんに頼り切りでは一介のポケモンにはなれませんから!」

「……ふう、強情ね。誰に似たんだけか。じゃあ一発相手に当てたらにしましょう。その後はちやんと言うこと聞くのよ!」

「分かりました」

何の話かあうんたちにはさっぱり分からなかったが、要するに一発攻撃を喰らったその後霊夢の力が加わってくるということだ。ならばその付加が来る前に倒せばいいだけのこと。確実に次の一撃で沈めるために全牙に力を集める。

「準備できましたか? 行きますよ、かみつく!」

エスパークタイプに効果抜群のあくタイプの技を喰らえば確実に仕留められる。いま

のかみつくは通常のかみくだくの倍以上の威力になっているだろう。鋭い牙がアンノーンを襲う。



「え？ アンタ技一個しか使えないの？」

「は、はい。残念ながら」

アンノーンと特訓を始めた初日に告げられた事実。アンノーン一族はその膨大な知識を蓄えられる代わりに使える技が一つだけという呪いに掛けられている。めざめるパワーだけというタイプも威力も固定されている技であり実戦には不向きなポケモンである。最弱と言われる所以はこのレパートリーの少なさと攻撃力の低さである。

「ふーん、ちよつとその技見せて」

アンノーンはみずのめざめるパワーを空中に向かって放った。青色の球体がひよろひよろと打ち出されてポンツ！ と消滅した。確かにこれでは相手を吹き飛ばす程の威力は期待できそうにない。

「……僕の実力はこんなものです。霊夢さんに選んでいただいて光栄ですが勝てる見込

みはないかと思えます。今からでも変更……」

「はあ？ 私の誘いを断るの？ そうはさせないわよ。みっちり鍛えて優勝させてあげるから覚悟しなさい」

元々バトルというものから縁遠い生涯を送ってきたアンノーン。バトルセンスがからつきしなので戦ったことが少ない上に今まで勝利を収めたことがない。そんな自分が優勝なんて夢のまた夢であった。だが負けっぱなしでいいとはこれっぽっちも思っていないかった。霊夢と一緒にならばその高みまで見ることができるかもしれない。ここで諦めてはいけないということを霊夢が教えてくれたのかもしれない。

「いえー！ 何でもないです！ よろしくお願いします」

「よし、いい返事ね。ところでやってみたかったことがあるんだけど……」



(……ダメだ！)

霊夢から教わった奥の手の方法。それを使えば一瞬でカタはつくだろう。しかしこのバトルは、自分自身が成長するための大切な一歩である。安易に頼らず確実に一太刀

浴びせなければならぬ。

(集中しろ……)

ルガルガンはジグザクとこちらに向かって突進してくる。あの速さで噛みつかれたら終わりである。だが相手が周期的にジグザクしていることは当事者は気づいていないだろう。一往復する時間と自分の所までの距離を考えると……

「……今だ!」

アンノーンはその場でジャンプした。アンノーンの真下をルガルガンがすり抜けて威力160のかみつくは不発に終わった。

「何っ! ……ふぐっ!」

ジャンプしたアンノーンに首を向けていたせいでルガルガンは正面にあった何かにぶつかつた。それはまるでトランポリンのように深く沈みこんだ後、大きく弾き返した。

「がはっ! ……これは……みずタイプの技か!」

真正面からぶつかりあつたとしても勝ち目がなかったので罨で対抗した。今の一瞬でめざめるパワーを蜘蛛の巣状に張り巡らせて突っ込んできたところをカウンター攻撃する。これが今できるアンノーンなりの戦いであつた。

「チャンスよアンノーン! ……めざめるパワー」

霊夢の指示で吹き飛んでいるルガルガンに追い打ちを仕掛けた。以前より威力も弾道も強化されており真つ直ぐルガルガンを目指す。攻撃のチャンスは逃さない霊夢である。

「ルガルガン！ 来てますよ。かみなりのキバー！」

だが相手は一人ではない。あうんのコンピネーションはバツチリでみずタイプのためざめるパワーなどいとも簡単に嘔み碎いてしまった。

「霊夢さん。私たちは霊夢さんを仮想相手として練習してきました。いつか憧れの霊夢さんと一緒に戦いたいと思っていました。さあ、奥の手とやらを見せて下さい。私たちは逃げも隠れもしません！」

狛犬あうんは霊夢に心酔しており正々堂々としたところが好きである。勝とうが負けようが攻撃を受けて見たかったのである。様々な霊夢の一面を見たいのである。

「対戦相手にそんなこと言われたら仕方ないわね。さ、アンノーン。こつちへいらっしやい」

言いつけ通り霊夢の元に戻ると霊夢の右手にピトツとくつついた。霊夢の右手が青く発光し始めた。

「ええ？」

「じゃあね」

さっきまで遠くにいたはずの霊夢が何故かルガルガンの目の前に、というよりも拳がルガルガンの目の前に来ていた。そこから放たれた巨大な渦のようなものがルガルガンを貫いた。みずタイプの技なのでいわタイプには効果抜群であった。すでに体力の削れたルガルガンをKOさせるには十分だった。そして破壊力が強すぎて吹き飛んだルガルガンはゴチルゼルに衝突してしまい一石二鳥となった。

「ルガルガンー！」

あうんの声もむなししく勝敗は喫してしまった。霊夢の様子を見たアリスは驚嘆して霊夢の方に近づいてきた。

「ちよつと霊夢！　なんであなたが攻撃しているのよ！　こんなのルール違反よ。ねえ紫、いるんでしょ」

アリスが紫を呼ぶとしぶしぶとスキマの中から出てきた。欠伸をして眠そうな顔をしている。

「はいはい。クレーム来ると思ったわ。霊夢たちから申告あったのよね　あまりにも弱すぎるから合体を許可してくれてね」

「そんなワガママいいの？　そもそもパートナーがポケモンを攻撃しちやダメなんじゃ……」

「私は攻撃してないわ。私にくつついたアンノーンが攻撃したのよ」

「屁理屈じゃないの。それにあの暴力巫女よ？ 滅茶苦茶になるのは見えるでしょ」

旧友だからこそズカズカと言えるアリス。だが正論であるので臆してはいない。

「そうね。だから後霊夢が出られるのは一回だけという制限を付けるわ。これでいいでしょ。」

「はあ……まあ私たちは負けたから別にいいけど。他のチームは知らないわよ」

ため息とともに諦めたアリス。元々理不尽巫女相手に正論がまかり通るはずもなかった。倒れているゴチルゼルをボールに戻して永遠亭へと向かった。

「ルガルガン、大丈夫ですか？」

「ああ、大丈夫だ……おい、アンノーン」

「な、何ですか？」

「色々悪かったな。失礼なこと言って」

「い、いえ！ 僕が弱いのは事実ですし」

「だが……お前の気概、見せてもらった。そのパートナーをしっかりと支えてやれ」

「……はい!!」

対戦相手だからこそ感じたアンノーンの本気。最弱のポケモンが心まで最弱とは限らなかった。

第十九話 むしタイプ統一パーティ

「流石私の霊夢ねー。戦い向きじゃないポケモンをあんなに鮮やかに活かすなんてね」

「まあ霊夢ならそれくらいしそうだしね。それで次はどのチームか決めているの?」

永遠亭でバトルの様子をモニターしていた賢者たちは次の患者たちが来るまでゆくりと寛いでいた。回復はすぐに終わるしバトルの時間は長いので暇な時間は結構できる。

「そろそろあのお嬢様の限界が来てそうだからそこするわ。場所は……紅魔館でいいかしら」

「あら、初めての屋内ね。確実に木端微塵になるだろうけど大丈夫なの? 流石に建築は私の専門外よ」

「うふふ。その道のスペシャリストを用意したからね。抜かりはないわよ」
「どうせ強制的にスキマで連行するんでしょ」

あらかじめそんなことを画策するはずがない。無理矢理その場所にスキマで送って後から伝える腹積もりだろう。これが妖怪の賢者である。選ばれたその二チームは紅魔館へと飛ばされた。

「あー、次私たちか。あれ？　ここって……」

「ついに来たわ！　しかも私のホームグラウンド。やっと戦えるのね！」

ここで戦うは永遠に紅い幼き月、レミリア・スカーレットである。紅霧異変を起こした張本人であり実力は折り紙つきである。ポケモンバトルの腕前は未知数だがそのカリスマ性で注目を集めている。

「相手……強そうだね」

「あれ？　向こう人数多くない？」

「ちよつと！　なんでそんなにいるの！　おかしくない？」

「いえ……というよりなぜそちらは四人だけなのですか？　お嬢様」

「そんなのこつちが聞きたいくらいよ。紫どういうこと？」

レミリアがリーダーとなっているこちらのチームは何故か四人だけである。レミリア・スカーレット、リグル・ナイトバグ、黒谷ヤマメ、そしてエタニティ・ラルバとなっている。他のチームは最低でも五人はいたのにここだけイレギュラーである。そして一番気に入らないのが当主であるにも関わらず紅魔館チームではなく迷いの竹林チームとなっていることである。リグルが近くに住んでいるからだろうか？　そして紅魔館チームに門番の美鈴がいる。本来の立場を奪われたようでもう憤慨していた。開きかけ

のスキマに手を伸ばして引きずり出した。しかし出てきたのは紫ではなくレミリアのよく知る顔であった。

「あれ？ 咲夜じゃないの。どうしたの、こんなところで」

「スキマ妖怪から色々言伝を頼まれました。今回は私が代わりに審判を務めさせていただきます」

「あいつらはどうしたのかしら？」

「少し用事があるのかなんとか。全く、勝手ですね。ですがお嬢様のこととあらばいいかなるときでも手助けさせていただきます」

瀟洒な従者、十六夜咲夜は引きずり出されたときの衣服の乱れを正すと凜とその場に立ち流暢に話しました。有能な人が一人いるだけで話はスムーズに進む。

「紫からの伝言です。『あえてレミリアには紅魔館のメンバーと離れたわ。だってむしタイプで統一した方が面白いじゃない！』とのことです」

この四人の共通点はむしタイプであるということである。ラルバはむし・フェアリー、キスメはむし・どく、リグルはむし単タイプ。そしてレミリアはむし・あくタイプである。百人以上参加しているこの祭りだがむしタイプはこの四人しかいない。人数の制限がある上にタイプの偏りがあるため不利だと言える。それに数あるタイプの中で最弱と言われるむしタイプ。吸血鬼だからそう分類されたいがレミリアはど

うにも不服そうだ。

「この高貴なる私が虫ケラ扱いとは感心しないわ！」

お嬢様は高貴な身分であり他の者のことをあまり考えない。彼女のその発言がチームメイトを軽く傷つけたことに気付きすらしていない。気の強くない三人はどんよりとした顔をしている。

「じゃあフランは？ フランはどうなの？」

「妹様はあく・ほのおタイプで別のチームです」

「姉妹なのにおかしくない？ 私も炎くらい使えるわよ、ほらー！」

紅符『不夜城レッド』を体に纏わせアピールするレミリア。力んでしまったのか館の時計塔まで弾幕を伸ばし破壊してしまった。崩れ落ちた長針が二チームの丁度境目に降ってきて両チームに緊張感が走った。

「あつ、ついやってしま……」

「大丈夫ですお嬢様。先ほど直しておきましたので」

時計塔の方向を見ると碎けていたはずの建物がもの見事に修繕されており長針も正確に時を刻んでいた。咲夜の時間を操る程度の能力、これで壊れた物体も自由自在に復元することができたのである。彼女さえいれば屋内でどれだけ暴れようとも支障はないということだ。もちろん咲夜への負担は大きいだろうが。

「流石咲夜。それでこそ私の従者ね」

「お褒めにあずかり光栄です。もちろんこの子にも手伝って頂きましたが」

咲夜は持つていたタイマーボールを手のひらに乗せてレミリアに見せた。簡単に手の内を明かさないとこころも抜け目がない。だが咲夜の技術に付いていけるポケモンということでレミリアと美鈴は決して軽んじることはなかった。

「お嬢様、そろそろ始めませんか？ 対戦相手を決めたいのですが……」

「あら美鈴。そつちのリーダーはあなたなのね。てつきり後ろの妖精がやりたいって言おうと思っていたわ」

レミリアが指差した美鈴の後ろには清蘭と磨弓に頭を撫でられている地獄の妖精がいた。

「そうだよー！ アタイがやりたかったのにさー」

「仕方ないじゃない。チームが紅魔館、なんだからさ」

「ここは美鈴さんにお任せしましょう。それにリーダーが一番やることで多くて大変なんですよ。一番強いから就いているわけではないんですよ」

「そうなの？ じゃあアタイが一番強い？」

「ええ、おそらく」

クラウンピースは磨弓の説得に素直に応じてリーダーの役割を美鈴に譲った。保護

者のヘカーティアがいなくてどうなることかと思つたが上手にあしらつてくれた。磨弓も桂姫に仕えておりどうすれば上手く動いてくれるかを心得ている。従者力は咲夜と同等かと紅魔館チーム最後のメンバー、秋穂子は遠巻きに思っていた。

「じゃあ最初はアタイが行くよ！ イッツーツ！ バトルナティックタイム！」

クラピの謎の掛け声とともにドリームボールから出てきたのは最強のドラゴン、ボーマンダ。咆哮が館中に轟き暗雲が立ち込めた。その鈍色が敵チームを絶望のどん底に着き落とした。

「何よそのドラゴン！ 反則じゃない！」

「ふっふーん！ 反則なんかじゃないもん。ちゃんとアタイが一から特訓したもんねー」

「ああ、お陰でタツベイから一気にボーマンダまで進化することができた。クラピには感謝しかねえぜ」

パートナーになつてから試合が始まるまでの期間はたったの一週間。ほとんどの人はポケモンの進化というものを目撃できてはいない。それもそのはず、本来進化というものはそのなにホイホイできるものではない。度重なる特訓によつてようやくできるものであるからだ。しかもしっかりパートナーの言うことを聞いている。勝つという望みは薄かった。

「さあさあ！ このボーマンダの相手になる子はいるのか!？」

クラピもマンダも同じ挑発のポーズをとっていた。傲慢は良くないがつついしてしまふ程の屈強っぷりである。これは間違いなくこのチームの中で一番強いだろう。ほとんどの者が萎縮してしまっている。このままでは勝負にならないかもしれない。

「……私が相手になるわ」

「レミリアね！ 私たちを楽しませてちょうだい！」

「ええいいわ。その代わりに、咲夜？」

「はい、いかがなさいましたか？」

「この三試合、全てここでやることにするわ」

「承知しました」

本来は館の中で三試合同時に行う予定であったが急遽変更した。一試合ずつここ、広大な庭でバトルの開催である。ルール変更の許可については咲夜に一任されており、その咲夜もレミリアの味方なので意見が通らない訳がなかった。変更の内容がそれほど不公平でなかったため許可をしたのはもちろんである。

「ねえ、レミリアちゃん。本当に大丈夫なの？」

「相手強そうだし本当に勝てるかな……」

「不戦敗って手もあるけど」

他のメンバーが不安そうな顔をしている。確かにリグルの言うとおり今からでもメンパーチェンジしてクラブに弱い相手を当てて不戦敗ということにすれば、強者であるレミリアを残すことができ、勝率も上がる。だがレミリアにはそんな考えは微塵も無かった。

「ふっ、安心しなさい皆。このカリスマ溢れる私たちにかかれば楽勝よー」

ハイパーボールを高く放り投げて現れたるは巨大な翼を持つ紫色の蝙蝠だった。ボールから出てくると同時にレミリアはその背中に飛び乗った。

「さあ、クラウンピース、ポーマンダー！ このレミリア・スカーレットと相棒クロバットが相手になってあげるわ！」

第二十話 v s ボーマンダ

本来バトルの流れるにはリーダーが先鋒を務めてはならない。試合の向きを変える中堅か、逆転勝利を収める大将戦に赴くべきなのである。紅魔館チームは鉄砲玉のクラピが先発向きであるが迷いの森チームはそうではない。

「それでは試合を始めさせて頂きます。両者準備はよろしいですか？」

「いつでもオーケーだよ！」

「こちらも構わないわ」

クラピもボーマンダの背中に乗っている。どちらも初っぱなから空中戦を望むつもりである。

「それでは……試合開始！」

「ボーマンダ！ かえんほうしゃよ！」

「クロバット、避けて！」

クラピの先制攻撃は身軽なクロバットには掠りもしなかった。ボーマンダよりもパワーでは劣る代わりにスピードは遥かに速い。外されたかえんほうしゃは外壁に当たり焼きレンガとなってしまっている……と、思った瞬間何もなかったかのように元通り

に復元されていた。

「流石咲夜さん。以前よりもレベルアップしてる」

かつて対峙したことがあるリグルは咲夜のそのさりげない挙動に感嘆していた。レミアアのサポートをすることに特化しているのでもしも咲夜とレミアアが同じチームだったらとてつもない脅威になっていただろう。そんなことをレンガを見ながら考えていた。

「今度はこつちよ。アクロバット！」

クロバットの素早い攻撃が見事にクリーンヒットした。その後も続けて何度もダメージを与えていき、確実に体力は削っている。削ってはいるが……

「そんなチマチマしたのじゃフォーエバー終わらないわ！ パワーというものを見せてあげる。マンダは二手りゆうまいよ！」

ヘカーティアかどこから聞いたのか知らないが変な言い回しでりゆうのまいを指示した。立ち込めていた暗雲がポーマンダの体を包み込み元々鋭い目つきがさらに陰しくなった。舞うことで攻撃力と素早さが上昇し最強に相応しいほどのパワーを蓄えたことはレミアアも気付いていた。

「まずいわね……クロバット、いけそう？」

「半減技でも一発喰らったら終わりだろうな。とりあえずレミアア、危ないから降りて

くれ」

ここからは洒落で済まない攻撃が飛んでくると予想された。パートナーに傷を付けたくないクロバットは自分の背中から降りるよう促した。クロバットと似たような翼を広げてレミリアは浮遊していた。クラピは不公平だと思ったのかボーマンダから同様に降りた。ガチンコで戦わせてやりたいということだろうか。

「ボーマンダ、後はあなたに任せるわ！ フリーにやっちゃって！」
「任せろ。一撃で沈めてやるからよ」

巨大な牙を剥きいかくをするボーマンダ。ここまで通常通り振る舞っていたように見えたクロバット。だが恐怖していないわけがなかった。相手は最強のドラゴン、ボーマンダ。レミリアという盾があったからこそここまで気持ちを保ってやってこれた。だが今は背中に彼女はいない。

(……落ち着け、気持ちを静めろ)

動悸が止まらない。顔には出ないが体は正直だ。ついさつきまで動いていたはずの翼が鈍く感じる。レミリアという存在一つでここまで変わるのかとクロバットは思った。

「はあああああ!!」

ボーマンダの体周辺から空気が渦巻き大気が震える。拡がっていた暗雲がはじけ飛

び快晴が見えた。しかしうららかな天気似つかわしくない怪物が獲物を狙っていた。力を溜めに溜め一撃で決めるつもりである。

「終わらせてやる！ ドラゴンダイブ！」

空高く急上昇して太陽と影が重なる。黒い脅威が猛スピードで突っ込んできた。

（う、動け！）

しかし体が完全に竦んでしまっている。自分は一体何をしていたんだ。巨大なカリスマの陰に隠れて強くなった気になっていた。本当は素早さしか取り柄がないのに……



「あら、あなた速いのね」

クロバットが初めてレミリアに出会ったのは実は祭りの二日前という直近であった。レミリアはパートナーポケモンに対して自分が役不足と感じておりクロバットはそもそも興味がなかった。出会うのが遅れたのはそのせいだった。

「うん？ まあそうだが……お前は誰だ？」

「私はレミリア・スカーレット。カリスマの権化と呼ばれているわ」

「自分で言うか、それ」

両手を体の中心に向けてポーズを決めている目の前の少女。彼女に対しての第一印象は変な人であった。だがそのおかげで今までにスカウトに来た他の者よりインパクトは強かった。

「で、俺に何の用だ？ 悪いがバトルなんざ興味はない。じゃあな」

翼を翻しその場を立ち去るクロバット。人里から遠く離れた無縁塚まで高速で逃げだした。撒いたと判断した後に翼を畳み休憩していると背後から声が聞こえた。

「よし、気に入ったわ。あなた私と一緒に来なさい」

「何!?! いつの間に」

最速で逃げ切ったつもりだったがいつの間にか背後に立たれていた。すぐさま別の場所にも移動しても移動してもまた付いてきた。永遠に逃げ切れないと悟りついにクロバットはその羽を止めた。

「はあ……しつこいなお前。俺は参加しないって言うてんだろ。どうして俺なんかに付きまとうんだ？」

「あなたに興味があるからよ。明後日にバトルがあるんだけど私に合うポケモンがいなくてね。折角の祭りに不参加なんてつまらないじゃない？」

「そんなのお前の都合じゃねえか。俺には関係ない。それに俺は……」

「探しているポケモンがいる……でしょ？」

今まさに言おうとしていたことを言われて面喰らった顔をした。顔しかないが。レミアはしたり顔をしてニヤニヤしていた。何も知らないクロバットは心を読む妖怪かと思っただ。

「ちなみに人の心を覗き見る悪趣味妖怪とは違うわ。あなたの運命を少し見ただけよ」

「運命？　なんだそれ」

これまで微塵の興味もなかったレミアに少しだけ興味が出てきた。

「私は運命を操る程度の能力で特定の相手の未来を少しだけ見ることができるようになったよ。いつのことなのか分からないから使い勝手は悪いけどね」

「……なるほどな。確かに俺はあるポケモンに追われて偶々来てしまったんだ」

クロバットはこの世界に不本意に連れてこられた。基本的にポケモンは一匹一匹ずつ藍が交渉してこの世界に来てもらう。ジャランガに交渉してハイパーボールで捕まえようとした瞬間、何者かに追われたクロバットがボールのスイッチを押してしまった。そしてそのまま来たので戦いと言うものに嫌気がさしていた。ちなみになぜ襲われていたのかは当の本人にも不明だそうである。形がポケモンだったことくらいしか分からず急に襲われたらしい。

「クロバット!! しっかりしなさい! きゆうけつよ!」

よく聞こえるその耳にレミアアの声が響いた。ドラゴンダイブの轟音の中でもはつきりとその声が聞こえたのは何度も何度も聞いてきたからだろう。

(そうだ、俺は何を考えていたんだ。俺は俺の目的がある。そして俺のパートナーはレミアアなんだ!)

謎のポケモンにもレミアアにも素早さで敵わなかったという事実がクロバットを今まで苦しめていた。しかしそれも過去の話。鍛えに鍛えたということは嘘ではないし、そもそもそんなことは些末なことだった。今はただレミアアと共に高みを目指したい。その思いがピークにきたとき、いつの間にかクロバットの目はキリツと開いていた。

「負けるかあ!」

真正面から立ち向かい逃げはしなかった。ボーマンダに負けない牙、それにレミアアのパワーも乗った虫タイプ技きゆうけつがドラゴンダイブと衝突した。爆風が紅魔館の城壁を全て破壊し尽くした。昼夜の顔が少し渋ったが何とかしてくるだろう。それよりも土煙でしばらくの間何も見えていないがその中ではもうすでに勝敗は決していた。立っている者——この場合は浮いている者だが——こそが勝者であり敗者は地面に叩きつけられる。落下してきたのは……紫色の翼だった。

「そこまでです。勝者はボーマンダとクラウンピースです!」

クラピはボーマンダの背中に乗り楽しく踊っていた。

第二十一話 醸し出るカリスマ

「お嬢様、大丈夫でしょうか？」

「私は問題ないわ。それよりもこの子ね。ゆっくりお休みなさい」

レミリアはクロバットをボールに戻してじつくりと労わった。ボールの中でにっこりと笑っていたが軽く歯ぎしりをしているのが見えた。それはレミリアに対してであり、悲しい顔をさせないで良かったことと勝利をプレゼントしたかったことの両方が心の内に在った。

「あなたに勝たせてあげたかったわ。ごめんなさいね」

レミリアも同様に考えておりお互いがお互いを尊敬し合っていた。レミリアがカリスマと呼ばれる原因その一である。

「レミリア！ 反省する必要はないぞ！ その証拠にこれを見ろ」

クラピはポーマンダの上から声高らかに叫んでいた。地上に戻ってポーマンダから降りると口を指差していた。そこには先ほどまであつたはずのキバが完全に砕けていた。

「この子のキバ、普通なら砕けるはずなのよ。まあすぐに生えてくるけどここまでの

威力を与えたのは初めてだからアタイびっくり！」

敵から褒められるのは対戦したものの特権である。クラピの差し伸べた手を掴みがっちり握手をした。悔しきはあるが後悔はなかった。

「皆。後は頼んだわよ」

レミリアは後ろを振り向き勝敗を仲間たちに託した。託された仲間たちもレミリアの真意は感じ取れた。しかしそれを受け止められるかどうかは別問題である。エタニティラルバは渋い顔をしているしリグルも下を向いてしまっている。あのレミリアがいきなり敗れると予想していなかったのですの後に続くのがどうしても躊躇ってしまう。だが誰かがその意志を継がなければならぬ。

「……分かったわ。私たちに任せて」

レミリアとバトンタッチして前線に出てきたのは黒谷ヤマメである。つい先ほどまで尻込みしていたが触発されたのだろう。背筋をピンと伸ばして前を真っ直ぐ見据えていた。だが多少の恐怖で体は震えており何度も深呼吸を繰り返していた。

「私のパートナーはこの子よ！ 出ておいで！」

ヤマメは手から放出した蜘蛛の巣を頭上に出現させた。そこに向けてモンスターボールを投げると現れたのはアリアドスである。土蜘蛛の彼女にピッタリのポケモンであり通常のアリアドスよりもサイズが大きい。パワーに特化している個体のため攻

撃力は高いようである。

「おー！ 強そうだしクールじゃん！」

クラピは巢に集まる虫のようにアリアドスに近づいていった。実際は松明を持っているので捕食される側だが。アリアドスの赤が気に入ったのだろう。本人はペタペタ触られて嫌そうである。

「アタイも戦いたかったけどできないからなー。んー じゃあ清蘭で！」

「えっ！ 私!? ちょっと待って」

急に振られて驚く清蘭。次に戦うのが自分だと思っていなかったので完全に油断していた。戦いたくないわけではないが準備はできていなかったので慌ててボールを取り出す。スーパースポールから出てきたのは紫色の体をしたヌメルゴンである。小柄な清蘭に似つかわしくない重量級である。

「あ、ボク？ 楽しみだなー 戦うの。清蘭ちゃんもよろしくねー」

のほほんとした感じで心優しいポケモンである。波長が清蘭と合うようで仲のいい雰囲気である。ともにドラゴンタイプということもあり相性はよさそうである。しかしそれは迷いの森チームも同様である。アリアドスもヤマメもむし・どくタイプということもあり完全一致しているので拮抗した勝負が見られるかも知れない。

「両者とも準備はよろしいですか？ それでは……バトルスタートです！」

咲夜の合図とともに第二試合が始まった。この試合でカタをつけたい清蘭と一勝一敗に持ち込みたいヤマメ。その始まりはアリアドスのベノムシヨックとヌメルゴンのヘドロウエーブから幕を開けた。ベノムシヨック自体の威力は低いタイプ一致のおかげでこの毒勝負は実力が伯仲していた。なお飛び散った毒飛沫は後でスタツフ（咲夜）が綺麗に片付けました。

「むしタイプにはこれよ！ ヌメルゴン、かえんほうしや！」

「来たわね！ ねばねばネットでかわすのよ！」

むしタイプにとつて天敵である炎。だがその対策をしていない程ヤマメは愚かなトレーナーではない。アリアドスは紅魔館の外壁に糸を吐き、迫りくるかえんほうしやをかわした。糸を出し入れするスピードは相当なものであり狙いをしっかりと定めるも全く当たらない。若干素早さの遅いアリアドスのスピード面をカバーする妙技を完成させていたのである。すでにフィールド上は蜘蛛の巣だらけになっており徐々にヌメルゴンの陣地が侵略されている。それは本人よりも客観的に見ている方が気付くものである。

「うーん、中々当たらないな」

「ヌメルゴン、ひとまず状況を整えるわよ。蜘蛛の巣に向けてかえんほうしや！」

蜘蛛の糸は火に弱い。世間一般の常識を踏襲して狙いを本人から蜘蛛の巣に変更した。だがそんな常識が通用しないのがこの幻想郷である。

「え?! ちよつ、ちよつと待って!」

「ヌメルゴン、大丈夫!」

溶けるはずの糸は炎に負けるどころか包み込み……しなやかに元の方向に弾き返した。自分の炎にカウンターを喰らったヌメルゴンの視界は覆われた。ドラゴンタイプであるためダメージは大したことはないが敵の姿が見えないのは厄介である。

「そうよ、あまごいで炎を消すのよ!」

ヌメルゴンは特性うるおいボディを持っている。これは雨の時に状態異常を打ち消すことができる特性であり、対策としてあまごいを仕込んでいた。雨雲を頭上に浮かべて炎をかき消した。雨煙が辺り一帯を覆い結局相手の姿が見えない。

「……そこよ! メガホーン!」

アリアドスが煙の中から突進してきた。両腕を前に突き出して堅いヌメルゴンの皮膚に渾身の一撃を打ち込んだ。低威力ではあるが不意打ちの角度から来た上に急所にも当たった。耐久力が自慢のヌメルゴンもこれには片膝を着いてしまった。

「ヌメルゴン!! 踏ん張って!」

しかしヌメルゴンの顔色は良くなかった。さっきの一撃が余程堪えたのか息遣いが

荒い。勝敗が決まるのも後僅かだろう。一見ノーダメージのアリアドスが有利に見えるがこちらの耐久は無いに等しいので一発被弾すればアウトだろう。

「そろそろ不味いわね……」

清蘭が目配せをするとヌメルゴンはゆっくりと頷いた。この一ターンで終わらせようという合図であり、上空に向かつてりゆうのはどうを打ち上げた。ヤマメたちは身構えたがこれを直接ぶつけるわけではない。真下に落ちてきたこの技は姿を変えて青紫色の剣になり、ヌメルゴンの右手に収まっていた。

「アリアドス君、この一撃に全てを込める！ さあ、おいで！」

元々ヌメルゴンは接近戦の方が得意であるがそれに該当する技を覚えられなかった。そのため使える遠距離技を無理矢理近距離技にすることで戦闘スタイルを広げた。近距離相手には遠距離技、またはその逆を行うことで相手の得意分野を封じることができ、現在の状況はそんなに甘くない。一番得意な剣技で一撃でアリアドスを仕留める腹積もりであった。

「ああ！ 行くぞ」

ヌメルゴンの考えが汲み取れたわけではない。しかし接近戦は好都合だったのでその勝負に乗ることにした。いつ被弾するか分からなかったのでアリアドスもこれで終わらせたい。右脚を輝かせてメガホーンの準備をする一方相手は居合のポーズを取っ

ており動く様子はなかった。こちらから攻めてきたところを返り討ちにするようだ。

「……はっ!!」

「ぐう!!」

「きゃあー!!」

アリアドスが一気に間合いを詰めて切りかかる。剣と拳がぶつかり合い辺りに衝撃波が伝わった。当然紅魔館の外壁にはヒビが入り周りのトレーナーたちは風圧に耐えていた。一進一退の攻撃のぶつかりあい拮抗していたが……いずれ決着はつく。

「……強いな」

「君もね」

お互いがたった一言交わした後、床に伏せたのは……

「そこまでです。勝者はアリアドス、ヤマメたちです」

「や、やったー!!」

「はあ、はあ。疲れた……」

ヌメルゴンを撃破した後体力を使い果たしたのかその場でへたり込んでしまった。ヤマメはすかさずモンスターボールの中に戻して回復させた。しっかりとねぎらうとポケットに戻した。

「ヤマメ、ありがとうね」

「どうしたの？ レミリア」

背後から声をかけてきたのはレミリア。その顔には嬉しさと申し訳なさの混じった表情が浮かんでいた。

「私の分まで頑張ってくれてありがとう。本当はリーダーの私が勝っていたらもつと楽だっただろうけど……」

「レミリア……」

「そんなことないよ！ レミリアちゃん！」

余程勝つ自信があつたのだろう。しおらしく感謝の意を述べていたレミリアに横槍を入れたのはヤマメではなくラルバだった。

「私、最初はすごく怖かつたの。あんなに強い相手と戦わなくちゃつて。でも大将なのに颯爽と出るレミリアちゃんはずごくかつこよかつた！ だから勝てたのはレミリアちゃんのおかげだよ！ ……つて試合してない私が言っても仕方ないんだけどね……」

何か口にしようにしていたヤマメだったがにっこりと口を閉じた。これ以上同じことを言う必要はないということだろう。

「ありがとうラルバ。あなたの本心が聞けて嬉しいわ」

カリスマは本人の意図しないところで醸し出されるものである。ヤマメ、リグル、そ

してラルバたちはもうすでに当てられていた。従者である咲夜はそれが見て取れたのであった。

「さすがですねお嬢様。今の紅魔館チームのリーダーの自分が恥ずかしくなるくらいですよ」

相手チームから出てきたのは華人小娘、紅美鈴である。傍らにはうろこポケモンジャランガが控えていた。つまり大將戦を務めるのが美鈴ということである。こちらのリーダーはすでに先発で出たのでラルバとリグルのどちらかがトリを務めなければならない。相手は弱いわけがなさそうなジャランガ。だが二人の今の気持ちに恐れという言葉はなかった。二人で話し合って有利そうなラルバが出ることになった。

「おいで！ アブリボン！」

モンスターボールから勢いよく出てきたのはツリアブポケモンアブリボン。タイプはむし・フェアリーとジャランガ相手には有利である。目をギラギラと輝かせて鬨志は満ち溢れておりラルバ同様にやる気はばっちりのようだ。

「さあ、泣いても笑ってもこれで最終戦です。存分に全力をぶつけ合いましょう」

「うん！ 負けないよ」

「それでは……はじめ！」

第二十二話 タイプ相性

「まずは弱点を突きます！ ジャラランガ、ラストーカノン」

「こつちも行くよ！ アブリボン、マジカルシャイン」

はがねタイプとフェアリータイプの技が激突する。ハイスペックなジャラランガの方が火力自体は高いのだがフェアリー四倍弱点には逆らえずマジカルシャインがラストーカノンを押し返した。

「ぐおっ！」

「大丈夫ですか!？」

「へっ、こんなものなんでもねえ。俺様は耐久力が自慢のドラゴンだからな」

しっかりとダメージは受けているはずなのにケロツとしていた。先のヌメルゴンは特殊防御に優れていたがジャラランガは両面しつかりと堅い。たとえフェアリー技を喰らっても容易く倒れるポケモンではない。

「全力でしたんだけどなく さすがジャラランガ。腐っても600族だね」

「おい、誰が腐ってるんだこの野郎」

「え？ アブリボン知り合いなの」

「地元が一緒だね。時々見たことあるんだ。でもあんなに強くなかったんだけどね」

アブリボンもジャラランガもどちらもアローラ出身であり時々顔を合わせていた。お互い軽口を言える位の間柄であるがその頃はまだまだ耐久面は柔らかかった。フラエツテのようせいのかぜ一発で沈むレベルのはずの脆さでありよくネタにされていた。

「しつかり鍛えましたからね。ジャラランガの成長速度は目を見張るものがありましたよ」

以前ジャラランガはパートナーを探しにふらりと紅魔館に立ち寄っていた。目的は当主であるレミアアとコンビを組んで優勝を目指すためであった。しかしまだクロバットと出会っていない頃であったが何となく嫌という理由でレミアアにばっさりと断られた。門外で落ち込んでいるところを美鈴に声をかけられたという出会いであった。それから修行を極めて耐久力にステータス極振りしたのである。美鈴と全く同じタイプであったことも功を奏したのだろう。

「美鈴さん、私のアブリボンだって負けてないよ！」

その辺で適当にアブリボンを捕まえたラルバだったがしつかりと絆は築いてきたつもりだ。強力な技も携えてその練度も完全である。相性もよいので負けるつもりもなかった。

「ちようちのまいでパワーアップして！」

アプリボンは自身の鱗粉を撒き散らして艶美に踊り始めた。一見隙だらけに見えるが纏っている鱗粉がシールドとなり攻撃をシャットアウトしている。もしもこの間に攻撃を仕掛けるとただ無償で積ませることになってしまう。それを一瞬で見抜いた美鈴はラスターカノンを撃ちそうになっているジャラランガを制止した。

「こつちもソウルビートで能力上げて下さい！」

「え？ お、おう」

発射寸前の光線を引つ込めて全身を震わせた。眠っているジャラランガの全力を引き起こすため体力は削れてしまうが大幅にパワーアップできる。短期決戦に持ち込むつもりだろう。お互いほぼ同時に積み終わり体中からオーラのようなものが溢れていた。

「仕切り直したアプリボン。俺様の全力を喰らえ！ スケイルノイズ!!」

「スケイルノイズ!? タイプ相性をご存じでない!？」

先に仕掛けたのはジャラランガであり、放った技はドラゴン技のスケイルノイズ。フェアリータイプのアプリボンに効果はないはずであるため螺旋状の波状攻撃を避ける素振りすらしなかった。実際直撃しても痛みの一つもない。

「ほら見てみなさい！ あなたはまずタイプ相性から見直して……」

「今ですジャラランガ！」

「おうよー！」

美鈴の掛け声が出ると同時にさっきまで直線状だったはずのスケイルノイズが進路を変えた。広範囲に渡る攻撃が狭い範囲に絞られ、アプリボンの上空から降り注がれた。美鈴との特訓で自在にスケイルノイズの調整ができるようになったのである。先ほどよりも濃度の高い攻撃ではあるがタイプが変わるわけではないので依然ノーダメージである。しかし狙いはそこではなかった。

「ふふん、私のアプリボンがそんなゴリ押しに……ハッ！　まずいわアプリボン、離れて！」

「えっ!？」

「遅いぜ！　おらあー！」

「きやああー！！」

ジャラランガのインファイトを受けたアプリボンはラルバに衝突して諸共吹っ飛ばされた。戦闘不能にはなっていないが大ダメージである。いきなりのことでアプリボンは何が何だか理解できなかったが遠くで見えていたラルバは全体の状況を俯瞰して見ている。

「かくとう技は1／4ダメージのはずなのに何で……?？」

「違うよ、いや違うとも言えないけど……」

曖昧な返答にアプリボンの頭には疑問符が浮かんだ。実はあの攻撃はアプリボンにダメージを与えるためではなく地面を破壊するためであった。浮いている本人は意識していなかったがスケイルノイズが当たった箇所はひどくえぐれていた。今は咲夜が直してくれているが狙い目はそこであった。砕いたときの土煙に乗じて奇襲を仕掛けたのである。またそれだけではなく飛び散った大きめのコンクリートを手に持ちインファイトを繰り出した。普通はむし・フェアリータイプに半々減されてしまうがこうすることで疑似ストーンエッジを出せる。いわタイプはむしタイプに効果抜群となるのでアプリボンはふらふらしていた。

「見たか！ 俺たちはタイプ相性だけで倒せるようなヤワな相手じゃねえんだよ」
「臨機応変に動けるようになりましたねお見事です」

美鈴はレミリアに仕えている。それすなわちレミリアの話し相手にならないなければならないということである。基本的に全ての能力が美鈴の上位互換である咲夜自身が唯一認めている部分、それは当主との会話である。コミュニケーション能力だけは抜けている美鈴なのでジャラランガ程度を上手くコントロールするくらい朝飯前である。今も調子に乗っているのか両手を内側に向けてドヤ顔をしている。当主の決めポーズを知らないはずだが全く同じであった。わがままな人はこのポーズをとりたがるのだろうか？

「さあ、最後まで油断しないで下さい」

「気にしすぎるなって！　もう俺たちの勝ちが決まったもんだからよ」

「まだまだ負けないよ！　むしのさざめきで足止めだ！」

ラルバはむしのさざめきを指示した。むし技が通りにくいのは百も承知であったがアプリボンの一番自信のある技がこれであった。倒せるとは微塵も思っていなかったが少しでも隙を作りたかった。

「避けて下さい！」

「へっ、避けるまでもないぜ。何せ俺は天下のドラゴンジャラランガ様だぞ。特性もぼうおんでシャットアウト！　こんな攻撃屁でも……」

むし技はかくとうタイプにこうかいまひとつ。そうでなくても先ほどの全力のマジカルシャインを軽々といなした経験が堂々とした出で立ちを顕現させていた。まさか決着があつてなくついでしてしまうとは殆どの者が予想していなかった。

「え……な、ぜだ……？」

「だから言ったのに……」

戦闘不能になったジャラランガをよそに美鈴は頭を押さえて溜め息を付いた。一方ラルバたちも目を丸くしていた。何故倒れたか分からないようである。

「あなた……特性ぼうおんじゃなくてぼうじんじゃありませんか。昨日特性パッチで変え

たの忘れてたんですか？」

「……あ、忘れてた。でもあんな攻撃でこの俺様が……」

「ソウルビートでHPを削った上にインファイトで耐久力ダウンしたの忘れてたんですか？」

「……………」

ぐうの音も出なかった。大技を使うにはリスクがあることを失念していたとは何たる恥であろうか。ジャラランガはショックでそのまま倒れていた。

「これにて終幕です。ラルバたちの勝利ということでお嬢様率いる迷いの森チームの勝利です」

「……お、おおー！? やったー！ 私たちの勝利だー！」

ワンテンポ遅れてリグルたちが歓喜の声を上げた。強力なドラゴン軍団を制して見事二回戦に歩を進めた。ラルバたちがとび跳ねていると三人がレミリアに近づいてきた。

「な、何よ皆して!？」

レミリアは背中と脚を皆の両腕で支えられると宙に上がり胴上げされた。今回のMVPはまぎれもなく彼女だろう、その思いが一致していた皆は誰かに言われることなく一斉に集結していた。相棒ポケモンたちも勝手に飛び出してにこやかにレミリアを持

ち上げている。普段ここまでされたことがないお嬢様は当惑しておりちらちらと従者の方を見ていた。しかし咲夜はそれを止めるつもりは毛頭ないように微笑んでいた。審判という立場上参加はできないが混ざりたかったからである。

「ふう……ま、まあありがたく思っておくわ。さて……」

ひとしきり胴上げタイムが終了した後地上に降ろされたレミリアは皆を制止した。そのまま立ち去るのではなく相手の紅魔館チームの長、美鈴の元に向かった。

「お嬢様……?」

「ジャラランガと言ったわね。まずは美鈴と組んでくれてありがとう。私の目の届かない範囲でどこまでできるか気になっていたけど……あなたが居てくれたのね」

ワガママだけれど部下思い。それがカリスマたる所以である。美鈴は傍で頬を掻きながら照れていた。

「へっ！ お前が俺様と組んでいたら楽々勝っていたんだらうけどな」

「ダメよ。あなた弱いし」

ジャラランガの（心の）きゆうしよにあたった！ 悪気はないが真実をポンと言われて今度こそ完全にKOされた。美鈴は苦笑いしておりそのままハイパーボールに戻した。組みたかった本人に再びこう言われてはショックだろう。癒すために戻してあげた。

「ま、まあとりあえずおめでとうございます。次の試合も頑張ってくださいね」
「ありがとうね。美鈴」

固い握手を交わして紅魔館チームと迷いの森チームの試合は終了した。全力を尽くしたため不満はないが一人だけ不服そうな者がいた。

「あーあ。アタイもつと戦いたかったのにな」

唯一勝利したのに次に進めないクラウンピースは口を尖らせていた。隣で磨弓がよしよししているがご立腹のようだ。

「チーム戦だから仕方ないわよ。見ていて面白くなかったかしら？」

「そんなことないけど……っってお前誰だ？」

いきなり割って入ってきたのは磨弓や他のメンバーではなく突如現れた空間の中の者であった。

「あ、紫！ どこにいたの。審判急に押し付けたりして！」

「ごめんなさいね少し野暮用で。ところでクラウンピース、ちよつと聞きたいことあるから来てくれないかしら？」

「アタイか？ いいぞー！ まだ暴れ足りないからな」

「別にバトルということではないのですが……」

一緒にいた藍が一言入れようとしたその瞬間、紫が何かを思い付いたように表情を明

るくした。

「！　そうね、戦って貰いたいわね」

「え？　紫様!?!　話が違つ……」

「じゃあ咲夜、そういう訳だからまた審判頼むわね」

「えっ!?!　待つ……」

藍と咲夜の言うことを聞かずに紫はクラピとともにスキマに消えていった。後に残された咲夜だったがこの先どのチームが戦えば良いのか分からない。それにこれ以上続けるには少し日も沈んでしまっていた。咲夜は溜め息を付きながらハキハキとした声で喋り始めた。

「えー。皆さん聞こえていますでしようか。主催者の八雲紫の代理、十六夜咲夜です。本日の試合はここまでとします。明日また本日と同じ場所に集まってください」

紫はチームのメンバーの誰か一人にすでにタブレットのようなものを忍ばせていたらしいので全ての人間に咲夜の声は届いたと思われる。

こうして幻想郷を舞台にしたポケモンバトル一日目の幕が閉じた。試合チームは四組だったがどの試合も濃密な物になっていた。すでにバトルを終えた者やまだの者など色々あるが熱気が冷めやらぬ様子であった。また明日、今日以上に白熱したものが見

られるのだろう。そんな希望で満ち溢れていた。

番外編2 ウツロイド追跡隊 v s レジスチル

レジロックから言われた通り地霊殿を目指す八千慧たち一行。レジロックの居た大穴から地霊殿まではそれほど遠くはなかったのですぐに到着した。地底にそびえる大きな館、地霊殿には今現在祭りが行われているため誰もいない。

「……………あれだな」

さて、レジロックの言う兄弟とはどこにいるのだろうか。そんな疑問は一切浮かばなかった。正門によく分からない銀色の物体が置かれていたからである。レジロック同様顔には点のようなものが付いており間違いないが次の狙いである。

「ちよつといいですか？ あなたがレジロックの関係者、というか兄弟ですよね？」

「……………」

「おい、聞いているのか？」

潤美とバクガメスが問いかけるも黙ったままであった。ケンタロスがはがねタイプの匂いをすでにかぎとっていたので相性有利なバクガメスが前に出ていた。さっきは潤美にいいところを取られたので今度は頑張ろうと息巻いていた。

「……………zzzz」

「ええ？」

よく見ると額の点がレジロックの時よりも発光していない。つまり立ったまま眠っていた。よく聞いたら寝息も聞こえるので優しく起こすことにした。

「すみません。起きて下さい！」

「……ハッ！ ナニ、ドウシタノ？」

点が光り動き始めた。いきなりだったのかその巨体の腕が潤美を襲った。

「危ない！ ぐっ！」

「バクガメス！」

潤美を庇ったバクガメスのみぞおちにクリーンヒットして体力が大分削られてしまった。もんどりうって苦しんでいた。

「だ、大丈夫だ……うっ」

強がってはいるものの足はガクガクしていた。さすが伝説のポケモンは一味違う。今のこの状態では存分に戦えないと悟り冷や汗を流していた。

「ゴメンゴメン、ホラコレタベテ」

鋼の巨人から渡されたのはオボンの実という体力を回復する木の实である。若干怪しかったが見覚えのある木の实であり嫌な予感はしなかったので頂くことにした。

「おっ、うん！ いける」

ただの普通の木の実であったことを確認し平らげるとバクガメスの体力は快復した。どうやらこの相手に悪意のようなものはなさそうである。

「ボクノナマエハレジスチル。キミタチノコトハレジロックカラキイテルヨ」

レジスチルは誰もいない地底でのんびりと遊んでいたらしく、そこでレジロックから連絡を受けて八千慧たちを待っていた。その待っている途中に居眠りをしたという体に似つかわしくないのんびりやさんである。

「……なんだかさっきの奴とは随分雰囲気違うな」

「優しいポケモンなのかな？」

皆の緊張が解れる。一切の敵意が見られなかったのでバクガメスたちは思いきって聞いてみた。

「俺達のことを知っているなら話は早い。お前に勝てばクリスタルを貰えるのか？」

ここに来た目的、それは貰ったZリングにはめ込むZクリスタルを頂くことである。レジスチルを紹介してくれたということはこいつが持っていると考えて間違いないだろう。距離を詰めてにじりよる。

「ウーン、ボクアマリタタカウノトクイジヤナイカラナ……ココハタカラサガシデドウカナ？」

「宝探し？」

「ソ、コノチレイデンノドコカニ乙クリスタル16コカクシタンダヨネ。ソレヲミツケラレタラキミタチノカチ^デイイヨ」

てつきりバトルでも始まるのかと来る前にウォーミングアップを済ませていた二匹だった。これには肩すかしを喰らった。あくまでも相手は伝説ポケモン。戦って勝てる保証はどこにもないのでこの案に乗らない手はなかった。

「それでいいが……制限時間とかはどうするんだ？ 無制限というわけにもいかないだろう」

「ソウダネ。ジャアダレカガカエツテクルマデニシヨウカ」

「もし見つけられなかったら罰とかはあるんですか？」

「バツ？ ソンナノナイヨ、デモコノアトクルレジアイストノバトルニクセンスルダロウケドネ」

「レジアイス？」

「ボクノキョウダイノヒトリダヨ。カンタンニイウトセントウキョウダネ」

「戦闘狂!? そんなに凶暴なのですか」

「キョウボウデハナイヨ。ジュンスイニタタカウコトガダイスキナダケ」

もう一人の兄弟はレジアイスというらしい。名前にこおりタイプだろう。こちらの相性的には有利だが戦闘狂というフレーズがひっかかる。乙わざなしで迎え撃つに

は心許ないのでここは是非とも見つけ出さねばならない。地上で行われている試合は今日一日で全て終わるとは思えない。この主人がいつ帰ってくるか分からないので早急に見つけなければならぬ。

「じゃあレジスチル、もう探してもいいか？」

「イイヨー」

ケンタロスは文字通り猪突猛進で館に入って行き角を器用に使つて扉を開けた。地霊殿も紅魔館同様広く探すのは一苦労しそうである。

「とりあえず手分けして探そうか。俺と八千慧がここ、バクガメスと潤美が離れで頼む」
「了解したわ」

一階の方が広く機動力に優れる二人がここの担当、狭いがギミックの多そうな離れはパワー担当の二人が務めることになった。一刻の猶予もないのですぐさま取り掛かった。潤美たちは館の奥にある空中廊下を伝つて離れの方に移動し、残された二人は片っ端から部屋を物色し始めた。

「中は割と片付いているな。これなら探索しやすそうだ」

ここの当主、古明地さとりは几帳面な性格らしくどの部屋もきちんと整理整頓されている。おかげで思う存分調べることができる。ケンタロスは自慢の嗅覚を用いて匂いを調べていた。Zクリスタルを実際に見たわけではないのでタイプごとの匂いがある

かどうか分からないがしつかりとかぎ分けていた。

「ポケモンの匂いは……ないか。そりやそうか」

ポケモンがここ幻想郷にやってきて一週間経つとは言え屋敷内に入ったことはないようだ。しかもここ地霊殿は嫌われ者たちの巣窟。簡単に近寄る輩はいないだろう。しかしここまで匂いがないとなるとクリスタルの全てが離れにあるかそもそもクリスタルの匂いを封じているかのどちらかだと思われた。

「無いな……一体どこに隠したんだ？」

重そうな机、棚などを軽々と持ち上げて小さな宝石を探す。やっていることは完全に盗賊だがそんなことを言っている場合ではない。一部屋一分と決めて次の部屋に移っていった。

「八千慧、どうだった？」

「ダメ、どこにもない」

ケンタロスよりも多くの部屋を調べあげた八千慧も未だに一つも見つけられていない。すでに調べ上げたところに取りこぼしがあったかもしれないがもう一度周る余裕はない。もつと効率的にしなければ……

「……そうだ！ あなた全体攻撃技何か使える？」

「全体攻撃？ 一応じしんは覚えているが」

「地霊殿を壊さないように調整することはできる？」

「やったことはないが……勝算はあるのか？」

もしも倒壊してしまえば紫や霊夢などが出ばつてくること間違いなしだろう。やって来た時点でクリスタルのゲットチャンスはなくなる。だがそれでも今はケンタロスと自分を信じるしかなかった。

「私に、任せて！」

「よく言った！ 俺もお前を信じるぞ」

パートナーは違うが良い絆が築かれていた。ケンタロスは細心の注意を払ってじしんを本館と離れ、合わせてぶちかました。

「ううっ……！」

「ど、どうだ……？」

地面がぐわんぐわんと揺れ、壁も床もミシミシ言っている。こんな風にして八千慧はこれから一体どうするつもりなのだろうか。

「はあああああ！ いっけー！」

八千慧はグラグラしている地面に手をかざした。すると地面に接している全てのものが上空に浮かび上がった。

「や、八千慧!! お前何を……！」

「それより見て、ケンタロス」

いきなりの奇行に驚いたケンタロスだったがそれ以上に驚くべき光景が広がっていた。

「何だ、これ……?」

八千慧の指差す方向に頭を向けるとそこには何かが浮かび上がっていた。重力に逆らうはずの物体が例外的な反応を見せていた。正体は空のモンスターボールや回復の薬など紫たちが開発したものであった。

「私の『逆らう気力を失わせる程度の能力』を応用したのよ。重力に従うはずのものに能力を干渉させることでこうやって宙ぶらりんにすることができるようなのよ」

先の異変で霊夢たちに討伐された後に自身のトレイニングに励んでいた八千慧。その甲斐あってか重力に逆らう、逆らわないのコントロールが可能になった。元々精神的な能力なので正邪ほど自在ではないが広範囲にまで力が及ぶようになっていた。

「それはすごいな……え? だったら最初からやれよ!」

「どうやら私の能力は幻想郷由来のものは浮かび上がらせないみたいなのよ」

実際初めて浮かび上がらせられたのは幻想入りしたMDプレイヤーやルービックキューブなどであり、妖怪の山の滝などで試してみると一瞬は浮かび上がるがすぐに勢いが戻ってしまった。つまり、外から来た物だけに及ぶ能力であり、さとりが元々持つ

ていた私物などは範囲外らしい。

「でもそのおかげで見つけられたわ。ほら」

八千慧は辺りを見回すとある一つの例外的な挙動をしているものを発見した。それは入口に敷かれていたカーペットであった。カーペットはおそらく元々幻想郷にあつたもののはずである。だが今何故か浮いてしまっている。それによく見ると中央が少し盛り上がりつつあり隠されているものに持ち上げられている風になっていた。二人は確信をもつて入口に近づきその敷物を引つpegした。

「あ、あつたー!!」

確信は見事に命中。空中に浮かび上がっていたのは乙クリスタル。お宝の登場である。しかもよく見ると18種類という全クリスタルが塊となっていた。

「こ、こんなにあつたのか……」

「あれ? これだけもらつてもいいのかしら…… ちょっと聞いてみましょうか」

盲点ともいべき入口に配置した本人のレジスチルは外に待機してもらっている。勝手に貰うことは忍びないと思つたので入口の扉をガチャリと開いた。

「……え?」

外にいないはずのレジスチル。しかし最初に会つたときとは違い地面に突つ伏している。寝ていると思つたが体が傷だらけであつた。一体誰の襲撃を受けたのか……

「あ、そういうえばさっきのじしん……」

広範囲に放たれた地面技。それに加えてレジスチルははがねタイプ。そこから導き出される答えは一つしかなかった。

「悪い、レジスチル。巻き込んでしまつて」

瀕死になつたわけではなく気絶しているだけなのでおそらく大丈夫だとは思うが、このお宝をどう取り扱つてよいものか……

「ケンタロス、この子どうしようか？」

「ドウシヨウカ？ キミたち、ボクノキョウダイニナニスルツモリナノカナ？」

「な……!？」

二人の背後から忍び寄り寄る影。背中からはゾクゾクと悪寒を感じる。それもそのはず待ち構えていたのはひょうざんポケモンレジアイスだったからである。倒れている兄弟、その近くに居た見知らぬ者たち。レジアイスのとる行動は一つだった。ゆつくりとその巨大な氷の右腕を伸ばした。

「う、うわぁー！！！！」

番外編3 ウツロイド追跡隊 VS レジアイス

「なんだ今のは?！」

所変わって地霊殿の離れ。探すところの多い場所ということもあり、めぼしい手が見つけられていないなかった。そんなときに本館の方から大きな揺れを感じた。

「もしかして私のケンタロスのじしんかも……ちよつと行ってみましょうか。何かあったのかもしれないし」

「ああ……ん? これって……」

バクガメスは棚の上に何かが置かれているのに気づいてそれを手にした。Zクリスタルは本館に全て置いていたので目当ての物ではないがそれに匹敵するお宝を見つけてしまった。

「どうしたの? 行くよ!」

「お、おう!」

潤美に言いそびれてしまいその宝を胸の窪みに仕舞いこんだ。一段落着いたらさっきのレジスチルにでも話を聞いてみようと思った。

全速力で入口に戻るとそこには銀色の巨人の代わりに水色の巨人がそびえ立っていた。おそらくさつき言っていたレジアイスという奴だろうと二人は思った。曰く凶暴らしいポケモンが今、八千慧とケンタロスに手を伸ばしていた。

「危ない!!」

間に合わない、そう思った瞬間八千慧たち二人はニコツと笑った。

「へー、このクリスタル作ったのレジアイスなんだ」

「ソウソウ！ ボクイガイトコウイウコマカイノツクルノトクイナンド」

「さすが伝説のポケモン。じゃあこのZリングも?」

「イヤソレハレジロックダネ。デ、ナカニコメルソザイノチヨウタツガスチルノヤクワリ。ボクタチサンキョウダイデコレヲツクツテイルンダヨ」

殴りかかろうとしている風に見えたがただ和気藹々と話し込んでいただけであった。潤美たちは減速して三人の会話をじっと聞いていた。

「それより……レジスチルについて攻撃してごめんなさい。大切な兄弟なのに」

「アヤマツテクレタカラベツニイイヨ。スチルモタダキゼツシテルダケミタイダシス
グオキルトオモウカラ」

倒れているレジスチルを見ても激昂したりせず相手の話をしっかり聞いて穏便に過ごす様子を傍から見て聞いていた話と随分違うように思えた。いくらか話していると

八千慧たちが潤美の方によく気が付いた。

「あ！ 潤美、戻ってきたの。こっちはクリスタル全部見つけたよ」

「う、うん。それはすごいけど……」

「コノコタチハダレ？」

「そういや言っただけじゃなかったね。牛崎潤美とバクガメス、二人は私たちの仲間なんだ」

氷の巨人に紹介する八千慧。軽く会釈をすると快く歓迎してくれた。目が点だけなので表情は分からないが草草から喜んでるように読み取れた。

「それより八千慧、なんでこんなに和やかなの？」

「最初は私も構えていたんだけど話す内に段々と打ち解けてきてね。思ったよりいいポケモンだよ」

「そうなのね……あ！ そうだそうだ。ウツロイドのことよ！」

ここにきた目的、それは大切な仲間の瓔花を攫ったウツロイドを探索するためであった。最後の頼みの綱が切れないことを願いながら聞いてみた。

「レジアイス、ここにクラゲみたいな透明でふよふよしたポケモン来なかった？」

「クラゲ……？ ウーン、アオイロトアカイロノポケモンナラヨンタイホドミタケドトウメイナノハイナカツタナ」

レジアイスが言っているのはおそらくメノクラゲ、ドククラゲ、プルルル、ブルンゲ

ルのことだろう。確かにクラゲモチーフだろうが今回の目当てはそれではない。ここも外れ。次への手がかりを失ってしまい困惑する一同であった。

「じゃあどうする?」

「どうもこうも……手がかり無いから地上に戻るしかないよな。というかお前たちは次の試合もあるから早めに戻らないといけないだろ」

夢中になって地下に来たが八千慧とバクガメスたちは勝利チームなのでいつもの仲間たちとはぐれたままではいけない。すぐに出番はないから猶予は幾分かあると踏んではいるがずっとというわけにはいかなかった。

「ありがとうねレジアイス。私たちそろそろ地上に戻るわ。レジスチルが目覚めたら悪かったと伝えておいてくれる?」

「コツチコソスマナカツタナ……ア、ソウダ! キミたちマダ乙ワザツカッタコトナイデシヨ? ボクガケイコツケテアゲルカラカカツテオイデ」

帰ろうとした瞬間にレジアイスからバトルを申し込まれた。お互い顔を見合わせてどうしようかと考える潤美たちであったが謹んで受けることにした。何しろ相手は得体の知れないポケモン。万が一のことを考えてパワーアップをしておくことに越したことはないからだ。幸い今は体力に余裕があるし後に響くことはないだろうと考えていた。

「じゃあ……頼んでもいいかしら。折角手にしたZリング、使いこなせるようにならないと」

「イイヨー」

「あ、もう一ついいかなレジアイス」

「ドウシタノ？」

「さつき離れで俺もZリング見つけたんだが……使ってもいいか？」

バクガメスは胸の窪みからさつき見つけたZリングを取り出してレジアイスに見せた。宝探しはZクリスタルが獲物だったのでこれはルール違反になるかもと思いついていた。

「ハナレニ？ ウーン、ボクタチアソコニハイッタコトナイケド……マアインジヤナイカナ？ キミタチモツカツテイイヨ」

「本当！ よし、これで私たちも使えるね、バクガメス！」

許しが出たところで二人は手首にリングを装着した。はめ込むクリスタルはバクガメスの方にホノオZ、ケンタロスの方にカクトウZであった。相手は弱点の多いこおりタイプ。こちら側はしっかりと弱点は付けるが決して油断はできない。なにしろバトルの実力はレジスチルお墨付きであるからだ。

「ジyunビハイイ？」

「ええ、いつでもいいわよ」

「ソレジヤア……イクヨ！」

戦いの合図が切られた瞬間であった。下手をすればこれで終了していたかも知れなかった。遠くにいたはずのレジアイスが俊足で間合いを詰めて眼前で縦向きにばかりからをくりだした。間一髪で八千慧が右に避けろと命じたのでかわすことができたが、もし当たっていたらどうなっていたのかは大地に抉れた小さな底なしの穴が物語っていた。

「オ、ヨケタネ。スゴイ」

「怯まないで！ ケンタロス、すてみタツクル！」

攻撃を向けられなかったケンタロスはすかさずすてみタツクルをお見舞いした。レジアイスはそのままモロに喰らって吹き飛んだ。反動を受ける強力な技だったがレジアイスが地面に叩きつけられる音は辺り一帯に響いた。

「カイヒリヨクニスピード。ズイブナイイパートナーニメグリアエタミタイダネ」

「……効いてないのか」

砂煙の中からケロリと立ち上がった相手の体には目立った傷は見受けられなかった。伝説の異名は伊達ではなかった。普段はのんびりしているがバトルとなると別と違うことだ。

「デモヤラレッツパナシモイヤダカラコンドハコツチガイクヨ！」

先程と同様に直進してきた。だが今度はさつきよりも速くない。十分回避できると思った二匹だったが足が動かなかった。

「!? バクガメス、足元！」

「え？」

硬直した右脚を見るといつの間にか足が凍っていたことに気が付かなかった。気を取られていると正面からのばかりからがクリーンヒット。二匹とも地霊殿に向かって吹き飛ばされた。

「バクガメス！」

「ケンタロス！」

トレーナー二人が二匹に駆けよった。すでにバクガメスもケンタロスも共に満身創痍の状態であった。

「ドウダイ？ ボクノトクイワザノフブキ。キドウリヨクタカイアイテニハユウコウナ
ンダヨ」

ふぶきは基本的には大技である。だが上手くコントロールすることで小技にも変えることができる。巨体の割にクリスタル作りが得意と言っていたのでこういう操作はお手の物だろう。

「バ、バクガメス……動ける、か？」

「俺は……なんとか」

効果抜群の格闘技を受けたケンタロスにはほとんど体力が残っていないかった。だがギブアップをするつもりはさらさらなかった。この先対峙する相手がレジアイスよりも弱い保証はどこにもない。ここで負けたらこの先思いやられると改めて自分に喝を入れた。

「皆……これで決める」

「ああ。最後の全力、見せてやろうぜ」

ケンタロスは足をプルプル震わせてなんとか立ち上がった。横からつついたらすぐにでも倒れそうなほどふらついている。だが倒れるわけにはいかない。前足を皆の前にかざした。

「力を……貸してくれ」

思いに呼応するようにその上に手と手が重なり合った。二人と二匹が手を重ねたと
き光に包まれた。

「オ、イキナリズワツカエルナンテ。サスガキョウダイタチヲオシタダケハアルネ」
倒すことが目的ではないので技が発動するまでじっくりと待っていた。全力と全力のぶつかり合い、それこそがレジアイスの最も好むところであるのでワクワクしながら

待機していた。

「ぶつつけ本番だけど……大丈夫かしら」

「やらかなきや櫻花は守れないでしょう。息を合わせるわよ」

八千慧と潤美は背中を合わせた。そして照準をレジアイスに固定。全てはこの一撃に込める。

「命の鼓動と熱き魂」

「宿る拳に思いを乗せて」

「焦がせ！ 生きとし生けるものを！」

「貫け！ 大いなる力をもって！」

「ダイナミックフルフレイム!!」

「全力無双激烈拳!!」

バクガメスからは巨大な火球、ケンタロスからは拳のオーラのようなもの背後に見えた。勢いよく発射されたそれらは個々では倒すまでには至らないだろう。そう考えた二者は少し軌道を変えて拳に炎を纏わせて炎の拳という合体技として完成した。

「スゴイスゴイ！ ハジメテデココマデデキルノハホントウニスゴイヨ！ オレイニボクノイチバンノワザヲミセテアゲルヨ！」

レジアイスは自分の何倍もの火拳に向かって電気の球を高速で発射した。でんじほ

うという高火力低命中率の技であるがこんなに大きければ外すわけがない。レジアイスも同様に本気で技をくり出した。

「いつけー!!」

炎と電気の高エネルギー同士がぶつかり合う。押したり引いたりで威力は互角である。衝撃が周りにまで影響して背後にある地霊殿がミシミシいつている。少しでも気を抜くと再び吹き飛ばされそうな両者であったが均衡はいつか崩れるものであった。

「ボクトココマデワタリアエルナンテホントウニスゴイネ。デモマダZワザイージーレベルダネ。スキガオオキイヨ」

真正面からぶつかっていたでんじほうだったがレジアイスがS字になるように軌道を変えた。すると見る見るうちに拳が小さくなっていき、終いには相殺と言う形で二つの技が消滅した。

「う、嘘でしょ……」

「ま、負けた」

もうこれ以上戦う力は残っていない。そして戦うつもりもない。完敗だ。

「イヤー、トテモタノシカッタヨ！ ホラキズグスリ」

「あ、ありがとう」

潤美たちはパートナーたちにすごいキズぐすりを与えて体力を全快させた。レジアイスも同じく回復した後口を開いた。口がどこか分からないが。

「キミタチスゴイツカイコナシテタネ。ソノZワザ。デモツカウコトニイシキシスギテ
コウゲキガタンチョウダツタカラソコキヲツケテネ」

「レジアイス……ありがとう優しいね」

「ドウイタシマシテ」

講評を頂いて少し気持ちは楽になったが悔しきは残っていた。こんなので櫻花を守るのか、と。もつともつと強くならないと。そのためにはもつと経験値を積まなければ。特にまだ試合の残っている八千慧たちはチャンスがあった。

「世話になったね。じゃあ私たちはそろそろ地上に戻るね」

「Zリングもありがとうな」

「レジスチルとレジロックにもよろしく」

「またな」

「ウン、ツヨクナツタラマタバトルシヨウネー」

一行は地霊殿を後にして元来た大穴を通って地上に帰還した。結局ウツロイドに関する手がかりはゼロ。だが二組は確実な力を手にした。苦勞と引き換えに手にしたこの力はきつと櫻花救出に一役買ってくれるだろう。ここで八千慧と潤美は別れた。八

千慧は魔理沙の元の旧都チームに。潤美は再び人気のなさそうな土地に赴くこととなった。

「……ハタ迷惑なやつらだったな」

「浮いたときはびっくりしたわね」

「だが気付かれていないようだなによりだ。ところで……計画は順調か？」

「ええ。最終段階に入れたわ。それもこのいい触媒のおかげね。あとはあの方が来ればいつでも計画に移せるわ」

「よし、それじゃあそれまで耐え忍ぶとするか……」

闇は刻一刻と浸潤してきていた……

第二十三話 二日目の夜明け

幻想郷を巻き込んだバトルから一夜が明けた。多くの者は博霊神社に集まり興奮を引きずって宴会に催していた。まだ終わってはいないのに宴をするのに幻想郷住民らしさが出ていた。だが神社で雑魚寝をしている間、休みなく動いている者たちもいた。

「どうかしら藍、見つかったかしら?」

「いえ、あの地獄の妖精の回りそうなどころを隈なく探しましたがありませんでした」

昨日の紅魔館チームのバトルの後、紫たちはクラウンピースを呼びつけた。目的は彼女のパートナーのボーマンダについてであった。異常な強さを誇るその力に少々違和感を感じていたのであった。この世界に呼びつけたのは藍であり、管理者である以上のポケモンがどのくらいの強さになるのかを把握していた。だがたった一週間でタツベイからボーマンダに急速に進化することはないのである。

「そう……でも信じられないわね。そのメガストーンとやはらは持つてこなかったんですよ?」

聞くと道端で綺麗な石とバングルのようなものを拾った途端急激に強くなったという。絵を描いてもらうとそれがメガストーンとメガバングルということにすぐ気が付

いた。カロス地方でそのような物を藍が見たことがあったのである。もちろんパワーバランスが崩れるから持つてこず、ここにはないはずであった。

「はい。考えられるのは……私たちの関与しないポケモンが侵入してきているということでしょう。あの戎璽花のポケモンの類かと」

「そうよねー この結界破るなんて大したものだけ……でもそれだけでこの広い幻想郷を把握できるのかしら？」

「どういうことですか？」

「訳の分からない人妖蠢く幻想郷よ？ 自力で身を潜められる拠点を確認できるとは思えないけど」

「まさか……」

ウツロイドの存在がある以上何者かが不法侵入していることは事実。だが一日たった今でも賢者と式の包囲網を潜り抜けていることを加味すると思えることは一つ。そう、幻想郷の者による裏切りである。

「今まで一体何人が異変を仕掛けたと思っているの？ あの暇人集団の中には不良天人みたいな軽い動機で呼び寄せてみようという考えの者がいてもおかしくないわ。悪気があるうとなかろうとね」

「危機ですね……試合は中断しますか？」

「いえ、このまま続行するわ。バトルのエネルギーに充てられてボロが出るかもしれない」

幸いウツロイドの行方を追っている者がいることを知っている紫はすぐに事が大きくなることはないだろうと考えていた。しかし昨日のように司会も進行しながらはさすがに大変なので咲夜にボタンタッチすることにした。瀟洒な従者だから何とかしてくれるだろう。紫からの無茶振りに多少藍は同情した。

「それじゃあ藍、あなたはメガストーンの探索と怪しいポケモンの捕獲を任命するわ。私はその間裏切り者を調べておくから」

「かしこまりました。お気をつけて」

そう言うとき紫はスキマで移動していった。ただ藍に与えられた任務は少し大きい。手助けが必要だった。

「橙！ いるか？」

「ハイ！ 藍しやま！ お呼びですか？」

藍が手を叩くとどこからともなく藍の式、橙が現れた。橙はにこにこ藍の方に笑顔を向けており藍はその頭をナデナデしながら命じた。

「紫様の命令で怪しい石を探すことになった。手伝つてくれ、その子もな」

「もちろんです！ よろしくね、チヨロネコ！」

「うん！ 私頑張るね〜！」

橙の肩に乗っていたのはチヨロネコ。小柄な橙と比較するとより小さく見える。橙たちは藍に命じられるがままに目標の箇所を駆けていった。手分けして幻想郷中を探すのは長い時間がかかるだろう。張り切っている橙と対照的に藍は溜め息をついていた。

「さて、昨日から一晩経ちましたが皆様いかがでしょうか。本日は八雲紫が不在のため私が審判をすることになってしまいました」

咲夜は数時間ほど前に紫から司会を続行するように命令された。反論する前にスキマを閉じられたのでするしかなかった。その代わり皆に伝えるオーペムを助手につけるといふことなので、細かいことはやってくれるらしい。

「本日最初の試合は霧の湖で行います。霧の湖チームと人里チームは集まって下さい」

昨日までは紫が仕切っていたので出演者を強制送還できたがスキマはないので言葉で伝えるしかなかった。多少時間はかかるが急に呼ばれるときの不満に比べたらマシだろう。

「ふう、それにしてもあなたも大変ね」

「いえ紫様はお忙しいので。私が少しでも力になれば何よりです」

「あら立派ね。紅魔館で雇いたいくらいだわ」

礼儀正しいオーベムについていっついスカウトしてしまう咲夜。働いてくれたら立派な戦力になるだろうと妄想していた。

「あのく咲夜さん。私がいる意味ありますか？」

咲夜の後ろで控えていたのはジャラランガのパートナー紅美鈴。美鈴にとっては朝早くに叩き起こされてややご立腹。あくびしながら咲夜に答えた。

「私だけ働くのが癪だからよ。それにあなたもう出番ないでしょ。その600族の恥と一緒に手伝いなさい」

「ちよつと待て、誰が600族の……」

ジャラランガが勝手にボールから飛び出してきて一言文句を言い咲夜に近づいた。それを制止しようとした美鈴であったが間に合わなそうだったのであちゃーという声を出した。

「はあ？」

「なつ、なんでもありません……」

咲夜の鋭い眼にジャラランガは一目散にボールにとんぼがえりした。天下のドラゴンタイプを一瞥しただけで萎縮させるメイド長。この世界の人間は人間離れしているなど人間でない美鈴たちは思った。

「じゃあ行くわよ」

「はい、分かりました」

咲夜の号令とともに一行は紅魔館の扉を開けた。紅魔館と霧の湖は徒歩三分なので歩いてすぐ到着する。諸々の準備をしていたのでもうすでに対戦相手達は今か今かと待ち構えていた。

「うおー!! ついにアタイの出番だー!!」

「昨日ずっと遊んでたもんね。チルノちゃん」

「ああ、でも今日のアタイは普段の⑨倍強いからな。一緒に頑張ろうな、大ちゃん!」

「だから私たち別のチームだってば」

咲夜たちの耳に最初に入ってきた声は氷の妖精、チルノとその大の仲良しである大妖精であった。二人は今回は敵チーム同士であるがチルノは未だによく分かっている様子であった。

「そうよね、大ちゃんもこっちチームだったら良かったのね。頑張つてねりーダー」

「え? 私がリーダーなの!?!」

スターファイアが大妖精に激励を送るも当の本人は自分がリーダーだとは思って

いなかったようだ。大妖精サイドは人里チームということで一番所縁のある寺子屋の先生に目配せをした。

「慧音先生！ 私なんかよりも先生の方が向いてますって。代わってもらえませんか？」

「ふむ……リーダーか。おい、チルノ。そっちはお前がリーダーなのか？」

「もちろんだ！ アタイが一番強いからな」

クラウンピース同様が一番強い者がリーダーだと勘違いしているようである。だがそれに異を唱える者はいなかった。霧の湖チームに引つ張りたい者がいなかったためである。

「チルノちゃんはこのっちの要だからね」

「ああ、それに私はリーダーって柄じゃないし」

「私も皆さんをサポートする方がしたいです」

順に淡水の人魚わかさぎ姫、超妖怪弾頭河城にとり、そして毘沙門天の弟子寅丸星がチルノたちの仲間である。スターを含めた比較的穏やかなグループに場違いともいえるチルノが存在している。だがそのおかげでまとまりは存外良いものとなっている。チルノがリーダーで文句はなかったが大妖精サイドはまだ決めていなかった。何しろ暗黙の了解で歴史喰いの半獣上白沢慧音が務めるものだと思っていたからだ。

「ならばこちらは大妖精がリーダーだ。よろしく頼むよ」

「ええ!? 無理ですって。私じゃ到底……」

「なあよく考えて見ろ。わかさぎ姫が言ったようにチルノは向こうの要だ。そこを崩せば勝利に近づくのは分かるだろう?」

「で、でも私も私のポケモンもチルノちゃんに勝てるとは思えませんが」

「なに、チルノの考えを読んで私たちに指示をくれればいいだけだ! 何も難しくはない」

「それが難しいんですけど……」

簡単に言うがチルノの考えを読み取るのは並大抵のことではない。馬鹿だから単純と思われるかも知れないが馬鹿と天才は紙一重。常人では思いつかないことを幾度となく起こしている。この前の四季異変が終わった後ももう一度日焼けしてみたいと思ったときがあり、なんとなく神社に向かった。するとそのときまたまたお空と一緒に、焼いてくれと頼んだ。お空もアホなので爆符「ペタフレア」を境内でぶつ放して神社とチルノを消し炭にした。後に霊夢から半殺しにされたのは言うまでもない。

「大ちゃんもリーダーか? これは楽しいな!」

「じゃあ、やってみます……勝てるかどうか分からないですけど」

本当はやりたくはない。だがあんな燃えているチルノの曇った顔を見たくはなかつ

た大妖精は引き受けることにした。

「じゃあ皆さんよろしくお願ひします」

「うん……よろしく」

「何の何の！ 儂らは仲間じゃ。手を取り合っていこうぞ」

「任せろ！ シャキーン！」

ローテンションのルナサ・プリズムリバー、優しく肩を叩く二ツ岩マミゾウ、そしてポーズを決めるも相変わらず無表情の秦こころが大妖精の味方である。

「それではよろしいでしょうか。まずルールの説明からさせていただきます」

「おや？ 昨日と同じ様な形式ではないのかの？」

「ええ、マミゾウさん。八雲紫からの伝言でこのチームはこういう風にしてと頼まれております。そしてそのルールとは……一撃バトルというものです」

「一撃バトル？ 何だそりゃ？」

「その名の通り相手に先に一撃当てた方の勝ちです。攻撃の威力は関係ありません。ですが技同士のぶつかり合いはノーカウントです」

「たとえばかみなりパンチとメガトンキックがぶつかり合ったときはOKということか？」

「そういうことです。今まで以上に守り、素早さが重要視されます」

「面白そうじゃない。でも色々考えないとだね」

昨日も攻撃技を防御技に応用していた者は多くいた。それをルール化してバトルに幅を持たせようというのが紫の目的だろう。

「すぐ終わりそうで迷いますね。誰を選出すればよいのやら……」

「その点についてはですが全員参加との旨です」

「……全員？」

三対三のバトルがいきなり全員参加。しかもタイマンで五回戦うわけではないので混戦になることは間違いなく、どの戦いよりもスピーディーな戦いになると予想された。

「審判はどうなるの？ 咲夜さんが全部頑張るの？」

「いえ、紅魔館のホフゴブリン、美鈴、およびチュパカブラの手を借りて判断を下します。範囲は霧の湖周辺の森とします」

「……え？ 私もですか？」

サラッと自分の名前が呼ばれて驚く美鈴。何も言われていなかったが大丈夫かという考えが過る。おそらくジャラランガも巻き添えだろう。ボールからため息が聞こえた気がした。

「それじゃあ十分後に合図送るから各々好きな位置について下さい」

咲夜の説明が全て終わった後、皆ほとんど森の中に消えて行った。わかさぎ姫は湖の中で彼女のポケモンとともに潜んでいた。そしてその上空には姫のチームメイトがふよふよと浮いていた。

「そこでもいいの？ 目立つちゃうよ」

「ふふん！ アタイはサイキョーだからな。目立つてしまうのも仕方ない！」

森に潜んでいる他のメンバーから見てもすでにバレバレである。真下にすでにポケモンを配置させている。もうすぐ十分が過ぎてしまうので始まると同時にねらいうちされるだろう。分かっているのか分かっていないのか。

「……そろそろね。オーベム、準備はいいかしら？」

「もちろん、いつでも大丈夫です」

オーベムが二チーム全員に聞こえるようにテレパシーを送れるように設定をし、全員がバトルモードに入った。大混戦になると予想されるので緊張が走る。

「それでは！ 霧の湖チームと人里チームの一撃バトルの開始です！」

「早速行くよ！ ラプラス！ アタイたちのサイキョーのぜったいれいど！」

チルノはぜったいれいどをパートナーのラプラスに命じた。その瞬間、湖とその木々が雪と氷で覆われてしまい四季異変時の魔法の森並みの冬の装いをもたらした。

第二十四話 v s ニツ岩マミゾウ

前略。チルノのパートナー、ラプラスがぜったいれいど放って皆絶体絶命。

「ぬお！ こりゃいかん。オオタチ、あなをほるでかわすんじゃ！」

「ミルタンク、ほのおのパンチでガードだ」

「ひゅい!? チルノのやつこつちにも撃ってきやがって。ハスブレロ、みずでつぼう！」

迫り来るこおりの欠片を各々が手持ちのポケモンの技を駆使してガードして凌いだ。霧の湖は氷で覆われて周辺の地面は縮み上がってしまった。浮遊できるポケモン以外の者たちの機動力を削った。⑨だがその強力は本物である。対応できたのは流石幻想郷の猛者と言ったところだが全てのポケモンたちが対処できたわけではなかった。

「な、何が起きた……の？ ねえ、こころ？」

「チルノの方からだろう。先制攻撃とはずる賢い」

最初の犠牲者は人里チームの秦こころとパンプジンのペアである。チルノの攻撃は複数の方向から飛んできており、反応が一瞬遅れたため被弾してしまっていた。こころはこんなポーカーフェイスをしている割にはかなりの脳筋であり攻撃特化かつ瞬間攻撃速度最大にして鍛えていた。だがその代わりスピードは犠牲にしていた。回避する

ことが肝要となるこのルールには一番向いていない人物であった。もしもこころが先制攻撃していたとしたらどうなっていたかは分からないだろう。

「もしかして私の出番これで終わり？ 折角頑張つて練習したのに？」

「ええ、終わりです。こころ、パンプジンをボールに戻してこちらへ来てください」

「そうか……仕方ない」

いつの間にか咲夜がこころの真後ろに控えており彼女たちの失格を告げた。ダメー
ジを少しでも受けるとメイド長がすぐにも飛んでくる。

「では負けた方はこちらでお待ち下さい」

「こころは……そうか紅魔館前か」

先程まで森の中にいたはずなのにいつの間にか館の前まで移動していた。咲夜が能力でこころまで運んでくれたのだろう。こころは用意されていたベンチに腰掛けた。隣には（二応）監視役を務めている美鈴とジャランガがすでに座っていた。

「もう来たのか。早いなこころ」

「まあ仕方ないですよ。チルノさんの攻撃は唐突でしたから。気を落とさないで下さいね」

美鈴がこころたちを宥めた。開始早々脱落は落ち込むかと思いきかけかけていた。

「別に気にしていない」

とは言いつつこの能面の口角は下がり眉間に皺が寄っていた。最強を賭けて、と言っていたしもつと戦いたかったのが本音だろう。だがルールはルールであり、そこを違反するつもりはなさそうである。

「でも私たちが一番最初に負けたのは悔しいな……」

パンプジンがそう言うのと美鈴は目を逸らして指を向こう側に差した。その先にはチルノが高らかに笑っていた。

「あー、実は……パンプジンさんたちだけじゃないんですね。チルノさんの被害者」

湖は冷気ですでに凍り付いているがその中をよく凝視してみると二体の影があった。一方は白く、もう一方は青かった。ぜったいれいどのせいとその着物はカチカチになっていた。だが救助するために氷を溶かして中断するわけにも行かないので彼女たちにはオーベムの力を借りて脱落の宣言を告げた。

「チ、チルノちゃん……私たち味方だよ……？」

「とうるかラプラス……私たちのこと気付いていなかったのかしら」

湖に潜んでいたのは淡水に棲む人魚、わかさぎ姫とその相棒ポケモンであるジュゴンたちであった。姫たちはチームで一番目立つてであろうチルノをエサに近づいてきた敵に不意打ちを喰らわせる魂胆で湖に潜んでいた。しかしチルノたちがいきなりぜったいれいどを放ったおかげで身動きが取れない状況になってしまった。一応ルールとし

て味方側の攻撃はノーカウント扱いされるが実質退場である。

「あれ、わかさぎ姫？ 何してるんだそんなところで」

「チルノちゃん……あなたの攻撃でやられちゃったのよ……」

「あー、私のぜったいれいどに巻き込まれちゃったらしいわね。ごめんなさいね」

ようやく存在に気付いたチルノにわかさぎ姫が話しかけた。だが声は実際にチルノの耳に届いたわけではなく、ラプラスを介してである。ラプラスは微小な音を拾い上げる能力に長けており、わかさぎ姫の声をチルノに届けた。

「おー、それは悪かったな！ アタイが勝ってみせるから安心するんだな」

「そんなことよりも溶かしてほしい……」

「天才のアタイでも難しいなそれは。アタイがほのおタイプだったらできたんだけどな」

「氷の妖精が何を言っているのよ……というかこんな無駄話していいの？」

チルノはチームのリーダーであるため、相手から格好の的になるのが道理である。外の様子を確認できないジユゴンはそれを懸念していた。だが彼女の心配はよそにチルノたちはのんきにお話をしていた。実際湖の周辺には脱落したころたちを除けば誰もいなかった。真っ先に狙われると思われたがそうでもなかった。では他の者たちは一体どこにいるのだろうか……

「ほっほ。僕の相手はお主というわけか」

「狙いはチルノさんでしょう。ならばここを通すわけにはいきませんね」

ぜったいれいどの猛攻が静まった後に湖に真っ先に行こうとした者がいた。それがこの化け狸、ニツ岩マミゾウであった。だがそうなるにあらかじめ読んでいた者もいた。それがこの毘沙門天の代理、寅丸星であった。星は対戦相手が決まった瞬間からマミゾウには注意を払っていた。ぬえからマミゾウのことは知らされており、謀略に長けているとも聞いていた。チルノとの相性は最悪だろう。ここで何としても足止めしなくてはならないと星は鉾を構えた。

「まあまあ、そう焦りなさんな。ポケモンバトルで勝負を決めようではないか」

「ええ。チルノさんのところには行かせません！ 行つて下さい、ライコウ！」

先程まで存在感を消していたが星に呼ばれると近くから突如発生した雷雲とともにいかずちポケモンライコウが現れた。鋭い目つきをしており一切の死角がない。全身からバチチと漏れ出ている電気はライコウ自信の戦意を表していた。

「強そうなライコウじゃの。僕は……このオオタチじゃ！」

マミゾウが指をパチンと鳴らすと足元の地面からひよっこりとどうながポケモン、オオタチが現れた。マミゾウの体を伝い肩にちよこんと乗ったままじつとライコウの方

を見据えていた。星から見て相手のオオタチが恐怖を感じているようには見えなかった。いや、本当は感じているのかもしれないが気持ちが落ち着いている。相当精神面を鍛えられている風を感じ取れた。

「無駄話してもしょうがないからの。オオタチ、まずは小手調べのハイパーボイスじゃ」「ライコウ！ かみなりで貫いて下さい！」

オオタチの口から放射状に出る音の攻撃をライコウ自慢のかみなりでかき消している。ただかみなりは一般ポケモンと伝説のポケモン、その違いは多々あれど大きなところは火力である。相殺なんて甘いところには落ち着かず、オオタチの眼前に雷が迫って来ている。だがそれを予想できなかったマミゾウではなかった。

「あなをほるで行くんじゃ！」

轟音の中でもマミゾウの声をしっかりと聞き取り地面に向かって穴を掘った。ライコウのかみなりは超強力ではあるが相手の姿が見えないほど広範囲の技であることが今回に限り不利に働いてしまった。ヒットしたと思っっているライコウに近づくとオオタチを当人は気づくことができなかった。

「ライコウ！ 地面から……！」

「遅い！」

真下から浮かび上がってくるオオタチの体がライコウに当たった。効果抜群のあな

をほるといえどHP的には10ダメージくらいしか効いていないほど伝説ポケモンの耐久力は伊達ではない。だが今回ばかりはオオタチとマミゾウに軍配が上がった。

「寅丸星、ライコウ。戦闘不能です」

咲夜の声と同時に星とライコウの姿がマミゾウの前から消えた。こころたちと同様に紅魔館前まで移動させられたのだろう。

「ふう……怖かったよ〜!!」

「よく頑張ったの」

マミゾウはオオタチの頭をじっくりと撫でていた。オオタチも内心はビクビクしていたが想いに応えるために気持ちを落ち着けて冷静に対応することができた。その後になって恐怖が押し寄せてきていた。オオタチの心臓がバクバクいつているのが聞こえるくらいの様子だった。オオタチの気持ちが再び落ち着くまでしばらく待つことにした。

「よし、そろそろ大丈夫かの？ 早く大将を討ち取るとするぞ」

「うん！ さつきと同じように地面から忍び寄るんだよね」

「そうじゃ、いかくれぐれも音を立てないように……」

ピチャツ！

「え？」

オオタチの右頬が何かで濡れた。雨？ いや降っていない。しかもこんな局所的に降るわけがない。飛んできた方向を見るとそこには大きな木……の上に誰かが居た。

「お、お前たち！」

「脱落です」

マミゾウがその姿を視認できた瞬間、タイムキーパーによって強制送還されてしまった。今のは威力を弱めたみずでっぼうであり、不意打ちの攻撃であった。オオタチたちがチルノにやろうとしていた忍びの技をまんまとやられてしまった。

「あの化け狸は厄介だったからな。早めに潰せてよかったよ」

木にそびえ立っているのは水平思考の河童、河城にとり。そしてようきポケモンハスブレロだった。実はにとりたちは最初から星たちの近くにおり、もしも星たちが負けたら油断していたところを狙い撃ちする予定だった。マミゾウを厄介視していたのは星だけではなかったということだ。

「なあ、お前もそう思わないか？」

そしてにとりサイドの星を重要視していたのもマミゾウだけではなかった。にとりがどこかに向かつて呼びかけると雪に覆われた大木の陰から対戦相手が愛用しているヴァイオリンとともに出てきた。

「……気付いてたのね」

「この望遠レンズのおかげでね」

首にぶら下げていた双眼鏡で遠くから観察されていたことが筒抜けだったようだ。金髪をなびかせて相棒のロトムとともに騒霊ヴァイオリニスト、ルナサ・プリズムリバーが現れた。弓をにとりに差して鋭い眼を向けた。

「さあ、戦いましょう」

ロトムは体中に電気を帯びており臨戦態勢である。レベル的にもハスブレロの方が下であるのは明白である。さらにでんきタイプは得意としない相手だ。まともに戦えば勝機は見えなかっただろう。

「いいけど……後ろは大丈夫かい？」

「ん？　後ろ……？」

ニヤついたにとりの言葉にルナサとともにロトムが後ろを振り向いた。すると目の前には猪突猛進でポケモンが迫って来ていた。素早いロトムでもさすがにその速度に反応はできずにいた。

第二十五話 残り二人

「やった！ 騒霊を一人倒したわ！」

ルナサの背後から降り注ぐ星の光、スターサファイアが突進してきた。彼女の相棒はガラルギヤロップであり、ロトムの中でクリーンヒットした。にとりの作戦でスターサファイアと組んでおり確実に一人は潰す算段を立てていた。卑怯かもしれないがルール上は何も問題はない。

「ロトム、大丈夫!？」

「……うん。ダメージは全くない」

暁夜の声も聞こえないことから今の攻撃はもしや不発だったのだろうかと考えたロトムだった。しかし手ごたえはしつかりあった。不可解に思っていたが数秒後に謎は解けた。

「あれ？ スター、今の攻撃って何だった？」

「つのドリルよ。普段から一撃必殺なんですよ？ 折角なら使いたいじゃない」

「それでか……いいか、今回はそれは禁止だぞ」

「えー、かっこいいのに……」

にとりの作戦に誤算があったとすれば相手のタイプである。ロトムはでんき・ゴーストタイプであり、ノーマルタイプ技のつのドリルは効果はない。そのため当たった気がしたが判定は無しとなったわけである。

「妖精は一撃必殺が好きなのかしら……？　まあいいわ。やりましょう」

不意打ちは効かなかつたが依然ルナサが不利なことには変わらない。相手は二人、しかも近距離が得意なギャロップと遠距離が得意なハスブレロ。一発当てたら終わりのこのルールではほほほほ詰んでいる。しかしここで逃げると残りのメンバーに被害が及ぶかもしれない。長女であるルナサに逃げの選択肢はなかった。

「へへ、後悔しないことだな」

「ギャロップ、サイコカッター！」

「シャドーボールで迎え撃て！」

圧倒的に不利だが負けられない戦いが始まった。

「そのポケモンってなんていうポケモンなんだ？」

「パンプジンだ。タネばくだんが自慢だぞ」

「もしかしてくさタイプの技か？　それならアタイの方が有利だな！」

「ほほう。氷精が相性を理解しているとは流石じやの」

「ふふん！ アタイは天才だからな！」

「大妖精さんが大変だったって言ってましたよ」

「大ちゃんは大変の次に天才だからな！」

「そういう意味でしょうか……？」

チルノは中々敵が現れなかったためすでに脱落していたところたちと談笑していた。戦場のはずなのになぜかニコニコしている。ルナサたちの戦いが長引いているのか、ミゾウが脱落してから長い時間が経過していた。周りが雪だらけで寒いので、チルノ以外はパンプジンのおにびで皆暖をとっていた。ライコウとオオタチは特に寒さに弱いらしくすでにおねむである。

「ふう、やっとたどり着いた。おい、チルノ！ いるか？」

「ん？ げっ、慧音！」

そこに現れたるは歴史喰いの半獣、上白沢慧音であった。先ほどまでの和やかな雰囲気から一転、ピリツと引き締まった。寺子屋の教師という肩書きも相まってチルノの顔が引きつっていた。

「チルノ……今は試合中だぞ。油断しすぎは命取りになることを重々承知しておきなさい」

「はいはい」

敵にもかかわらずアドバイスを送るのが実に教師らしい。さつきもお喋りしている間に一発お見舞いするチャンスはいくらでもあったがしなかったのは正々堂々が好きだからだろう。にとりたちとは大違いである。

「それではミルタンク、頼むぞ」

「任せて慧音」

ミルタンクは出会って初日に慧音とパートナーになった。本人はバトル好きというわけではないが戦闘経験値は高い。というのもジョウト地方のとあるジムリーダーはとんでもなく強いミルタンクを手持ちに行っているのだがそれは何を隠そうこのミルタンクの妹である。様々なチャレンジャーにトラウマを植え付けるレベルの強さを誇るそのミルタンクの戦術は姉直伝である。

「よし、いつもの頭突きのうらみを晴らすぞ！ ラプラス」

「ただのやつあたりじゃないの。まあ戦うけどね」

一言ツツコミを挟んでからラプラスは息を大きく吸い込んだ。空気を一か所に集約させて目の前の相手に向かってぜったいたいれいどを再び放った。

「ほのおのパンチを……さつきの倍くらいの威力で放つてくれ」

言われた通りにミルタンクは力を込めてほのおのパンチで弾いた。勢いが先ほどよりも上がっておりギリギリ相殺することができた。慧音はラプラスの動きだけで同じ

技、それも強めのものが飛んでくると予想して的確な指示をミルタンクに送った。猛者である上に鋭いコーチが付いていることが難易度を遥かに上げているとラプラスは察した。チルノはそうでもないが。

「おー強いな！ アタイのラプラスと同じくらいだな！」

「ありがとね。でもこのルールではあなたたちの方が有利よ。一発当てさえすればいいからね」

ミルタンクの言う通り遠距離かつ広範囲技を持つチルノたちが断然有利であった。慧音サイドは全て接近技か回復技しか覚えていなかった。普通のバトルでは負けなしかもしれないが今回は勝てる保証はなかった。だから策を講じる必要があった。

「……………ミルタンク、戻れ！」

「どうしたの？ 慧音」

何か思いついた慧音に呼ばれてミルタンクは一旦身を引いた。何やらヒソヒソと話しているようである。

「どうしたんだ？ アレ」

「さあ…………でも何か考えがあるんじゃないかしら」

今攻撃するのも面白くないと考えているチルノたちは一旦休憩に入った。ぜったいれいどは元々一撃必殺技。そうポンポンと連発できるものでもない。じっくりと力を

抜いて次の攻撃に備えた。

「分かったわ。チャンスは一回だけね」

「ああ。タイミングは任せてくれ」

話し合いが終わったようで二人はチルノたちの方を向いた。チルノも相手の本気をようやく察したようでラプラスの背中に乗った。全力の戦いのときはいつも背中に乗って指示を出すのである。

「まずはころがる攻撃だ！」

ミルタンクの十八番、ころがる攻撃が炸裂した。だがミルタンクはラプラスの方向ではなく何故かスケートリンクになった湖の周辺に回るように転がり始めた。

「どこに向かって走っているんだ？ まあいい。あそこにむかつてじわれ！」

「え、ちょ……」

ラプラスは湖の中心にいたため円の端までは最長距離にいる。じわれの攻撃が届くころにはもうその場にはいないため楽に避けることができる。連発しているがことごとく外してしまっている。この被害を最も受けたのは湖の中にいるわかさぎ姫たちである。紙一重で当たってははいないようだが肝が氷よりも冷えていることだろう。そんなことお構いなしに狙いを定めるチルノたちだがふとあることに気付いた。

「何か速くなつてないか？」

「よく気付いたなチルノ。このころがるという攻撃は徐々にスピードとパワーが上がる技なのだ！　しばらくするとチルノたちでも防ぎきれない肉弾戦車が飛んでくるぞ」

もともとミルタンクの居た世界ではこの攻撃に手の付けられないものがほとんどであった。毎ターン威力が倍増していく恐怖が広まったためそのトラウマが轟いたのである。しかしそんなトラウマなど知らないチルノはすぐに次の手を打ち始めた。

「じゃあその前に倒してやる！　ラプラス、ぜったいれいどー！」

今度はぜったいれいどを自分を基準として同心円状に放った。直線上の攻撃ではなく平面での攻撃。しかもたとえジャンプされたとしても十分に引つかかるくらいには高さを持たせた。これで確実にヒットする、そう思っていた。

「いつけえー！！」

「まだ甘いぞ！　ミルタンク、右手のみにほのおのパンチ！」

すでにピンク色の球体にしかなくなっていかなかった体が赤く燃え始めた。その火球はラプラスの冷気を軽く消し飛ばした。もしもぜったいれいどがミルタンクに当たっていたとしてもころがる状態なので決着は着かなかった。だが風圧によってスピードは落ちていたのは明らかだった。それを見越した上で炎の威力もかさましされた。いよいよ止める術はない。

「そろそろ行くぞ、チルノ！　ころがる攻撃！」

「くっ、ここここまでかしら……」

「……ハッ！ そうだラプラス！ 正面に向かってあの技よ！」

「えっ!? でも……」

「早く！ アタイを信じて！」

ラプラスの覚えている技は三つだけでありどの技を指しているのかは分かっていた。チルノが一番のお気に入り技であるが疲労の溜まっている今のラプラスの攻撃程度じゃミルタンクは止まらないことは分かっていた。しかし……

「しっかりつかまってよ！」

ラプラスは自分にはない明るさ、無邪気さを備えているチルノのような人物に憧れがあった。そのような人物に友達になろうぜと言われた瞬間から信じてみたいと思った。チルノに何か考えがあるのならば応えてみせる。ラプラスは全身の力を振り絞って地面につのを突き刺した。

「何?！」

ラプラス直下のリンクは粉々に砕け、水中に潜りこんだ。間一髪、紙一重でころがる攻撃をかかわされた。次に浮かび上がってきたときに当てよう、そう思った瞬間大地が揺らいだ。氷のフィールドが一斉に崩壊してミルタンクが湖に落ちてしまった。

「今よ！ つのドリル!!」

「ミルタンクー！」

チルノお気に入りの技が水中からミルタンクめがけて炸裂した。ミルタンクは空へと放り出されて慧音に抱きかかえられた。まさに一撃必殺であった。

「チルノ、ラプラスたちの勝利です」

暎夜の掛け声が強敵、慧音とミルタンクのバトルの終わりを告げた。申し訳なさそうな顔をするミルタンクをボールに戻してじつくりと労わった。慧音はチルノに近寄った。

「見事だったなお前たち」

「へへ、アタイたちったらサイキョーだからね！」

満面の笑みでピースサインを決めるチルノ。それを保護者の面持ちで眺める慧音とラプラスであった。

「それにしてもつのドリルで地面を叩き割ったのはなぜだ？」

あの状況ならば体全体を使うつのドリルよりもじわれで砕いた方が確実であった。それはラプラスも懸念していたところであった。

「ん〜？ なんとなく氷がなくなりそうだった気がしたから全部割っちゃえ！ つて。あとアタイドリル好きだし」

慧音たちの誤算は二つあった。一つは相手が氷の妖精であるため氷の扱いに手馴れ

ていること。どのくらいで氷が無くなるかの感覚が向こう側はぼちり把握できていた。もう一つはほのおのパンチの威力が強すぎて溶かすスピードを早めてしまったことであった。今までも氷のバトルフィールドで戦ったことはあったが地面を溶かすほどのパワーは持ち合わせていなかった。幻想郷に来てパワーアップしすぎてしまったことが敗因であった。

「そうか。とりあえず私たちはお前たちのバトルを最後まで見させてもらおう。まだ終わったわけではないからな」

慧音は皆が待つ紅魔館前のベンチに座った。慧音の言うとおりまだ試合は終わっていない。はっとしたチルノはラプラスに尋ねた。

「あれ？ 残っているのって誰だ？」

「えーっと、私たちとルナサさんたち。それににとりさんたちとスターサファイアさんたちと……」

「そこまで！ ルナサとロトム、にとりとハスブレロ、そしてスターサファイアとギャロップが脱落です」

「え!？」

遠くで咲夜の声が響いた。誰がアウトになったか把握できるように拡声機能がオーブムによって付けられている。

「ちよつと待つて。アタイたち全員で⑨人であそこにいるのが八人だから……あれ？アタイの優勝？」

「違うでしょ。全員で十人。あと一人いるでしょ。あなたの大親友」

「それって……」

「そう、私だよ。チルノちゃん」

黄緑の髪がチルノの背中を撫でた。いつの間にか背後を取られていた。

第二十六話 幕引き

霧の湖チームと人里チームがお互い一人ずつになる少し前、人里チームは窮地に陥っていた。頼れる慧音がチルノに倒された上に二対一になっていたルナサまでも負けてしまったからである。

「ぐっ、しまった……」

ハスブレロがあまごいをして雨雲を作り出したところをギャロップのとびはねるが炸裂してしまったのである。雲に姿を忍ばせることで動きを悟らせないようにしたのは見事な作戦勝ちであった。ルナサは自分が思った以上に足止めができなかったことを後悔していた。

「よし、それじゃあ早速チルノの加勢に……」

木から降りてきたハスブレロとともににとりが湖の方向に行こうとした瞬間、背後からの突風を感じた。何かが自分たちに向かって近づいてきている。すぐさま構えようとしたが遅かった。その何者かは自分たちの間をすり抜けて立ち去って行った。ダメージを与えられた痕跡が無いと安堵したのも束の間、急激な眠気が二組を襲った。

「ふあ……なんだか、ねむく……」

「ひゅ、ひゅい……zzzz」

四人はその場に倒れこみそのまま寝てしまった。気付いた時には紅魔館のそばのベンチに座らされていた。彼女らは「ねむりごな」を受けてしまったのだ。今回のルールではこの技のように状態異常を引き起こす場合も攻撃技とみなされる。攻撃を与えた側はふきとばして自分の進行方向と逆の方向に噴射して加速していた。その目にも止まらぬ勢いのまま霧の湖に向かって行ったのだった。

「そうか……とうとうアタイたちだけになったんだな。大ちゃん！」

「ええ。こうしてチルノちゃんと一対一で戦うことになるなんて夢にも思わなかったよ」

人里チームのキャプテン、大妖精がチルノと背中合わせで湖の上に浮かんでいた。その下にいるラプラスは一点だけを見つめておりその先に居たのは一匹のポケモンだった。大妖精に遅れて湖に現れたるはちようちよポケモンバタフリー。大妖精のパートナーポケモンである。にとりたちを眠らせたのも突風を巻き起こしたのも全てバタフリーの仕業であった。

「アイツが大ちゃんの相棒ポケモンか？ かつこいいな」

「スピードにはちよつと自信があるんだ」

パワーのチルノとは対照的にスピード特化の大妖精。このルールではスピードが有利に働く上にチルノのラプラスは手負い。バッテリーサイドはほぼ無傷の状態である。大妖精に大いに分があるが果たしてチルノはどう戦うのか……

「じゃあチルノちゃん、そろそろ……」

「そうだな。ギブアップだ」

「ええ、これが最後の勝負に……ええ？」

「「「ええええええええええええええええええええええ!!!!」」」

両チームの声が一致した瞬間だった。バチバチのバトルが始まるかと思いきやあつという間の幕引きだった。しかもそれをチルノが言うとはここにいる誰も、ラプラスでさえ思わなかった。

「ど、どうしてなのチルノちゃん!?!」

「だってアタイ大ちゃんと戦いたくないし。それにアタイの相棒のラプラスもしんどそうだしな。だからこれで終わりだ!」

後半の理由はともかく、大妖精と敵チームならば戦うことも容易に考えられただろうが……そのあたりは流石⑨といったところである。皆呆気にとられているが咲夜は司会をせねばならなかった。

「そ、それではチルノとラプラスの降参ということでこの勝負人里チームの勝利です」

「やったー」

「よくやったなお前たち！」

相手に一撃当てれば勝利の変則的なこのバトルを制したのは大妖精率いる人里チムだった。健闘した慧音はもちろん、尽力できなかったころも大いに（お面で）喜んでいた。

「のう、お主はどうじゃった？」

「私ですか？　そうですね……自分の未熟さを知れる良い機会でした。勝負は楽しめたので負けても後悔はありませんよ」

「なんじゃ、案外さっぱりとしておるの」

「素直に認めることから一歩は始まるので」

マミゾウが合間見えた相手、寅丸星に感想を尋ねるも予想していた悔しげな返答はなかった。さすがは命蓮寺の連中といったところだろうか。

「でも楽しかったな！　大ちゃん！」

「……本当に良かったの？　チルノちゃん」

十分に納得していない者が一人いた。本人も本当に戦いたかったわけではないだろう。ましてや相手が大親友ならばなおのことである。こんな幕引きで本当にいいのか。いや、それよりもチルノを差し置いて自分が進んでいいのだろうかという疑問の方が強

いのだろう。

「何も問題はないぞ！ 大ちゃんはアタイの相棒だからな。アタイは大ちゃんみたいなものだ！」

「……？ そつか、ありがとうチルノちゃん」

よく分からないチルノ理論だがその言葉は大妖精に勇気を与えた。小さなことで悩んでいたのが阿保らしいなと思ひ、チルノの分まで頑張ろうと決意した大妖精だった。二人の固い絆を示す握手で戦いは幕を閉じた。

「さて、次の対戦相手は……」

咲夜が次の対戦チームを確認した。無縁塚チームと神霊廟チームであり、無縁塚チームは咲夜がいるチームだった。自分のチームが出番なので公平を期すために審判をずるわけにはいかない。

「あら、誰かに頼むしかないかしら……」

「問題ないわよ。助かったわ咲夜」

「うわ！ なんだあなたですか」

咲夜の背後から忍び寄ってきたのは自分の仕事を押し付けた八雲紫だった。急に現れるのは心臓に悪い。

「もうすぐあなたの番かと思つてね。今やつていることは藍に一旦任しているわ。じゃあすぐに神霊廟に飛ばすわね」

「え、ちよつと待つ……」

問答無用でスキマの中に飛ばされた。人の話を聞かない奴ばかりの幻想郷とはいえ無茶苦茶であると思つた。ポイツと放り出されたのは神霊廟であつた。そこにはもうすでに自分以外の全てのメンバーが揃つていた。

「遅かつたじゃないか紅魔館のメイドさん」

「もうすでに対戦相手は決まつてますよ」

同じ無縁塚チームの風見幽香、永江衣玖が咲夜に近づいてきた。対戦前だというのに相手の神霊廟チームのルーミアと宮古芳香がその辺で遊びまわつていたり、のんびりとした雰囲気か漂つていた。

「そうですかお待たせしました……つて、え？ 私はいないんですか？」

「そうですね。屠自古さんと芳香さん。メディスンさんと諏訪子さん。そして幽香さんと里乃さんという組み合わせになりました。ついさつき決まつたところですよ」

咲夜がチルノたちの審判をしていた最中にもうすでに集結しており、じつくりと決めてしまつた。間に割り込むこともできないのでこのまま試合は始まる。だったら審判を交わる必要なかつたなと思つた。咲夜だつた。

「うむ。それじゃあ全員来たことだし始めようか！」

「ちよつとその仙人さん。審判は私なんだけど？」

「おお、そうだったな。だが私がやった方がスムーズに進むと思うぞ？」

「まあそうかもしれないけど」

紫に代わつて試合を仕切り始めたのは幻想郷の聖人が一人、豊聡耳神子であった。彼女のホームであるここ神霊廟であるので道理ではあるのだが……ますます自分の立場がなくなる気がした咲夜であった。意外と広い廟内であるので各試合どこの範囲内でするかを決めて試合の準備を始めた。他の者はどの三試合も見れる位置に鎮座しており応援を送っている。

「頑張るのかー」

「気をつけてくださいいね〜」

高い位置からルーミアと衣玖が見下ろしていた。試合のないものは暇なのである。なお今回は普通のルールで行うようである。先に二勝して勝ち越した方のチームの勝利である。

「皆準備はいいかしら？ それじゃあ……」

「精一杯善処したまえ！ 試合開始だ！」

決め台詞を取られて不満な紫を尻目に三試合が一斉にスタートした。

第二十七話 重量級

神靈廟北西部、ここでは小さなスイートポイズン、メデイスン・メランコリーと土着の頂点、洩矢諏訪子が対峙していた。小さいもの同士ではあるがパートナーはお互いにゴリゴリのポケモン、かつ同種のポケモンたちだった。

「そのつるのムチを放さないでね」

「こつちも負けないで！ フシギバナ！」

メデイスンのパートナーであるフシギバナの放ったつるのムチが、諏訪子の相棒のガマゲロゲによってガツチリと掴まれているのが今の状況である。みず・じめんタイプであるガマゲロゲにとつてくさ技は効果抜群甚だしい。当たりそうだったところを間一髪でかわして逆に動きを封じたのである。

「これでそつちは手を出せないでしょ！」

ガマゲロゲは両手が塞がっており思うように攻撃ができない。しかしフシギバナの方はこの状態からでも出せる技を持っている。体にエネルギーを貯めて花の部分が輝き始めた。一気に決着を決めるつもりだろう。

「そんな悠長にしているのか？ 自分のツルをよく見てごらん？」

「ん？！！ 何だこれは!？」

ガマゲロゲの掴んでいるツルの先端が緑色から紫色に変色し始めた。驚いたフシギバナは思わず力を緩めてしまった。

「お前、一体何を……」

フシギバナはその紫色の箇所をはっぱカッターで切断して浸食を妨げた。痛覚はないために体に異変がないか確かめておりメデイスンも心配そうに見ていた。

「大丈夫？ 痛くない？」

「ああ。だが迂闊に触れるのは厄介かもしれん」

フシギバナは相手から気持ち少しだけ距離を取った。こちらの手札の中で搦め手となりうる技は持ち合わせていない。遠距離での攻撃が主体になると思われた。

「来ないのか？ それならこっちから行くぞ！」

「ガマゲロゲ、ハイドロポンプ」

体を大きく膨らませて大量の水が放出された。無駄な方向に水流を分散させていないので貫通力が凄まじい。銃弾のように回転しながら突き進んでおり、当たればひとたまりもないだろう。こうかはいまひとつとはいえもちろんモロに受けるわけにはいかない。

「だいちのちからでガードよ！」

フシギバナが下に向かってパワーを与えると地面が盛り上がり目の前に大きな壁が現れた。放たれたハイドロポンプは壁を破壊しながら前進してくる。本来は相手の真下から攻撃する技であるが、防御にも使えることを他の者のバトルから盗み取り、応用したのである。水流の勢いも段々と弱くなつていき、壁は全て決壊してしまつたがフシギバナに当たつたダメージはほんのわずかであつた。

「ほう……中々やるじゃない」

「この子は強いからね！　次はこっちの番よ！」

メデイスンサイドの次なる攻撃ははっぱカッター。柔軟でしなやかなつるのムチを一刀両断したことから分かるように切れ味は抜群。だが多数の刃がガマゲロゲを襲うも全てマッドショットで打ち落とされた。マシンガンのように発射される泥の弾にはカッターも意味を成さなかつた。互いに有効打のある遠距離技がないと分かると次は接近戦に持ち込む。

「距離を詰めてね」

ガマゲロゲはその巨体を揺らしながらフシギバナとの間合いを詰める。負けじとフシギバナもカエル跳びで近づくので地面がやや揺れた。重量級同士がぶつかり合うところも鈍い音がするのかと知つたメデイスンたちだつた。だがこの状態はメデイスンサイドにとってはよろしくなかつた。

「またかかったな。これでもくらえ!」

「ぐっ! この紫色はまた……?」

最初のときと同じ状況になってしまった。ガマガロゲの手からフシギバナの体へと紫色の色素が浸食していつている。先程のようにはつぱカッターで裁断するわけにもいかないのでどんどん蝕まれて緑色の体に変色してしまった。

「フシギバナー!!」

メデイスンは困惑していた。何をすればいい? どんな指示を出せばいい? しかし頭の中ではまとまらなかった。こういう不測の事態に陥った時に上手く対処できるほど経験は深くなかった。あわあわするメデイスンに振り向きフシギバナはこう言った。

「大丈夫だメデイスン。これは……攻撃じゃない」

「え!? どういう……」

あからさまに変化があるのに何を言っているんだと思った。攻撃じゃない? そんなわけがない。だがフシギバナが嘘、あるいは強がりを言っている風にも思えない。メデイスンには無効化できるジャンルが一つだけあることを思い出した。

「もしかして……その技どくどく?」

フシギバナはくさ・どくタイプ。どくタイプはどくどくを無効化できることを忘れて

いた。メデイスンの質問に諏訪子は口角を少しだけ上げた。

「惜しいね。私たちの技はヘドロウエーブ。触れた相手を痺れさせて動けなくすることができはずなんだけど……普通に動けてるね」

同じカエルモチーフだがタイプの的に忘れがちなのが毒の存在。当然どく技の一つや二つ覚えられる。しかしいくらくどくタイプだからといって変化技のどくどくとは違い普通の攻撃技である。未だピンピンしているのに違和感を感じていた。

「ふふ、私たちね。どくのエキスパートなのよ。特訓の末、ついに全てのどく技を無効化しただけじゃないの」

フシギバナはまだガマガゲログの腕を掴んでいた。決して逃さないように。

「相手のどく技を自分のエネルギーにできたのよ！ フシギバナ、ソーラービーム！」

フシギバナの背中の花が輝き始めた。メデイスンがいつも見ているものよりもさらに明るい。しっかりと相手のヘドロウエーブのエネルギーを吸い取った証拠だろう。照準をガマガゲログに向けて発射準備万端であった。当たれば一撃で飛ぶので勝利を確信していたメデイスンたちだったが、どういうわけか諏訪子たちに焦る様子はどこにもなかった。

「油断した時点で負けなのよ、小さな人形さん。あまごいよ」

「えっ!？」

「からのハイドロポンプ」

二匹の真上に大きな雨雲が立ち込め、局所的豪雨をもたらした。この状況下ではみずタイプのガマゲロゲのパワーは上がる。しかも超至近距離でのハイドロポンプは先程の比にならない。掴んでいた腕はするりとほどかれ、水の爆流がフシギバナを押し出した。そのまま神霊廟まで突っ込んでいき、建物は粉々になってしまった。

「ああー!! 神霊廟が!!」

神子は目を丸くしていた。立派な霊廟が水と蛙の圧力で見るも無残になってしまった。しかしこれ以上はひどくなることはない。早くも決着がついたからだ。

「そこまで! 洩矢諏訪子とガマゲロゲの勝利よ」

「天候を操れるようになってから出直してきなさい」

もしもあの場面にほんばれを使用していたら結果は変わっていたかもしれない。ソーラービームももっと素早く打てるようになるので覚えるべきであった。ことポケモンバトルにおいて天候の重要性を再確認できた試合であった。

「もつと強くなるうね、フシギバナ」

「ああ……そうだな」

パワフルさに自信があつたフシギバナだったが、そのパワーで押し切られてショックだろう。だが負けはしたが今後に向けていいものは得られたので後悔はしていなかつ

なかつたという。ドレディアのはなふぶき、かふんだんご、はたまたはかいこうせんまでもすべて軽々とかわしていたらしい。幽香と仲のいいメデイスンは早速にほんばれの習得を目標にして幽香たちに教えてほしいと頼んだ。

第二十八話 柔の戦い

「まさかお前と戦うとはな」

二チームの決着が付く数分前、神霊廟南西部ではここを根城とする二組が試合を開始しようとしていた。手のひらに電気を集めてバチバチと威嚇をしているのは神の末裔の亡霊、蘇我屠自古であった。彼女の傍らに位置するのはらいでんポケモンエレキブル。腕を高速回転させており、*“やるき”*に満ち満ちているようだ。

「おー、楽しみだな屠自古〜！」

気の抜けた返事をしているのは屠自古の古い仲間、宮古芳香。彼女はキョンシーであるため、普段は主人であるはずの青蛾が身の回りのお世話をしている。今回は青蛾と一緒にではないのでその係はパートナーポケモンであるコジヨンドが務めていた。コジヨンドの長い腕の肘辺りにぶら下がって遊んでいた。

「じゃあこつちもそろそろ始めるぞ」

「いいぞ〜！ ねこだましだー」

「えっ、ちよっ」

緩い掛け声には似つかわしくないコジヨンドの俊敏な動きでエレキブルの眼前に張

り手が炸裂した。戦闘態勢が不完全だったため防御態勢を取れずにモロに受けてしまった。

「おい！ 急すぎるじゃろ！」

「すでに戦いは始まっている。私の攻撃を避けられなかった方が悪い」

コジョンドの正論は正論のため何も言い返せなかった。エレキブルは再び立ち上がり拳を構えた。

「今度はこっちの番だ！ かわらわり！」

エレキブルの手刀がコジョンドを襲った。当たれば脳天が一撃でカチ割れそうなほどの威力だったがひらりとした動きでかわされるた。

「まだまだ！ 連続で打ち続けるんだ！」

しかしコジョンドは汗一つかかずに優雅にかわし続ける。長いリーチと独特の体術がそれを可能にしている。次第にエレキブルの方が汗をかき始めてきたので技を仕掛けるとした。

「じゃあいわなだれよろしく〜！」

「かみなりパンチで打ち落としてやんよ！」

芳香の指示通り空から無数の岩が降り注いできた。スピード、重量どちらも大きく避けるのは至難の業であるためエレキブルは全て叩き落とした。猛烈なラッシュで石片

が塵に変わったただけではなく、電撃が目眩ましになり前進していることに気付かせなかつた。

「ワシの一撃を喰らえ！」

「聞かないよ、おじいさん」

「ワシはまだまだ若いわ！」

まるで攻撃を読んでいたかのように二者の間には黄色の壁が隔たれていた。リフレクターが勢いを殺してコジヨンドへの衝撃はほとんどなかった。エレキブル爺は反撃が来る前に一旦距離を取り、再び態勢を整えた。見た目と違い慎重に勝負を仕掛けるタイプである。

「さて、どうするか……」

「あらあら、頑張っているじゃない芳香」

「ん？ おー、青蛾！」

芳香の背後から声をかけたのはすでに勝負を終えた霍青蛾だった。飼猫のように芳香の顎を撫でて甘やかしていた。従者の様子を確認しに来たのだろう。

「何しに来たんか青蛾。まさか二対一というわけではあるまいな」

「そんな無粋なことしないわよー ただの見学」

「青蛾！ 私頑張るぞー」

「うふふ、期待しているわ」

「芳香、やるよ」

参観日のように後ろをチラチラ気にしているテンションの上がった芳香をコジョンドが制する。集中を切らさないようにしろというメッセージだった。一方屠自古たちはさつきから険しい表情を続けていた。ひらひらとかわされて攻撃が当たらずジリ貧になっていったからだ。使える技も相手に有効打のないものばかりであり、あのスピードに付いて行けるほどの素早く技を繰り返せない。

「スピードがあれば……ん、スピード？ もしかして……」

ふと屠自古にある考えが思い浮かんできた。しかしあからさまにそれを行うと鋭いコジョンドに悟られかねない。それを防ぐには……

「よし、これで行くこう」

芳香たちが青蛾と談笑していたお陰で考えがまとまった。スムーズに行かねば次の手を講じられてしまう。この作戦で仕留める予定であった。エレキブルにその考えを伝える。

「……というわけなんだけどエレキブル、できる？」

「もちろん、ワシとお嬢の仲じゃないか」

どちらも自分に厳しいタイプの電気使い。互いの心情を理解するのに時間はかかる

なかった。十分な信頼を構築していた二者にそんな心配は杞憂だった。

「おい、芳香。向こう何か仕掛けてくるぞ」

「おー、何だろう。楽しみだなー」

「気をつけてね」

芳香たちも再び気を引き締める。リラックスしているが隙がない。コジヨンドを落とすのは至難の業である。

「エレキブル！ 地面に向かってかみなりパンチ！」

エレキブルの足元がパンチのラッシュでどんどん抉れていった。擬似あなをほるで姿が見えなくなつてしまいいつ攻撃されるか分からなかった。

「コジヨンド、大丈夫？」

「ああ、大丈夫。思い通りにはさせない」

コジヨンドはいわなだれを発動させ、縦に一列に積んでその頂点に立った。不安定な足場であるにも関わらず微動だにしていない。体幹とバランス感覚が成せる業である。しかもおまけと言わんばかりにリフレクターまで張っていた。

「私も伊達に鍛練していた訳ではない。当然地面という死角からの攻撃にも注意を払っている」

確かにこうすれば攻撃がコジヨンドに到達する前に岩がガードしてくれる。しかも

もし全ての岩が破壊されたとしてもカウンターで仕留めることもできる。まさに攻防ともに死角がない。だが……

「油断しないでねー。屠自古は強いから」

蘇我屠自古はかの豊郷耳神子に仕える身。なんとしてでも任務を果たす忠義心は相応なものである。そんな屠自古を知っているからこそ芳香はコジヨンドに警告するこ
とができた。

「……そうだな。心に留めておこう」

相手の意見を意固地に聞かないほど聞き分けの悪くないコジヨンドは素直に芳香の言うことを聞いた。そもそもコジヨンドが芳香のパートナーになったのも自分の相棒にしてもいいと思ったからである。最初芳香と勝負を交わしたとき、たかがキョンシーに後れをとることはないと思っていたが一発KOされた。柔にこそ力が宿ると考えていたコジヨンドだったが真反対の剛（関節的な意味）の相手に敗北した。興味を持ったコジヨンドはそれ以来、パートナーになったため命令を無視することはなかった。

「よし、今だ！」

「喰らえー！」

屠自古の掛け声と同時にコジヨンドの足元から破壊音が響いてきた。ここまではコジヨンドの予想通り。しかしここからが予想外だった。

「何!? う、ぐわあああ!!」

コジョンズの誤算は二つあった。一つはそのままかみなりパンチで突っ込んでくると思っていたこと。態々技を変えるのは非効率なので勢いそのまま拳を振りかざすと思っていた。そしてもう一つは繰り出したその技がかみなりパンチではなく、かみなり”だったことである。物理技のかみなりパンチとは違い特殊技のかみなりはリフレクターが意味を成さない。いわなだれを劈き電撃がコジョンズを貫いた。

「!? コジョンズ、上空にちよつといわなだれ」

しかしコジョンズは決して油断をしていなかった。そのおかげで芳香の声がはつきりと聞き取れた。聡明なコジョンズは芳香の言わんとすることが理解できた。なぜ真下ではなく上空なのか。

「流石だ芳香、こういうことだろう!」

「何!?!」

岩山を砕き切ったエレキブルの目の前には宙に浮いた無防備な相手の姿はなかった。浮いていたのは岩の方であり、コジョンズはその岩にしつかり足を着けて反撃体勢を取っていた。上空からでも反撃ができるように指示した芳香が瞬時に判断した。とつさの判断ができるほどの戦闘経験が芳香にもある証拠だった。

「そのままとびひざげりだよー!」

コジヨンドの足元の岩が粉々になる位勢いをつけてエレキブルに跳びかかる。格闘技の最高火力とびびざげり、重力に加えてしっかりと地面を蹴ったそのスピードはテッカニンレベルだろう。今からどんな技を繰り出そうともそもそも発動前に命中してしまふ。芳香たちもこの一撃に全てを賭けた。

「ふっ、バレなくてよかった。まもるで終わりだ！」

ガキーン！

膝が命中した。まもるの障壁に。

「痛っ!! な、何故……」

普段のエレキブルならば当然間に合わなかったはずの防御技。それが間に合ったのは彼の特性にあった。特性はでんきエンジンであり、電気技を浴びることで自身の素早さが上がることをすっかり忘れていた。途中で思い出した屠自古は素早さを上げようと画策していた。しかし素早さを上げようとしていることがコジヨンドにバレてしまふのを防ぐために狙いを資格からの攻撃という風にカモフラージュした。穴を掘りながら自分に電気を纏ってコジヨンド並みに素早くなっていた。これで隠し玉まもるのタイミングを図っており見事に成功させた。

「ぬ……ぬがあああああ!!」

「コジヨンド!!」

「ワ、ワシに何する!! 離れる!」

普段冷静なコジヨンドの魂の叫びが霊廟に轟いた。高火力と引き換えにまもるで返されたダメージで体はボロボロのはずだった。だが勝利への執念はまもるが切れたエレキブルの両腕を掴んだ。ヒラヒラした長い腕は離れようとする腕をガツチリ捕らえて地面に急直下させた。

「エレキブルー!!」

土煙で屠自古の声がかき消された。度重なるバトルのせいで神霊廟は滅茶苦茶になっており誰が立っているか全く見えなかった。しばらくすると影が見えるようになってきたがその姿を見た瞬間結果が分かってしまった。

「……二人ともよくやった。それでこそ神霊廟のメンバーにふさわしいな」

神子は二組どちらともをねぎらった。なぜならばエレキブル、コジヨンドともに倒れてしまっていたからだ。

「紫、この場合は引き分けということでもいいのか?」

「ええ……でもどうしましょう。これじゃあ決着が付かないわね」

無縁塚チーム、神霊廟チームともに一勝一敗一分けであり二回戦にどちらが進むか決められない。ここまで来てじゃんけんというわけにもいかないし。

「それでは私が試合に出ましようか」

もう一度試合を行えば決着はつくと手を上げたのは紅魔館の瀟洒な従者十六夜咲夜であった。急に審判を任されたり任務を奪われたりと振り回されていたのでそろそろバトルに出たくなっていた。

「そうね……ルーミア、やらないかしら？」

「私かー？ いいぞー」

高い所から見物していたルーミアは降りてきて延長戦を始めた。次こそ本当にどちらが進むか決まる。ボロボロの神霊廟で勝利を手にするのは一体どちらのチームなのか……

「あー、引き分けかー。でも青蛾褒めてくれるかな？ ……あれー？ 青蛾どこー？」

勝負が付いた後、芳香は後ろにいるはずの主人を探していた。しかしどこを探しても何故か見当たらない。

「……ゴメンね芳香ちゃん。本当はよしよししてあげたいけど忙しいのよね」

穴抜けの能力で地霊殿近くまで移動していた青蛾。青蛾“一人”は顔に笑みを浮かべて次の企みを行うためとある館に侵入した。……これから起こる異変に向けての作戦会議のため。

第二十九話 カウンター

屠自古と芳香の戦いが引き分けて終わってしまったため、急遽延長戦として咲夜とルーミアが戦うことになった。お互い既にスーパーボールを手にとっており戦う準備は万端だった。

「それでは皆さんこれが最後のバトルです。大いに全力を出してください」

神子の声で場の雰囲気引き締まった。先程までは各地でバトルが行われていたため注意が分散されていたが、今はこの場でしか戦いがないので皆の目が集まっている。もちろんそんなものを気にする二人ではないのだが妙な緊張感が漂う。これで勝敗が喫するのだから。

「じゃあ私から行くのかー、ソーナンスなのかー！」

「ソーナンスウー！」

ルーミアの相棒ポケモンはまんポケモンソーナンス。声高らかに叫びながらルーミアと同じ両手を伸ばしたポーズをとっていた。へ↑このような目をどちらもしており、仲良さそうなのが目に見えた。

「私たちも行きましょうか」

「ああ」

打って変わって咲夜サイド。ソーナンスとは真逆の鋭い目を有しているのはとうじゅんポケモンキリキザン。咲夜の相棒ポケモンであり、様々な咲夜のサポートを手がけてきた。正体を明かせば不利を取られると考えていたので今の今までボールの中にいた。キリキザンは小声で相手に聞こえないように咲夜に囁いた。

「咲夜、アイツはどういうポケモンなのだ?」

「ソーナンスっていうエスパータイプのパケモンよ。カウンター攻撃が得意で向こうから攻撃を仕掛けてくることはないわ」

「なるほど、道理で全然攻撃を仕掛けてこないわけだ」

ソーナンスはまともな攻撃技を覚ええないのが特徴である。物理技を返すカウンター、特殊技を返すミラーコートしか覚えておらず、自分から攻撃を仕掛けられない。しかしその代わりに三倍のダメージを与えられるほどの特訓が施されていた。

「じゃあ少し仕掛けるか」

「そうね、あくのはどうで」

キリキザンは両腕を構えて早速攻撃を繰り出した。冷たくて鋭い波動は真つすぐソーナンスに向かって発射された。エスパータイプのソーナンスにあく技はこうかばつぐんであるが、ソーナンスは一切避けようとしなかった。

「頑張れー、それを弾き返すのだー！」

「ソーナンスッ!!」

軽く放ったはずのあくのはどうだったかはかいこうせんレベルのものになって返ってきた。

「うおっ！」

思わず避けてしまったキリキザンだったが、避けてしまったため神靈廟の地面がゴリゴリに削れてしまった。まともに喰らったら消し炭になると思ったが実際相手の攻撃は自体は喰らうはずがなかった。

「キリキザン、あれミラーコートよ」

「え、ああ。そうか」

あくのはどうは特殊技であり、ソーナンスの放った技はミラーコート。それはエスパータタイプの技でありあくタイプを持つキリキザンにはこうかはないようだ……つまりこのままあくのはどうで攻めればいいわけだが相手のソーナンスには傷一つ付いていない。与えるダメージは微々たるものである上に逆に帰ってきた衝撃波でダメージを与えられる可能性が高い。技自体に効果なくても衝撃波は効果はある。また物理技も同様にカウンターが返ってくるだろう。

「だがこのままでは有効打がないな。どうするか……」

キリキザンの今の覚えてる技はあくのはどう、アイアンヘッド、つるぎのまい、そしてきんぞくおんである。相手が物理型でも特殊型でも対応できるようにこのような技構成にしたがこの相手には通用しなさそうだ。

「！　そうだわキリキザン、あの技を今から覚えることってできるかしら？」

「あの技？　……ああ、確かにあれなら打開できるにはできるが……」

咲夜たちはこの戦いに向けて様々な場合を想定して技を磨いてきた。その中でもどうしても覚えたかったが間に合わなかった技があった。それを習得すれば戦況が一気にひっくり返る。そんなこと今さら言っても後の祭り……とは二人とも思っていないようである。この土壇場の本番で新たに覚えようとしていた。

「大丈夫よ。私を信じて」

咲夜がキリキザンの目をじつと見つめる。出会ってまだ数日しか経っていないがその目からは信頼に足る雰囲気を感じ取れた。元々この鋭い目つきに加えてストイックに修行する性格からあまり周りにはポケモンがいなかった。紅魔館に立ち寄ったとき咲夜にスカウトされて以来さらに磨きがかかった。

「……分かった。どうすればいい？」

キリキザンは咲夜に指示を仰ぎ、何かを呟くと目を丸くした。予想外の答えが返ってきたのだろう。だがそれを到底無理なことだとは思わずに従順に遂行し始める構えを

取った。

「お、向こうが何かし始めるようだぞー」

「ソーナンス！」

作戦会議中隙だらけだったが攻撃技を持っていないためじつと咲夜たちを待っていた。ソーナンスの頭にルーミアは顔に乗せてリラックスしていたが空気が変わったため顔を上げた。ソーナンスもやる気十分である。

「じゃあまずはアイアンヘッド！」

キリキザンの鋭い切っ先と素早い速度がソーナンスの懐に入った。急所に入ったには入ったが痛手にはなっていない。ソーナンスはキリキザンの体を掴み、逃げられなかった。

「カウンターなのかー！」

ソーナンスのゼロ距離カウンターがキリキザンの眼前で放たれたがこれをあえて浴びることにした。みるみる内にHPが減っていき、体力の限界近くにまで来てしまった。しかしこれは咲夜たちの目論見通りだった。

「キリキザン！」

「大丈夫だ！　咲夜。次、どうすればいい？」

だが自分の作戦に無理があったかと負傷しているキリキザンに咄嗟に叫んでしまっ

た咲夜。だが自分のことは気にするなと手を伸ばしていた。この短期間で十分なほどの信頼を得ていた。

十六夜咲夜は悪魔の住む館、紅魔館の完全で瀟洒な従者である。それは周りの者も当然のことながら館内の従者たちもそう思っていた。美鈴や妖精メイドの管理をしながら主であるレミリア・スカーレットとその妹様、フランドール・スカーレットに仕えている。下からは尊敬され、上からは誇りに思われる。それ自体には何の不満もないし、業務も上手くこなせている。しかしその立場は一席だけ、つまり咲夜には同じ立場で話せる相手がいなかったのである。そんな折現れたキリキザンは見事に咲夜と調和した。元々似たもの同士の性格だったのである。

「……そうね。今度はあくのはどう！ 至近距離で」

「ソーナンス、ミラーコートの準備だー」

ソーナンスの反射技は特殊で、攻撃技を自身に浴びることなく跳ね返す正に攻防一体のチート能力持ちである。下手に取り扱おうとバランスが崩壊しかねないということ。藍は言葉を覚えさせるのを止めたのである。また幸運だったのは頭の良くないバカルテットの一人のルーミアの相棒になったことだった。幽々子や神奈子など頭の切れる者と組みそうになったのならば強制送還させる腹積もりであった。ミラーコートの準備を整えてフィニッシュといくつもりだった。

た。先程よりも大きな白い火花がバチバチとぶつかり合った。全力と全力のぶつかり合い。だがさっきのようにすぐには反射しなかった。

「ソ、ソーナンス！」

技に触れた瞬間、ソーナンスは違和感を覚えた。普通の攻撃と何かが違う、それと同じに味わったことのある感覚だった。跳ね返そうにも跳ね返せないあの感じは技こそ違えばカルテットの一人と遊びで戦ったときと同じであった。

「いっつけー！」

メイドという肩書を外し、キリキザンの相棒十六夜咲夜としてのフルパワーを乗せて刃が堅牢なソーナンスの体を十字に切り裂いた。ソーナンスはカウンターを発動することなく頭から倒れこんで決着が付いた。

「そこまでです。勝者は十六夜咲夜、キリキザンたち。すなわち無縁塚チームの勝利です」

神子の声で延長戦が終結した。それと同時に瀕死のキリキザンも倒れこんでしまった。限界の先まで戦っていたから仕方のないことだった。咲夜は傍に近寄り優しく囁いた。

「ありがとうね……私のパートナー」

気を失って聞こえていないキリキザンを労わってボールに戻した。戦いが終わり、至

る所がボロボロになった神靈廟の修復作業をしていると後ろから声が聞こえた。

「なー、咲夜。もしかして最後の技って一撃必殺なのかー？」

「よく分かったわね。そうよ、ハサミギロチンを何とか覚えたのよ。中々覚えられなかったからね」

一撃必殺ハサミギロチン、これを喰らった者はどんなに耐久力が高かろうとも一撃で相手を仕留めることができる。だがその代わり動きが鈍くなるというデメリットとそもそも習得するのがハイレベルすぎるといふ条件がある。今回咲夜は窮地に追い込まれることで強引に覚えるというものだった。もちろん一か八かだったがそうでもしないと勝てないほどの強敵であった。

「チルノがそれっぽい使っていたから分かったのだー」

「あの氷精がおかしいのよ」

一撃必殺しか覚えていないチルノは馬鹿であるがある意味天才である。もしも普通の技を覚えていたとすると……咲夜はゾツとした。

第三十話 勝ち抜きバトル

「うむ。皆素晴らしい戦いだつたな。残念ながら私たちのチームはここで敗退にはなるが」

神霊廟での戦い終了後、神子がメの挨拶に移っていた。威厳たっぷりなその姿、特に肩にはいつの間にかやらふくろうポケモンヨルノズクがいた。ふくろうらしく首を縦方向に傾けており、小柄ながら神子の相棒よろしく重鎮して辺りを監視していた。するどいめを持つヨルノズクがもしも戦っていたならばでんこうせつかの働きを見せていただろう。

「それではそろそろ司会は咲夜に返そうとしよう。これ以上出しゃばるのは領域外だからな」

神子は咲夜に目配せをしてヨルノズクとともに神霊廟の修繕に向かった。もちろん屠自古もお供していたが彼女のエレキブルは永遠亭送りになっているため彼女自身の手であちこち直すことになった。元々の腕力もあるが常時でんじふゆうしているような状態なので力仕事には事欠かなかった。

「それじゃあ別の場所に移動しますか。動ける？ キリキザン」

「ああ……いや、休ませてもらう」
「分かったわ」

そう言うのと咲夜はボールに戻してキリキザンを休ませた。いつ戦闘になるか分からない状況では自らの体力が重要である。ここで無駄に外に出るよりも傷ついた体を労わる方を優先させた。何かあっても咲夜が対処してくれるとキリキザンは信用していたのだった。

「あ、そう言えば時間大丈夫かしら」

予定では三試合のつもりだったが屠自古と芳香の一試合目が引き分けに終わったので四試合になってしまった。そのため時間が伸びてしまい次の試合会場を待ちぼうけさせてしまっていた。咲夜は時間を止めて次の試合場所、命蓮寺へと向かった。

ここは命蓮寺。人も妖怪も等しい世界を目指す聖白蓮が主導となつて運営する宗教組織である。当然ここが舞台ということ、かの聖白蓮をリーダーとする命蓮寺チームが対戦相手の片翼を担っている。

「さて、対戦相手は確か……」

「おー、紅魔館のメイド長。ずいぶん遅かったじゃないか。もうすでに一杯やっている」

「天人の私だから大丈夫だけど下界の者ならとうにぶっ倒れているわよこれ」

咲夜を出迎えたのは小さな百鬼夜行、伊吹萃香。そして非想非非想天の娘、比那名居天子だった。二人は同じ有頂天チームであり、待ち時間の間ずっとお酒を呑んでいた。

「お待たせしました。それでは対戦内容についてなのですが……」

「対戦相手はすでに決めているぞ」

「私と一輪。リリカさんとメルランさん。そして女苑とサグメさんです」

咲夜の隣からそつと現れたのは命蓮寺チームの大黒柱、聖白蓮。そしてその傍らには彼女のパートナーポケモン、めいそうポケモンのチャーレムがいた。鍛え磨かれた精神と集中力は聖の性質とよくマッチしていた。話が円滑に進むように各自で決めてくれているのも流石というところだろう。

「ありがとうございます。ですが今回は少しルールが変わっております……」

「ん？ 何か違うことするの？」

頭の上にこつバメポケモン、スバメを乗せて話したのは命蓮寺チームのミスティア。ローレライであった。今回は対戦しない、というよりも進化前で戦力にならないからと自ら辞退したのだった。つまり暇なのである。

「いえミスティア、それほど大きくは変わらないわ。ただ今までの形式ではなく勝ち抜き戦になるということよ」

「勝ち抜き戦ってどういふことですかー？ あ、遅れました。こんにちはー！」

「こゝん〴〵に〴〵ち〴〵は〴〵ー!!!」

全員の鼓膜がだいばくはつしそうな音量で挨拶したのは命蓮寺チームかつ鳥獣戯楽が一人、幽谷響子だった。そしてその相棒は、そうおんポケモンの名にふさわしいバクオングである。響子の騒音に釣られて命蓮寺までやってきてそのままパートナーになったという経緯がある。彼自身の特性がぼうおんであるため相性はバツチリである。

「う、うるさいわね……」

「あ、悪い悪い。つい張り切っちゃったぜ。ガハハ」

彼も試合には出ないため力が有り余っているのだろう。元気なのは良いことだが、初めてバクオングの声を聴いた咲夜は耳を押さえてクラクラしそうになっていた。

「……説明を続けますよ。勝ち抜き戦というのはその名の通り勝った者はどんどん戦いを続けていくシステムのことです」

今までは三か所に分かれて白星の多い方が二回戦に進めるスタイルだった。しかし前回のよう引き分けになる場合や実力差が大きすぎる場合には些かよろしくない。マンネリを防ぐためにもこの試合に限り試験的に導入するらしい。そう紙に記してあった。

「つまり皆様に決めて頂くのは誰が一番最初に持つてくるのかということですよ。もちろん今からでも変更することは可能です」

「あーなるほどね。もしかしたらいきなり3タテする可能性もあるってわけね」

天子は要石のごとく自分の相棒のメテノの上に乗ってフワフワと話を聞いていた。聞いているだけで自分が戦う気はさらさらないようだ。

「ま、私たちは変更する気はないからさ。こっちは皆の戦いをアテにしながらよろしくやっているよ」

この鬼はそれが目的だったのだろう。天子同様に萃香もこぎかなポケモン、ヨワシ（むれたすがた）に乗って答えていた。地上よりも上空で見物するのが面白いのだろうか。

「私たちも別に構わないわよ。でも最初を誰に行ってもらうかが大事よね……」

最初の戦いで流れが決まると言っても過言ではない。強い者から先に行って速攻終わらせるもよし。はたまた実力が伯仲している者同士を戦わせるも手の一つだろう。順番というのはそれほど大事である。悩んでいると命蓮寺チームから声が上がった。

「聖最初行つてよ。私後で行くからさ」

女苑は聖の肩を持つてそう言った。このチームダントツの実力者は聖であり、彼女たちに任せてくれれば無双できると女苑は確信していた。この後も戦いは控えており、皆

が等しく体力を削られるよりも万全の状態の者が多くいる方がいいと女苑は考えていた。聖もその考えに同意して一番手を担うことになった。

「命蓮寺チームは決まりましたね。それでは有頂天チームの方ですが……」

「私が行くわ」

先程まで悩んでいたが聖が出るとなつてすぐさま名乗り出たのは雲居一輪であった。

「おや、一輪ですか」

「姐さんとは一度ガチで戦つてみたかったですよね」

一輪は腕を振り回してやる気を高めていた。同じ寺の仲間、聖の実力を一番近くで見ている仲間だからこそ挑みたくなっていた。被つていた頭巾を脱ぎ、金の輪を取り出した。聖に向けてそれを突き付けて対戦を申し出た。

「ええ。受けて立ちましょう。一輪」

「それでは聖さんと一輪さんの戦いで了承しました。他の皆さんはこの場から下がってください」

咲夜の指示で他のギャラリーたちが遠くに散る。上に行く者も何名かいた。チーム関係なく談笑しながらワイワイとしていた。あまり緊張感は漂っていないかった。

「いやー、僧侶とその弟子の対決か。どっちが勝つと思う？ 天人よ」

「チーム的には一輪に勝つて欲しいけどやっぱり聖の方じゃない」

「じゃあ私は弟子の方で。当たった方が鯨吞亭の奢りな」

上空では萃香たちが賭けをしていた。勝負ごとにはこういう賭けはつきものである。

「まあ私にとつちやあアテに相応しい試合が見れたら文句はないんだがな」

「言えてるわね。また少し貰おうかしら」

再び呑み始めた二人は置いておき、地上ではバトルが始まろうとしていた。聖の方はもちろんチャーム。堂々とした佇まいはさつきまでの雰囲気を感じた。

「このチャームに対抗できるのはアンタよ！ ゆけっ！ チルタリス！」

一輪のスーパースターから出てきたのはハミングポケモンチルタリス。上空からふわりと舞い降りたその姿は雲山ほどではないが力強さを感じる。しかし相性はバツチリであり、そのコンビネーションは雲山並みと言えよう。羽を大きく広げて臨戦態勢をとる。しかし動じないチャームであった。

「それでは始めて下さい」

「まずはこつちから！ りゆうのはどう！」

「かわしておんがえしです」

暎夜の合図とともに一輪は即行動を起こした。しかし急な反応にも聖たちは柔軟に対応した。りゆうのはどうの軌道を予知して器用に体を動かしてそのまま攻撃モーションに移った。しかしそれは空を飛べる者の特権。宙に浮かんで楽々とチャーム

のパンチを避けた。チャールレムの特性ヨガパワーにより攻撃力はとんでもないことになっていく。何発も喰らってはまともに戦うことはできないだろう。チルタリスたちはすぐさま次の一計を講じた。

「次はしねんのずつきをお願いします」

聖の指示でチャールレムの頭にエネルギーが高まる。サイコパワーで全てを破壊するつもりだろう。身軽なその体で距離を詰め、そのモフモフな体に内部まで貫通する頭突きを叩き込んだ。

「……あれ？ おかしいな」

チャールレムは攻撃したにもかかわらず手ごたえが一切なかった。実は一輪は事前にとある指示を送っていた。

「コットンガード覚えさせていて良かった。さすがチルタリスね」

物理防御をぐぐーんと上げるこの技。並大抵の攻撃ではビクともしない。得意の防御面を上げるために覚えさせた技が功を奏した。もちろん無傷ではないがあつた。チャールレムの攻撃を受けきれないほどではない。チャールレムの攻撃といえど勝負は分からなくなってきた。

「……からですよ姐さん！」

一輪は持っていた金の輪の一方を放り投げてチルタリスの首に入れた。すつぽりと

収まり、目の色が変わった。ここからが本当の勝負といったところだろう。

「いいですね一輪。楽しくなってきました」

聖の構えにシンクロするようにチャールムも構える。攻撃型のチャールムと防御型のチルタリス。この試合を制するのはどちらなのだろうか。

第三十一話 急所と高火力

聖たちは攻めあぐねていた。序盤は高火力で押していけるものだと思っていたがそこは流石聖の門下生。彼女のパワーをよく理解しているからこそ防御面を固めてきた。コットンガードで限界まで防御を高められてしまった。

「どうです姐さん。これで自慢のパワーも聞きませんよ」

「あらあら困ったわね」

見た目はモフモフだが触ってみるとカッチカチになっているチルタリスの羽毛。しねんのずつきも今や蚊に刺された程度の攻撃になっている。これではチルタリスの優勢一方である。

「姐さんを倒せばこっちの勝ちはほぼ確実！ 悪いですけどここで終わらせてもらいますよ」

チルタリスは羽を大きく広げて大きく息を吸った。声を使った技を繰り出すためである。一輪たちはずっと手合わせしたかった聖白蓮を目の前にしてテンションが大きくなっていった。聖に指を差してビシッと決めた。

「うたうー！」

ハミングポケモンよろしくその喉からは美しい音色が響いた。寺中に駆け巡ったその音は眠りを誘発した。上空に浮かんでいたメテノやヨワシ、またそのパートナーたちもねむり状態になり地上に降りてきた。もちろんそれは対戦相手のチャーレムにも届き、瞼はゆつくりと下がっていった。

「そらをとぶでファイニッシュよ!」

かくとうタイプのチャーレムにひこう技は効果抜群である。当たれば一撃でKO間違いないだろう。チルタリスはぐんぐん高く飛ぶ。全力をこの一撃に込めて。

一輪は勝利を確信しており聖の方を見ていなかった。彼女が慌てた表情をしておらず冷静沈着な態度をとっていたことに気付いていなかった。

チルタリスは急降下して痛恨の一撃を叩き込んだ。地面からは土煙が舞い、寺の中央には大きな穴が開いてしまった。

「……一輪。寺の修繕費だって決して安くはないんですよ」

聖は呆れたような怒っているような声色で一輪をたしなめた。もう勝負が終わったとは微塵も思っていない様子だった。違和感を覚えた一輪はちゃんとチルタリスの状況を確認した。土煙が晴れてよく見えるようになるとなんとチルタリスの羽が地面にめり込んでいた。

「え、ちよつとどうしたの?!」

コットンガードで固くしすぎたせい、か繊維と地面がこんがらがってしまい抜けなくなってしまった。しかもその隣には眠った状態に的確に攻撃を当てたはずのチャールムが仁王立ちしていた。

「なんでチャールムが……？」

「一輪。勝ちを確信したときや上手く行っているときにこそ慎重に動くべきですよ」

「な……？」

「チャールム、狙いを定めてしねんのずつきです」

「あいよ」

眠っていたはずのチャールムの口から言葉が発せられた。聖の言う通りしねんのずつきを繰り返した。ヒヤリとしたがガチガチの体だから大丈夫。そう思った刹那、チルトリスの体が宙を舞った。自発的ではないその飛翔に一輪はただ見上げるしかできなかった。

「そこまで。まずは聖さんたちの勝利です」

最初の勝負はチャールムたちの勝ちで収めた。ゆっくりと目を開けたチャールムは息の一つも切らしていなかった。後ろから聖はじっくりと労わっていた。一方一輪はチルトリスをボールに戻して悔しそうな顔をしていた。

「……さすが姐さんですね。敵いませんでした」

「いえいえ、一輪。あなたとチルタリスの強い絆はこの目でしつかりと見させて頂きました。私が言うのも何ですが勝敗よりも大事なものを既に持っていますね」

「姐さん……ありがとうございます！」

一輪はスツキリした顔を浮かべていた。負けはしたものの悔いのない試合だったと胸を張って言えた。チルタリスを永遠亭に送り一輪はその場を後にした。

「あれ？ でもどうしてあのとき負けたんだろう……」

歩いている最中一輪の頭には疑問が浮かんだ。ガツチガチに固めたチルタリスの要塞を如何にして貫いたのか。そして眠り状態になぜならなかったのか。謎が残っていたのが気がかりではあったが後で聞けばいいかと思った。ボールを手に永遠亭にて治療してもらったことにした。

続いて二回戦が始まった。連投して聖とチャームが戦うことになるがその相手は騒霊三姉妹が一人のメルラン・プリズムリバーであった。彼女の目は戦う前から暗くなっていた。ただでさえ強かった一輪を倒した聖にどうやったら太刀打ちできるのかと考えていた。

「これ……私たち無理じゃない？ てつきりり力と戦うと思っていたのに」

「ホントそうだよ。ボクたちじゃすぐやられそうなんだけど」

長女ルナサ・プリズムリバーは普通のロトムをパートナーとしていたが次女の方はウオツシユロトムである。なおリリカはヒートロトムを相棒としておりロトム対決ができると予想していた。しかし現実には化け物並みに強いチャーレムとのマッチとなった。

「しようがない、やれるだけやろうかしら。ハイドロポンプ！」

「ジャンプしてください。チャーレム」

洗濯機の形状をしたウオツシユロトムの体の中央が開き、そこから勢いよく多量の水が放出される。水タイプの技の中でも高火力の部類に入り、当たれば中々のダメージが見込まれた。しかしチャーレムは聖の指示通りその場で跳躍した。軽い体でウオツシユロトムの上空までやって来た。

「そこからびびぎげりです！」

格闘タイプトップクラスの技が今ウオツシユロトム目掛けてかまされようとしていた。先の戦いが尾を引いていないわけもなく、聖たちも短期で決着をつけるのが望ましかった。自身の最高火力であるといびびぎげりを落下の加速度も加味して放った。

「まずい！ 寝っ転がって頂戴！」

メルランの声が間一髪届き、洗濯機が廃品回収に出される寸前にハイドロポンプの弾道は上空を向いた。水と膝の衝突は寸前で相殺されて、両者とも深手は負わなかった。

「一気に決着をつけるわよ。でんじは！」

連戦で消耗しているはずのチャーレムに短期決戦を申し込んだ。真正面から広範囲に渡る電磁波を繰り出して麻痺状態にした。これで機動力を大幅に削ぐことができたので後は狙いを定めるだけである。

「よし！　ちゃんと命中したわね。これで終わりよ、ハイドロ……」

「振り払えますよね、チャーレム？」

メルランがトドメの一撃を決めようとした瞬間、痺れているチャーレムは聖の声に呼応して目つきを鋭くさせた。すると表情が和らぎ固くなっていた筋肉がしなやかに動くようになった。聖との特訓で状態異常を気合で無効化する技術を身に付けたため小手先の技など意味を成さなかった。先程のチルタリスのうたう攻撃を受けたにも関わらずすぐさま動けたのも同様の理由だった。

「マズイわ。ガードを……」

動ければハイドロポンプをかわすことなど容易くそのまま距離を詰めてきた。大技を放った後はスキができやすく、対応がワンテンポ遅れてしまった。

「……チャーレム、そこです。おんがえしで決めてください」

ウオツシユロトムの一部分を示した聖はそこを目掛けて攻撃を指示した。当然最大火力のおんがえしで相手は吹き飛び戦闘不能になった。示した箇所は開閉部分。口ト

ム当人にとっては急所にあたる場所である。聖は相手の急所を見破る能力を有しており、どんなに耐久力に優れている相手や防御面を強固なものにしても一瞬で無に帰してしまう。

「そこまでです。チャールレムの勝利です」

決着は一瞬で付き、聖たちは勝利に王手をかけた。全快の相手をいとも容易く打ちのめしたチャールレムはかなり疲弊していた。

「もー！ 強すぎるよ聖さん」

「残念だったね姉さん。戦いたかったけどね」

理不尽な強さに文句の一つも言いたくなるメルランだった。ボロボロの口トムをボールに戻してトボトボと永遠亭に向かった。聖を倒してリリカと姉妹対決をしたかったところだろうがそれを実現できるほどの実力がなかったことを悔しく思っていた。

「それでは最後にサグメさんとの戦いですが……」

「あ、少しいいですか咲夜さん？」

聖は咲夜に申し出ると既に満身創痍のチャールレムを自身のボールに戻した。今から最後の戦いということなのにどうしたのだろうか。

「私たちはここで辞退させていただきます」

「ええっ!!」

周りの仲間たちがザワついた。ここからということころなのに一体どういう風の吹き回しなのか。聖はボールを優しく労わりながらこう言った。

「チャーレムはもう十分に頑張りました。これ以上無理をさせるのは望む所ではありませんので」

確かに二戦続けて勝利を収めたがその分ダメージは蓄積していた。まひ状態を打ち消したり急所に当てたりするのもも莫大なエネルギーを有する。普段からヨガパワーを溜めておりカロリーを取らない生活をしているチャーレムにとつては厳しいところがあった。それをよく理解している聖だからこそストップをかけておきたかった。

「でも聖がいないと不安だよ私たち」

女苑は聖の裾を引っ張りながら不安そうに見つめていた。しかし聖は微笑んで優しく女苑の頭を撫でた。

「大丈夫です。皆さんならばきつと全力を尽くして良い結果をもたらしてくれるはずですよ。応援しています」

戦いに出る者だけでなく出ない者もチーム一丸となって頑張つてほしいとエールを送った。実際に戦う女苑や戦わない響子も同じくらい士気が上がった。それを高くから眺める二人がいた。

「おー、相手チームは盛り上がってるねー」

「こっちは依然不利だけど大丈夫かしら。こっちは」

「大丈夫さ。月の賢人がいるからね」

呑みも終盤に入ってきておりこっちはこっちで盛り上がっている萃香と天子。もう後がない有頂天チームだが余裕の雰囲気も萃香は出していた。わざわざ戦いをせずに観客側に回ったのはサグメの実力を買っているからである。

「それでは有頂天チームは最後になります。サグメさんお願いします」

「……………」

咲夜の声を無視しているわけではない。彼女の「口に出すと事態を逆転させる程度の能力」という難儀な能力のために迂闊に喋ることができないのである。そんな彼女のモンスターボールから出てきたのは海の化身とも呼ばれるドラゴンポケモン、カイリユールであった。

「バオオオオオー!!」

威圧たつぷりの咆哮が響き渡り、風圧が周辺の瓦礫を吹き飛ばしていた。可愛らしい顔に似つかわしくないその強さは底の見えなさを表していた。一方相手のリリカは相棒のヒートロトム共々ビビり散らしていた。

第三十二話 無言の通じ合い

ヒートロトムはどうすればよいか分からずオロオロしていた。それはパートナーのリリカ・プリズムリバーも同様であった。有効打がないというのもあるが向こうに佇むサグメの威圧感が凄まじい。手のひらで口元を抑えて鋭い目つきでこちらを見ていた。

「と、とにかくやるわよー。 オーバーヒート」

ヒートロトムの最高火力が放たれた。体の中央のレンジが開き、その中から炎の渦が巻き起こり一直線にカイリユーへと向かった。

「……………」

カイリユーはサグメの方をチラリと見ると小さく頷いた。息を整えると口からみずでつぼうを繰り出した。細く貫通力のある水タイプの技は相性的にも良く、オーバーヒートの渦の中心を貫いた。相殺しきれずにみずでつぼうはヒートロトムまで届いた。ほのお・でんきタイプに水技は効果は抜群でありそのまま一発KOとなった。

「口、ロトムー！」

決して低耐久とは言えないロトム。それだけ火力がすさまじいということである。あっさり最終決戦に持ち込まれてしまった。

「へー、強いじゃないのあの月の民たち。何も言わずに指示するなんて悟り妖怪みたい。さぞかし通じ合ってるのね」

上空から天子がカイリユーたちの強さを讃えていた。サグメの考えを言葉を介せず
に受け取ったように見え、深い絆が構築されていると感じた。

「うーん、そうかな？」

だがそれに異議を唱えたのは相棒のメテノ。それにヨワシも首を傾げていた。二匹
には絆というものが感じられていなかったようであった。

「あのカイリユー……」

萃香は妙な違和感を覚えていた。バトルだというのに盛り上がらない感じがあり、実
際酒が進まなかった。サグメとカイリユーとの間に何があったというのか。

疑問は多少残るものの試合は最終局面へと移った。命蓮寺チームのアンカーを務め
るのは最凶最悪の双子の妹、依神女苑。くるりと巻いた縦ロールの髪に豪華な装飾品。
彼女に似つかわしい大きな扇子を持って今試合の舞台へと舞い降りた。

「ふふっ！　とうとう私の出番と言う訳ね。待ちくたびれたわ」

女苑はセリフと共に空高くゴージャスボールを放り投げた。ボールの中から火花と
纏って出てきたのはかみなりポケモンサンダース。静電気で辺りからバリバリとい
う音が聞こえていた。

「さあ、オレのスピードについて来れるか！」

「でんこうせっか！」

サンダースの姿が一瞬にして消えたように見えた。素早さに自信があるようでも止まらぬ速さである。カイリユーは目をあちこちにやるが全く捉えきれず目を回していた。

「喰らえ！」

カイリユーのみぞおちにクリーンヒット、急所に当たった。技自体は低威力だが片膝をつかせることができた。その隙を逃すことなくサンダースは立て続けにミサイルぱりを撃って攻撃を続けた。カイリユーは抵抗するためにみずでっぼうを放ち続けた。何発も放たれる両者の攻撃は長く続いていた。その間カイリユーはモヤモヤした思いにずつと駆られていた。

(このままじゃ勝てない……サグメさん、助けて)

後ろにいるサグメにヘルプを求めるもののサグメは微動だにしていなかった。これまでともに会話をしたことがなく意思疎通というものができていなかった。先程のみずでっぼうの攻撃もカイリユー自身で判断したものだ。何が悪かったのだろうか。そんな迷いがカイリユーの中に生じていた。迷いがあると集中はできずみずでっぼうの威力はミサイルぱりに打ち負けてカイリユーは吹き飛んでしまった。飛ばされなが

らサグメとの出会いを思い出していた。

「うーん、ここは……幻想郷ってところかな？」

カイリユーが目を覚ますと見知らぬ場所に連れられていた。たしか藍から教えられて幻想郷という場所にやって来たことは覚えている。しかし聞いていた温和な雰囲気とは違い冷たい様相が醸し出されていた。それもそのはず、今現在カイリユーの居る地点は月の都であった。穢れのない空気はかつて居た世界とは異次元も異次元であり全く慣れない。さらに辺りには誰も何もおらずもの悲しい雰囲気があった。

「……聞いていたのと違うけど本当に大丈夫かな？」

見た目通り寂しがりなカイリユーはポツンと佇みながら不安を感じていた。このまま誰とも会えなかったらどうしよう。折角新たな出会いを求めて新世界に飛び込んでみたというのにこのままでは何のために。そう考えていると背後から人の気配を感じた。振り返ってみるとそこには銀髪に片翼の女の人があった。紫色の服に奇妙なスカートを履いておりこちらに向かって歩いてきた。こんな何もない空間にわざわざやって来たのは自分が目当てなのだろう。そう解釈したカイリユーは近づいて事のあらまを話した後自分からゲツトされにいった。そのくらいサグメは女神に見えたのだった。

「サグメさん明日ついにバトルだからちよつと練習しようよ」

カイリユーがそう申し出るもののサグメは全然喋らず無口だった。何も言わずカイリユーが自主練習しているのをただじっと見ているだけであり、二人の間にコミュニケーションというものは無かった。だがそれを責めるほどカイリユーは気が強くなかった。むしろ自分に何か至らぬところがあつたのではないかと考えてしまうタイプだった。そうして満足に絆が繋げないと感じながら今日に至る。

「あら、勝負あつたかしらね」

カイリユーの大きな体が宙を舞う。圧倒的なサンダースのスピード。それに何故か自信なげなカイリユーの力も弱りつつある中、天子たちには勝敗を嗅したように見えた。

「いや、まだまだだな」

しかし葦香だけは別の人物に着目しており勝負の行方はまだ分からないことを予感していた。

(サグメさん……ゴメンね)

地面に叩きつけられて終わりと思つたカイリユーだったが柔らかなものに包まれた感触があつた。後ろを見るとパートナーであるサグメが両腕で体をがちりと抱きかかえていた。そして耳元で何かが囁かれた。

「ゴメ、ンね……カイリユー」

初めて聞いたサグメの声はか細く優しい声だった。しかしそれと同時に安心する声だった。初めて聞く声に驚きつつ、カイリユーの体はゆっくりと地上に下ろされた。

「ど、どうし……！」

「ポケモンと……どう触れ合って、いいのか……」

分からない。そう言いたかったのだろう。なぜ今まで話してくれなかったのかという疑問に答えてくれた。人間や妖怪、また神様にも色々な種類がいる。未知のポケモンという生物にグイグイいける者やいけない者もいる。カイリユーはそれほど恐れられた経験がなかったため自身もどう接していいのか分からなかったのであった。しかしお互いがお互いを気にかけていたのは事実だった。

「私の能力が足を引っ張って、ゴメン」

「き、気にしなくていいよ！ ボクも配慮が足りなかったし」

サグメの「口に出すと事態を逆転させる程度の能力」についてカイリユーは初耳だった。ただ無口なだけだと思っていた。しかしこうしてやむにやまれぬ状況があったため責める気は一切なかった。むしろこうしてようやく本音を出してくれたことに嬉しく思っていた。気付けばこの人のためにも勝負は負けられない気持ちが強くなっていた。

「あらー！ まだやる気？ 早めにリタイアしてもいいのよ」

「おいおい、オレはまだまだ準備運動中だぞ。おりゃー！」

起き上がったカイリユーに女苑たちはけしかけた。まだ試合は中断されていないのでこの間にサンダースはふるいたてるを使い攻撃力を上げていた。

「……そうではない」

「ボクたちの渾身の力を見せてやる！」

小さい声ながらサグメは口に出した。出した瞬間その運命は逆転する。まだまだ試合は続くという言葉を逆転させた。

「へえー、見せてもらおうじゃないの！ サンダース、10まんボルト！」

「……こつちも10まんボルト」

ようやくサグメの指示のもとカイリユーも10まんボルトを放った。激しい稲妻がぶつかり合い、威力は互角に見えたが若干カイリユーの方が押していた。レベルが段違いのポケモンであることを自覚させられていた。

「そうだわ！ サンダース、攻撃止め！」

「え？」

いきなりの指示に戸惑ったサンダースに10まんボルトが直撃した。半減とはいえないかなりのダメージになると思われ、カイリユーはガッツポーズを取った。しかし煙の中

から現れたサンダースは先程よりもスッキリした顔をして出てきた。

「こっちのサンダースの特性はちくでんなのよ！ だから意味ないってわけ」

電気技を受けると体力が回復する特性ちくでんを持つていたことを本人はすっかり忘れていた。完全回復したサンダースはさらに素早さに磨きがかかってしまった。

「カイリユー！ オレはもう誰にも止められないぞ！」

残像すら見えないほどの速さにでんこうせつかの加速度も合わせて飛び回った。ぶつかりながら着実にダメージを与えていた。長引けば長引くほど不利になった。カイリユーは再びサグメの方を向いた。先程までは意図が分からなかった彼女だったが今度は何故かすぐさま理解できた。

「……分かった！」

そう言うときカイリユーは目を閉じた。観念したわけではなく狙いを定めていた。サグメの指示を聞き逃さないように。

「これで終わりだ——！」

サンダースはありつたけの力で10まんボルトを身に纏い懐に潜り込もうとした。

パァン！

「今だ！ はかいこうせん!!」

サグメの手の叩く音を合図に目を見開き、はかいこうせんを叩き込んだ。正面には予

想通りサンダースがおり、モロに攻撃が当たった。サンダースは遠く吹き飛ばされ決着はついてしまった。勝者は有頂天チーム。結果的にサグメたちが不戦勝もあったとはいえ3タテした。

「ああ……私のサンダースが」

女苑は肩をガツクリとさせてしまった。響子がポンポンと肩を叩き慰めていた。そして勝者側も肩の荷が下りたのかグテツとしていた。

「……ありがとう」

サグメはボールにカイリユを戻した。まだまだ勝負は続くという事態を見事逆転させて勝利をつかみ取った。だが彼女にとってそれよりも嬉しかったのはカイリユとの絆をちゃんと繋げられたことであった。後で祝ってくれた萃香たちに上手く返せなかった不器用なサグメだったがその心は温かかった。

番外編4 マフオクシーとカロス地方の師匠

話は一日前に遡る。月の兎、鈴仙・優曇華院・イナバは相棒のエースバースンとともに山中を駆け回っていた。その目的はマフオクシーの捜索であった。マフオクシーは鈴仙と戦った相手である純狐のパートナーであり、今何故か行方不明となっている。仕方なく彼女を探す羽目になったのだがそれに着いてきた者がもう一組いた。

「でも全然手がかりがないのよね……とりあえず地獄にでも行きましようか」

動かない大図書館、パチュリー・ノーレッジだった。彼女は暇だからという理由で供することになり、歩くと喘息が悪化するためふよふよと浮いていた。同様に彼女の傍に居るのはムウマージである。魔女っぽいという理由でパチュリーは気に入ったらしい。灼熱地獄に向かっていたのはマフオクシーがほのおタイプという安直な理由のためであった。

「それにしてもあなたとマフオクシーに繋がりがあつたのは驚きね」

「ああ、俺もまさかここで先輩と会えるとはな。先輩に勝てたのは嬉しいけど……どこ行つたんだらうな」

誰にも告げずに消えてしまったのをパートナーである純狐はもとより、後輩である

エースバーンも気にかけていた。不安に思いながら歩いているとエースバーンは突如足を止めた。キヨロキヨロと辺りを見回し、彼の目は遠くにあった洞窟を捉えた。

「あそこ……何か変だな」

「変？ もしかしてあそこにマフォクシーがいるの？」

「いや、多分いないかも、だけど……」

歯切れの悪い返事だった。先輩の気配は感じなかったものの、エースバーンはどこか違和感を覚えていた。一行は怪しみながらもその洞窟に近づくと何もなければずなのに見えない何かにぶつかった。

「痛っ！ 何だこれ？」

「ふむ……境界かしら。それも随分と高度な構造式でできているわね」

魔法使いであるパチュリーには見ただけで容易に障壁の正体が分かった。触っただけでその複雑さを理解できる彼女はそのレベルに感心していた。この洞窟周辺には見たところ何も無い。だがこんな辺鄙なところにおあつらえ向きに何かを隠そうとしている。それこそ中に重要なものがあるという証拠であった。早速パチュリーは日符“ロイヤルフレア”を放ち境界を破ろうとした。

「うわっ！ ちよつとパチュリー、攻撃するなら先に言つてよ」

隣にいたムウマージが驚いた顔をしていた。超高火力が顔の真横から放たれたら無

理もない。白い炎が洞窟自体を焼き尽くしてしまわないかと心配していたがその心配は逆の結果になった。

「これで……あれ!？」

「……どうしましよ」

消し炭の大地が現れるかと思いきや洞窟の周辺だけ全くの無傷だった。決して手加減したわけではないことからかなりの防御力があると理解できた。

「ねえエースバーン。本当にあそこにいるのよね？」

「……!? 先輩かどうか分からないけど誰かいるぞ!」

「えっ!? ああ、本当ね。強い力を感じるわ……」

間違いなく先程の高火力のせいだろう。エースバーンとムウマージは洞窟の奥からただならぬオーラを感じていた。住処をいきなり荒らされそうになって怒っているのかもしれない。これはやらかしたと二匹は冷や汗を流していた。

「鈴仙、ここは止めておこう。どんな目に遭うか分からないぞ」

「そうね。パチュリーもここから離れて……」

二匹が強大な力を感じて逃げようとしたその瞬間、背後の洞窟から地響きが聞こえた。不安になる揺れの音とともに何かの声が聞こえた。

『こちらに来なさい。マフオクシーの弟子たちよ』

その声は透明という言葉では言い表せないほど澄んだ声だった。何の混じりけもない純粹な声。だからこそ神々しすぎて恐怖心が逆に出てきた。なおのことあの場所に行きたくはなかったが聞き逃せない言葉を漏らしていた。

「マフォクシー、いるの!？」

純狐は誰よりも速く振り向いた。大切な相棒の手掛かりがあるかもしれないと知り、すぐさま駆け出した。

「あ、危な……あれ？」

見えない壁に激突するかと思いきや純狐は何の障害もなく駆け抜けていった。さっきは物凄いパワーをもつてしても通れなかったはずなので不審に思っただけで触つてみた。するとそこにあつたはずの障壁がいつの間にか消えていた。

「どうするの?」

「どうするって……行くしかないでしょう。純狐さんを追いかけないとですし」

皆恐怖心はある。しかし今回の目的であるマフォクシーを見つげるためにはこの洞窟に飛び込むしかない。深呼吸して気持ちを整え、いざ入っていくことにした。

「何かしらこれ。こんな景色見たことないわね」

「俺の地元みたいだな」

洞窟内は鉱石の影響かキラキラと光っていた。エースバーンはガラル地方の第二鉱山の環境と似ていたことから馴染み深く感じていた。足音がカツンカツンと反響する静かな空間に誰かがいるとは思えない。しかし確かにあの受け取ったテレパシーは本物だった。皆何も言わずコツコツと歩き進んでいた。

「それにしても純狐さんはどこに行ったのでしょうか……？ あ、あの姿は」

金髪ロングにナイスバディのあの後ろ姿は間違いなく純狐であった。遠くから見えたその姿に皆早足になって近づいた。しかし三丁歩くとその歩みは止まった。純狐の目の前に大きな生物がいることが分かったからだ。

「じゅ、純狐さん！ 大丈夫で……！」

身の心配を案じた鈴仙が彼女の元に駆けつけようと声をかけた。その言葉に気付いたように純狐は後ろを振り向いた。

「あらうどんちゃん。ごめんなさいね、つつい先走っちゃって」

「い、いえ……それよりも大丈夫ですか？」

目の前の生物の体長は軽く3mはあるだろう。おそらくポケモンだがそのオーラは桁違いだった。体が青く、また鋭い目つきをしており、そんな謎のポケモンに何かされていないか心配だった。

「ん？ ああこのゼルネアスのこと？ 大丈夫よ。マフオクシーのこと聞いていただけ

だから」

せいめいポケモン、ゼルネアス。フェアリータイプの伝説のポケモンであり、永遠の命を分け与えると言われている。そんなポケモンがどうしてこんな場所にいるのだろうか。またマフォクシーとの関係はどのようなかなど皆頭を悩ませているとそのポケモンは話し始めた。

「恐れないでよい。人間どもよ」

たった二言発しただけだが辺りは一気に緊張感が増した。住処を荒らされたことを怒ってはいないようだが圧倒的なそのプレッシャーに鈴仙たちはつい後ずさりしてしまっていた。なお一歩も動じていなかったのは純狐。これが6ボスの威厳とでもいうのだろうか。

「私はゼルネアス。この地にたまたま流れ着いただけのただのポケモンである」

ただのポケモンがこれほどまでの存在感を放つわけがない。今のところ敵対心はなさそうだがもしも戦うとなるならば、束になって戦っても歯が立たないほどの実力者なのは明白だった。

「そ、それでゼルネアスさん。マフォクシーのことを知っているみたいでしたけど……？」

「あ、それについては私から。聞いた限りだと大丈夫そうよ」

ここに来る前に純狐はゼルネアスと喋っていたらしく、鈴仙たちの聞きたいことを既に聞いてくれていた。結論から言うと純狐たちが来る前にやはりマフオクシーも来ていたようだった。マフオクシーがいるかもしれないというエースバーンの予感半分当たっていたのだった。

「じゃあどこに行つたか分かりますか？」

「さあ……私が居場所を尋ねる前に走り去ってしまったからな。だが方角はあちらだな」

ゼルネアスは首を北東の方角に向けた。その方向は玄武の沢の方角であり、ほのおタイプのマフオクシーが向かうには不利な場所であった。しかし今は手掛かりがそれしかなかった。

「なるほど、ありがとうございます」

「礼には及ばん。私も行方が気になつていたところだったからな。お主たちが来てくれて助かった」

情報を与えてくれたゼルネアスには感謝するところだが、それよりもどうしても気になる場所があった。

「ゼルネアス。アンタとマフオクシーの関係は？　あとどうしてエースバーンが彼女の弟子というか後輩だと分かつたのかしら？」

一番聞きかかったことをパチュリーが聞いてくれた。なぜマフォクシーのことを知っていたのか。そしてなぜ洞窟の奥から自分たちのことを理解していたのか。その答えによって行動が変わってくる。もしも敵ならば腹を括らなければならないからだ。

「まあ大方予想は付いているけどな」

その返答をしたのはエースバーン。あのしつかり者のマフォクシーが用件も告げずにどこかへ行くなど考えられない。しかし現実こうなっているのは昔自分に話してくれたとある存在が関与していると考えるのが妥当だった。

「先輩の師匠なんですよ。カロス地方で先輩に無茶苦茶な修行をつけたつていう」

エースバーンの知る中で一番のポケモンはマフォクシーだった。しかしこうして直接会おうことで確信が持てた。この目の前にいるポケモンこそ昔マフォクシーが言っていた先輩の師匠だと。それならばマフォクシー経由でエースバーンのことを知られているのも道理だった。

「ああ、その通りだ。私はあの子がフォッコの頃からの知り合いだね。色々と特訓を付けたものだ」

「やつぱり……色々聞きたいところだがまずは先輩の行方が気になる。行くぞ皆」

エースバーンはゼルネアスにこれ以上聞くことはなく、洞窟から出ようとした。皆はいきなりのごとでびっくりしたがひとまず出ることにした。

「いいの？ エースバーン。先輩の師匠なんでしょ？」

「ああ。関係も手掛かりも分かったし長居する必要もないからな」

「……それだけかしら？」

皆巨大なオーラから抜け出せてホツとしているところだがそれに待ったをかけた人物がいた。パチュリーだった。パチュリーはエースバーンをじっと見つめていた。まるで心の内を見透かされているように。

「何が言いたい？」

「あの伝説のポケモンをどこまで信じられるかってことよ」

確かに今の話のどこまでが本当かは分からない。マフオクシーが本当に玄武の沢に向かったのか。いやそもそも本当にマフオクシーの師匠なのか。鵜呑みにして判断するのは危険ということはパチュリーはよく分かっていた。もちろんそれはエースバーンも同様だった。

「俺も丸つきり信じているわけじゃないけどよ。でもあの場にいってもしも戦闘になったらまず間違いなくやられてしまうだろうよ」

「……私たちが弱いつてことかしら？」

「先輩以上の実力者なのは事実だ。ならば勝てないだろうよ」

パチュリーも負けじと応戦する。両者のにらみ合いを傍で見ていた鈴仙は一人アワアワしていた。何とか諫めなければ……

「ま、まあまあ二人とも落ち着いて……」

「そうね。判断は賢明だったと思うわ」

「え？」

喧嘩になるかと思いきや二人とも冷静だった。パチュリーも激昂せずに淡々と受け答えをした。

「それに俺の信じた先輩を信じてみたいってワガママもあるけどな」

「そんなところよね。さ、早速探しに行きましょう」

一人でドキドキしていたのがバカみたいに鈴仙は思っていた。このメンバーは一癖も二癖もあつてまとめるのが大変だと改めて感じた。

「……不思議な人間、いや妖怪たちだったな。エースバーン……弟子の弟子、か」

何かを思い洞窟を見上げる。何も見えない空間に今後の流れを記してみる。戸惑い、躊躇い。無いと言えばウソにはなるがもはや止めることはできない。そんなことを考

えているとテレパシーが飛んできた。

『もしもし、聞こえますか。準備は完了しました。いつでも大丈夫です』
「……分かった。すぐ、向かう」

崩壊の鐘の音はすぐそこまで迫って来ていた……

第三十三話 公平なバトル

命蓮寺チームと有頂天チームの戦いの最中、咲夜は紫から渡された進行表を確認していた。表には対戦する相手チームとそのメンバー及び相棒ポケモンも記載されている。それを踏まえて咲夜はこう呟いた。

「これ……一方的なりんちね」

相手のメンツがメンツなためシングルバトルでもダブルバトルでも一瞬でケリがついてしまう。勝ち抜き勝負ならなおのこと三縦を決めてしまえばそうであった。大丈夫なのかと不安に思いながら対戦表を読んでいくと下欄に対戦方法が書かれていた。

「? 何かしらこの勝負方法。ねえキリキザン、知っているかしら」

「いや、俺も知らないな。何だこのバトル方式」

詳しい説明は書かれているがあまりピンとこないものばかりだった。キリキザンが知らないとなると別の地方独特のルールなのかもしれない。びっしりと書かれているため説明は可能ではあるため問題はない。ルールを前もって頭に入れていた場合は恙なく進行していた。

「さてそろそろ次の会場に移りますか」

咲夜はキリキザンとともに次なる舞台である灼熱地獄跡に向かった。名前に恥じないほどの暑さに二人とも汗がほとばしる。特にキリキザンのはがねタイプであるためこの暑さは堪えており、ボールに戻って退避していた。

「ここには確か妹様と……」

「あ、来た来た！ もー咲夜遅いよー！」

核融合炉の遠くから七色にキラキラ光る羽を携え、手を振って現れたのは悪魔の妹、フランドール・スカーレット。見た目は完全に幼女だが495年幽閉されるほどの問題児である。ありとあらゆるものを破壊する程度の能力を有しているが今回は参加することが可能になった。

「申し訳ございません妹様。少々手間取りまして」

「咲夜とも戦いたいんだからね！ 勝手に負けるのは許さないわよ！」

「ありがたく存じます」

本当はフランドールの参加はレミリアに止められていた。いつ能力が行使されてしまうかわからないからだ。しかしフランドールの相棒ポケモンの説得により参加することが認められた。実際そのポケモンと一緒に一週間ほど暮らしていたが経過は良好だった。

「咲夜さん、どうして妹様と別のチームなんですかあ……？」

「私に言われても知らないわよ。こあ」

咲夜の隣から目をウルウルさせながら擦り寄ってきたのは、咲夜と同じくレミアとフランに仕えている小悪魔だった。いつもはキラキラと輝く綺麗な赤髪も心なしかへなつとしていた。それもそのはず、小悪魔は地霊殿チームに属しているのだが対戦相手である灼熱地獄チームのメンツがヤバいからだ。

「我の実力を見ていたくだされ太子様！」

「ねえフラン、私ルナと戦いたいなー」

「ねえお燐、私の相棒ポケモンって何タイプだっけ？」

「どこからどう見てもほのおとひこうタイプでしょ」

このチームには他のチームとは違いリーダーは存在しておらず、各々好き勝手にしている。上空を差して声高らかに宣言している物部布都。フランの周りをクルクル旋回しているサニーミルク。霊鳥路空にポケモンのタイプ相性についてもう一度教えている火焰猫燐という濃いメンツだった。なお、藤原妹紅は相手チームの蓬莱山輝夜と殴り合いの喧嘩をしていた。地霊殿チームもまた自由にしていた。

「はあ……スミマセン妹様。皆の注意を引いてもらってもよろしいでしょうか」

「うん、いいよー」

そう言っ取り出したのはフランがいつも所持している棒状の物体。おそらく禁忌

『レーヴァテイン』を放とうとしているのだろうがそんなもの放てば核融合炉が爆発してしまう。

「ポケモンに頼んでください」

「チエー、まあいいや。出ておいで、ビクティニ！」

フランは口を尖らせながらもポケットの中からボールを取り出した。深紅に輝くプレシヤスボールから出てきたのはしよりりポケモンビクティニであった。40cmほどの小さいサイズであり頭の上にオレンジ色のVの字が輝いていた。

「んー？ どうしたのフラン？」

「ちよつとらいげき打ってくれない？ もちろん当てないでね」

「分かったー」

特性しよりのほしで命中率が上がっているためうっかり当ててしまうことがないように気を付けた。青く光るらいげきがこの大地に突き刺さり、皆の注意を一斉にフランとビクティニの方に向けることができた。

「皆さん、そろそろ試合の開始のお時間です」

「ちよつとフラン！ 核融合炉に刺激与えないでよ」

「いえ、万が一のことがないようにあらかじめ見えない結界を張ってるから大丈夫よ」

焦るお隣だったが核融合炉を刺激しないように対策は既に取られていた。それを

取ったのはもちろん咲夜たちではなく別の妖怪によるものだった。

「さとり様！　そうでしたか、ならばよかったです」

「もう準備は出来ているからいつでも始めていいわよ」

地霊殿の主、古明地さとりが奥から現れた。ペットのお燐、お空とは別のチームになつてしまい、試合が始まる少し前まで残念そうにしていた。しかし試合がもうすぐ始まるということでキリつとした顔をしていた。さとりは既に紫から指示を受けていたようにどんなバトルになるかは知っていた。

「分かりました。それでは皆さん試合を始めさせていただきます」

「でも咲夜さん、このチーム戦じゃ試合になりませんよ」

「分かっていますよ小悪魔さん。相手チームはお強いですからね。その辺りの調整はお願いしました」

皆が咲夜の方を向いており試合のルールが説明された。小悪魔が泣きつくもさとりは話に割って入った。どうやら紫と交渉してできる限り公平になるようにルールを変えてもらったようだ。

「咲夜さん。この勝負は私が仕切らせてもらってもよろしいでしょうか？　もちろんフェアに行いますとも」

「まあ勝手が分かっている者がしてもらった方が都合がいいからね。じゃあ頼むわ」

咲夜は紫からもらった進行表を手渡して司会役を分担してもらうことになった。

「結局何をやるのだ？ 我らは何も聞かされておらぬぞ」

「ええ。今回してもらおうバトルは一風変わったバトルです」

「その名もポケスロンという勝負です！」

ポケスロン。その名前を聞いた瞬間この場にいる数名のモンスターボールが反応した。特にホウオウとルギアに関して言えばパートナーの妹紅、輝夜のボールから勝手に飛び出した。懐かしいな、と言った言葉や俺が勝ち越しているからな、と言った言葉が出てきた。一方ビクティニは頭に疑問符を浮かべていた。全てのポケモンが知っているというわけではないようだ。

「何だいそれは。アタイたち聞いたことないけど」

「簡単に言えば様々な競技に力を合わせて挑戦するスポーツみたいなものです」

咲夜は皆に分かるように説明をした。ホウオウやルギアの住むジョウト地方が発祥の競技であり、パートナーと力を合わせて勝負するものであった。単にパワーだけでなくスピードやテクニクも要求されるため一方的な勝負にはなりにくかった。

「でもさとり様、じゃあどうして地霊殿でしなかったんですか？」

「アンタが暴れて屋敷が壊れたら困るからよ。ここなら核融合炉さえ結界張ればいいだけだからね」

さとりはお空が勝負をすると決まった時点で対策を講じていた。地上で戦うとポケモンよりも大暴れしてしまうのは火を見るよりも明らかだった。紫に協力してもらって結界を張ってもらった。だがそのせいで地霊殿には最近帰っていないかった。《今現在どうなっているのか》も把握できていなかった。

「でも面白そうね！ 早速やろうよ咲夜！」

「ええ。それでは参りましょう。第一試合はリングアウトファイトです」

さとりが指をパチンと鳴らすと地面からトランポリンが出てきた。しかし出てきた場所が最悪の場所だった。なんとフィールドの真下は核融合炉だった。このバトルは各チーム代表三名で地面に突き落とすというシンプルなものだった。トレーナーの介入なし以外は何でもありのルールだった。さとりと咲夜は一通りの説明を行った。

「う、うわあ……随分大味なバトルですね」

「もちろんこんな勝負ばかりではないから安心していいわよ。さあそれじゃ皆さん選出をお願いします」

小悪魔は疑っていたが一試合目はパワーが重視される試合だった。両チームとも相談の上何とか三名に絞ることができた。特に灼熱地獄チームはフランが出たいと渋ってしまったが温存してもらった。確実に勝ちにいくためにも考えなしはいけない。しかも相棒のビクティニはどちらかというスピードの方に自信があった。

「まずはアタイたちか」

「私の相棒の力見せてあげるわ！」

「私が出るのは構わないんだけど……問題はあっちよね」

灼熱地獄チームから選ばれたのは、お燐、サニーミルク、そして妹紅だった。妹紅の視線の先には地霊殿チームの選ばれた三名があった。

「あらやっぱり妹紅が出てくるのね。けちよんけちよんにしてあげるわ」

「うーん、勝てるかな……」

「それより早く終わらせたいたいね。僕の竹も燃えちやいそうだよ」

妹紅が出てくるならば当然出てくるのは輝夜だった。それをサポートするのは赤蛮奇と丁礼田舞であり、二人は口では輝夜ほどやる気ではなさそうだった。しかし大事な初戦に負けるつもりはなかった。

「それでは試合開始！」

六名のモンスターボールが熱く燃え滾る核融合炉上空に放り出された。

第三十四話 あくタイプ

「俺様の出番ニヤン！」

真つ先にリングに降り立ったのはヒールポケモンガオガエン。筋骨隆々なその肉体は今回の勝負にうってつけのポケ選だった。リングが舞台ということで誰よりも張り切っており、その中央で咆哮を上げていた。

「ガオガエン、アタイ応援しているから頑張れー！」

「頑張れー！」

「任せるニヤン！」

パートナーはもちろんお燐。二人からエールを受けたガオガエンはサムズアップしてお燐とお空の方をチラリと向いた。自信満々のようだった。他の五体も続々とリングに上がりやる気は満々だった。

「それでは……」

「スタートです！」

咲夜とさとりの合図によってゴングが鳴った。まず動き出したのはガオガエン。先手必勝、真正面の相手に向かって突進していった。自慢の技で早速カタを付けるつもり

だろう。

「ガオガエン！ ノクタスに向かってDDラリアット！」

狙いを付けたのは丁礼田舞の相棒ポケモン、ノクタスだった。ガオガエンは自身の燃え盛る体を回転させて竜巻のようにノクタスに向かっていった。悪タイプの技とはいえ、ガオガエンの体温では草タイプのノクタスには致命傷だろう。しかしノクタス、及び舞は微動だにしなかった。舞は持っている竹をバトンのように巧みに操り、ブンと振り下ろした。

「ニードルガードー！」

ただでさえトゲだらけのノクタスの体から無数の針が現れて全体を覆った。DDラリアットとニードルガードの接地面で火花が散っていた。確かに勢いのすさまじいラリアットだが完全防備形態のノクタスの方に軍配が挙がった。ガオガエンは吹き飛ばされて背中から叩きつけられた。

「大丈夫！」

「ああ、平気ニヤン。イテテ……」

ニードルガードは相手の攻撃を防ぐだけでなく、攻撃してきた相手にダメージを与える効果もある。迂闊に近づくところらの体力が削られてしまうので注意しなければならなかった。

「僕たちは真っ向から君たちに勝てるなんて思っていないからね」

「できる限りHP、削らせてもらおうぞ」

ノクタスは頭のハットのようなものに手をかざして右手をガオガエンに突き付けた。元々凄腕の仕事人であり、与えられた任務をそつなくこなしていた。任務によつては自身を犠牲にすることも厭わない性格の持ち主であり、隙のない相手だった。今回ではフィールドも相まつて、おそらく一番厄介であろうガオガエンの足止めを買つて出た。偶々ノクタスを狙つてくれたから都合がよかつたが、もしも他の者を狙つていたら横槍を差すつもりだった。

「厄介ね……あ、そうだわいいこと思いついた！　じごくづきよ」

「分かつたニヤン」

「無駄だ（よ）」

じごくづきをしに向かつてくるガオガエンを舞たちは再びニードルガードで迎え撃つ。しかし狙いはダメージを与えることではなかつた。

「今よ！　地面に叩きつけて！」

「ニヤアアーン！」

じごくづきはノクタスの足元に突き付けられた。地面はトランポリンとなっているため押し付けられた衝撃は上方に向かつて跳ね返された。ノクタスは防御していたた

めその場から動くことはできず高く跳ばされた。

「ノクタスー！」

舞は思わず叫んでしまったが、ノクタスに羽はなくリングの外に跳ねだされてしまった。ガオガエンの視界からノクタスは消え去り、2対3となった。

「これで何とかなったニヤン」

「ちよつとガオガエン！ 私のマホイップに何してくれているのよ！」

リングの外から文句を言ってきたのはサニーミルクだった。クリームポケモンのマホイップはサニーと組んでおり、ホウオウたちと比べると一際小さい。先程の衝撃はリング全体に広がっており味方もその影響を受けていた。体重の軽いマホイップは吹き飛ばされそうになるも、とけるでリングと一体化することで難を逃れていた。

「わ、悪かったニヤン」

「あ、暑いわ……溶けちゃいそう」

実際にデロデロに溶けており、早々に決着を付けなければならなかった。今相手の残りは輝夜のルギアと目の前にいるタイレーツだった。赤蛮奇の相棒ポケモンであるタイレーツも先程のじごくづきに耐えていた。六匹で一体のポケモンであり、この相手さえ何とかすれば灼熱地獄チームの勝ち濃厚だった。今もホウオウがルギアを食い止めてくれているからだ。

「やれやれ……君のノクタスが負けたから不利になったじゃないか」

「えっ……!!」

赤蛮奇は頭一つ動かさず目だけを下方に向けた後、隣の舞に目配せした。舞はびっくりした顔で赤蛮奇の方を向いたが赤蛮奇は無反応だった。一瞬考えた舞はハッと閃き、彼女の意図を感じ取った。

「う、うるさいよ！　そこまで言うなら君はあの二匹に勝てるのかい？」

ニヤリとした赤蛮奇は鼻で笑い大きな声でこう言った。

「もちろんだとも。さあ行こうか、タイレーツ」

「はっ！　今ここに我々の力を示すとき！」

じんけいポケモンタイレーツはその名の通りいつも隊列を成して行動するポケモンである。先頭にいるヘイチヨーと呼ばれるリーダーが全体を指揮し、一糸乱れぬ陣形をとる。格式ばった話し口調もヘイチヨーならではの。

「二対一で俺たちに勝てるんでも!!　ニヤアアアア!!」

「ウツ……」

「怯むな者ども！　我らの底力を見せつけてやるのだ!!」

「「「うおおおおお!!!」」」

ガオガエンがヒール役っぽく特性いかくを用いてタイレーツの士気と攻撃力を下げ

た。しかしこれがタイレーツには逆効果だったらしく一団のやる気は急上昇し、先程よりも力が増した。タイレーツの特性まけんきのおかげであった。

「ガオガエン、何威嚇してんのよ」

「つい、ついやってしまったニヤン」

「まあいいからガオガエン、やっちゃいなさい！」

何故かサニーがガオガエンに指示していることは置いておいて、ガオガエンは早速突撃した。クロスチョップでタイレーツを吹き飛ばした。しかしその程度でリング外に飛び出るほどヤワではなく、各々が各々の頭と足を持ち、まるで細長いバネのようにびよんびよんとたわんでいた。また、その反動を利用しててっぺんのタイレーツが力を込めた。

「そのままインファイト」

重力と反動を付けたインファイトがガオガエンを襲った。かわすよりも受けて立つ方が好きなガオガエンはその一撃を両腕でガードした。あくタイプにかくとう技は効果抜群である上に、攻撃力アップしたタイレーツのインファイトはよく効いた。ムキムキであるとはいえ既にダメージを負っている身であるためそれほど長くは居られなかった。

「ふうん、やるじゃん」

「任せて。今度は私たちの番よ！ マジカルシャイン！」

「こらえるよ」

「「「ふおおおおお!!!」」」

フェアリー技を受けては流石のタイレッツも耐えられそうにない。しかしこらえることによつて体力ギリギリに保つことができる。これも団体が成せる技であった。

「我々は赤蛮奇殿の戦士。ここを退くわけにはいかぬのだ！」

「いいニヤンね！ 俺はお前たち気に入ったニヤン！」

肩で息をしながらも統率された陣形を組み、相棒である赤蛮奇の勝利のため全力を振り絞る。それを見たガオガエンはますますヒートアップした。自分が燃えているからこそ燃え滾る勝負が大好物なのだ。

「……あ、ありがとう。じゃ、行くよ。インファ……」

ガオガエンに手痛い一撃を加えようと足に力を入れて向かおうとしたがグンと引つ張られた。動こうとしてもその場から動けずじまつた。六匹が足元を確認してみると地面に何かがへばりついていた。

「へっへん！ さっきの攻撃の間にクリームを撒いておいたのよ！」

サニーは自信満々にタイレッツの足元を指差した。マジカルシャインに紛れてマホイップは体からクリームを飛ばしており、粘着性のあるそれは相手の動きを封じる有用

な攻撃手段だった。前から突撃してくるガオガエンに抵抗する術もなくまさに絶体絶命。動けないタイレーツは一つの賭けに出た。

「はいすいのじん」

「ニヤ!？」

ここでまさかの受け身の態勢を取った。体力限界ギリギリにもかかわらず横一列に整列してガオガエンのDDラリアットを凌いだ。確かに動けなくなる代わりに能力がパワーアップする効果はあるがこの状態で行うのは無謀かに思えた。だがその無茶を通すのがタイレーツの底力だった。パワーが上がったことで足にへばりついたクリムも無理矢理引きちぎり移動可能になった。

「ああ! 私のカリウムが!？」

「マホイップ、小細工は通用しないニヤン。ここからは正々堂々と……」

力を合わせて戦おう。そう言おうと後ろを振り向いた瞬間、マホイップの背後にここにいるはずのない緑色のポケモンが存在していた。

「正々堂々に興味はない」

「ニードルアーム」

鋭い目で放たれたパンチがマホイップの体を捉えた。そのまま吹き飛ばされたマホイップは炉の中に一直線に落下していった。

「マホイップー!!!」

「マホイップ脱落です」

本日初めての脱落者はマホイップとなった。